

茨城県教育財団文化財調査報告第362集

水戸城跡

茨城県立水戸第三高等学校図書館
改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県教育委員会
財団法人茨城県教育財団

水 戸 城 跡

茨城県立水戸第三高等学校図書館
改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 24 年 3 月

茨城県教育委員会
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、健全な青少年の育成と充実した教育の実施のため、耐震補強等の現状に即した校舎の改築、より豊かな人間性と知識を育むための教育施設の建設が計画的かつ迅速に進められています。

茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事は、茨城県教育委員会が老朽化した図書館を改築し、一層の教育振興を図るために、計画されたものです。しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である水戸城跡が所在することから、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県教育委員会から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成22年6月から平成22年10月までの5か月間にわたり、これを実施しました。

本書は、水戸城跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として頂ければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県教育委員会から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成24年3月

財團法人茨城県教育財團
理事長 鈴木欣一

例　　言

- 1 本書は、茨城県教育委員会財務課の委託により、財団法人茨城県教育財團が平成 22 年度に発掘調査を実施した、茨城県水戸市三の丸 2 丁目 7 番地の 27 に所在する水戸城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
　調査 平成 22 年 6 月 1 日～ 10 月 31 日
　整理 平成 23 年 5 月 1 日～ 9 月 30 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	仲村浩一郎
首席調査員	小澤重雄
調査員	松林秀和
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、調査員松林秀和が担当した。
- 5 第 2A 号石組み遺構から採取した土壤の寄生虫卵分析、第 2A 号石組み遺構及び第 24 号土坑から出土した木材の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。
- 6 本書の作成にあたり、水戸城二の丸御殿の部屋割図を、那珂市在住の小宅近昭氏に資料を提供頂いた。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 41.640 m, Y = + 58.280 mの交点を基準点（A 1al）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3, …oとし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 al 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	P - ピット PG - ピット群 SA - 桂穴列跡 SD - 溝跡 SE - 井戸跡 SF - 道路跡
	SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 SX - 不明遺構
遺物	DP - 土製品 G - ガラス製品 M - 金属製品 P - 土器・陶磁器 Q - 石器・石製品 T - 瓦
	TP - 拓本記録土器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は100分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (2) 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■	焼土	■	炉・火床面・石・被熱痕
■	窓部材・粘土範囲・砂範囲・炭化材・黒色処理	■	油煙・煤・墨痕
●	上器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ■瓦	—	—硬化面

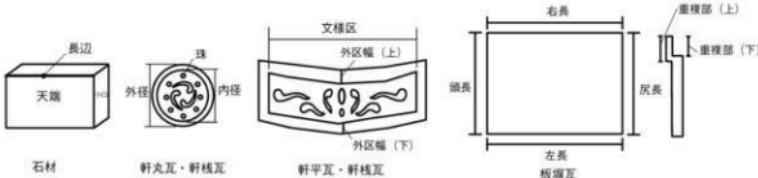
4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位はm, cm, kg, gである。なお、現存値は〔 〕で、推定値は〔 〕を付して示した。
- (2) 遺物観察表の備考欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は、窓を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 瓦及び石組みの石材等についての計測位置は、下図に示したとおりである。



目 次

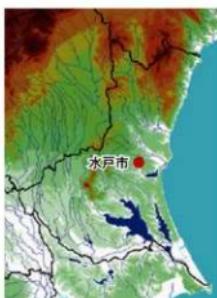
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	5
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	12
第1節 調査の概要	12
第2節 基本層序	12
第3節 遺構と遺物	14
1 平安時代の遺構と遺物（第9次面）	14
(1) 第9次面	14
①堅穴住居跡	14
②溝跡	17
③柱穴列跡	19
④ピット群	20
⑤遺構外出土遺物	21
2 中世の遺構と遺物（第9・8・7・6次面）	21
(1) 第9次面	22
①火葬土坑	22
②土坑	22
(2) 第8次面	24
①柱穴列跡	24
②ピット群	26
③不明遺構	27
④遺構外出土遺物	27
(3) 第7次面	28
①井戸跡	28
②溝跡	30
③ピット群	31
④遺構外出土遺物	32
(4) 第6次面	33
①井戸跡	33
②炉跡	35
③土坑	35

④溝跡	37
⑤柱穴列跡	37
⑥ピット群	39
⑦遺構外出土遺物	41
(5) 中世遺構一覧表	42
3 近世の遺構と遺物（第4・5・3次面）	43
(1) 第4次面	43
①石組み遺構	43
②土坑	51
③ピット群	62
④遺構外出土遺物	64
(2) 第5次面	67
①石組み遺構	67
②ピット群	70
③遺構外出土遺物	72
(3) 第3次面	74
①用排水路跡	74
②石敷き遺構	80
③土坑	84
④柱穴列跡	86
⑤ピット群	89
⑥遺構外出土遺物	92
(4) 近世遺構一覧表	94
4 近代の遺構と遺物（第2次面）	95
(1) 第2次面	95
①用排水路跡	95
②道路跡	98
③溝跡	100
④瓦溜まり	101
⑤土坑	103
⑥ピット群	106
⑦遺構外出土遺物	106
(2) 近代遺構一覧表	107
5 遺構外出土遺物（第1次面）	108
調査区北壁土層断面図	110
調査区位置図	111
水戸城跡近世（第3～5次面）遺構全体図	112
第4節 まとめ	113
付 章	121
写真図版	PL 1～PL18
抄 錄	

水戸城跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

水戸城跡は、JR常磐線水戸駅の北側、那珂川と桜川に挟まれた、水戸市街を眼下に望む標高30mの台地上に位置しています。今回、茨城県立水戸第三高等学校の図書館改築工事に伴い、遺跡の記録保存を目的として、茨城県教育財団が、平成22年度に発掘調査を実施しました。



調査区全景（南側から）

調査の内容

調査区の面積は270m²で、一帯は、鎌倉時代から現在まで、屋敷や城、学校など、様々な形で利用されてきた歴史があります。今回の調査で、現在の地面の下に、九つの面を確認することができました。上から、確認できた面を第1～9次面としました。第1次面は現代の面で、以下近代から古代にわたっています。



調査区の壁面で確認できた整地面の土層断面

調査は、時期の新しい面から行い、
調査が終了したら次の面の調査に移る
という方法で行いました。

第2次面は明治時代～昭和、第3～
5次面は江戸時代、第6次面は安土・
桃山時代、第7・8次面は室町時代、
第9次面は平安時代～鎌倉時代になる
と考えられます。第9次面からは平安
時代（約1,100年前）の竪穴住居跡と中世の火葬土坑が確認でき、この面では
盛土などが行われていないことが分かりました。第8次面は、出土遺物などから、
上の第7次面と近い時期と考えられ、一度の改修の中で、何度も盛土を行
っていた可能性があります。第6・7次面からは井戸跡が確認でき、当時の生
活面であったと考えられます。

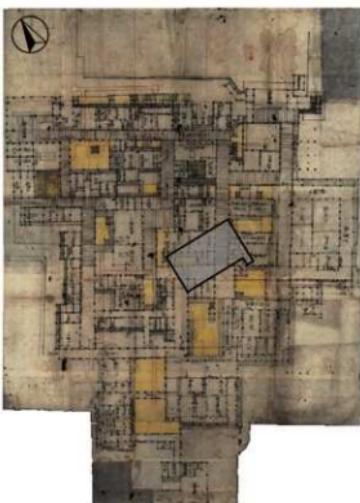


平安時代の住居跡（第9次面）

第3～5次面
は、今回の調査の
中心となる江戸時
代です。調査区の
周辺は水戸城の二
の丸にあたり、残
された絵図面との
対応から、徳川氏
によって築かれた
二の丸御殿のほぼ
中央に位置すると
考えられます。

この時期の遺構
は、凝灰岩の切石
を使用した石組み

遺構や同じ石材を凹字状に加工した用排水路跡などが確認できました。凝灰岩は、みとこうもん水戸黄門として知られる、2代水戸藩主の徳川光圀によって作られた
かまはらすいどう笠原水道でも用いられており、当時は、この石材が良く使われていたことが分
かります。



二の丸御殿の部屋割図と調査区の推定位置



石組み遺構（第4次面、写真上の二つ）



直線状に延びる用排水路跡（第3次面）

出土遺物は、土師質土器の皿や火鉢、陶磁器、大量の瓦などがあります。出土した陶器の中には、9代水戸藩主の徳川斉昭によって始められた七面焼の灯明皿や土瓶なども見られます。



第4次面で出土した遺物



七面焼の土瓶（第3次面出土）



七面焼の灯明皿（第3次面出土）

第2次面は、明治時代以降です。水戸城がその歴史に幕を下ろした後、その跡地に、茨城県尋常師範学校が移転してきました。この面の遺構からは「師」の文字がプリントされた磁器が出土しており、師範学校で支給されたものと思われます。城から学校へとその役割は変わりますが、江戸時代の用排水路跡に新たに陶製の土管を設置して使用するなど、水戸城の構造を利用して建てられていることが分かりました。



「師」の文字が入った磁器

調査の結果

今回の調査で、様々な時代に行われた大規模な整地の様子を確認することができました。整地が何度も行われていることから、調査区周辺は、この地域を治める者にとって、とても重要な場所であったことが分かります。その中でも、江戸時代の生活面が2面確認できたことは、改修の記録と一致し、史実を裏付ける興味深い結果となりました。また江戸時代の石組み遺構や用排水路跡が確認できたことは、詳しいことが分かっていなかった水戸城の二の丸御殿の様子を知る上で、重要な資料となります。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県教育委員会財務課は、水戸市において、県立水戸第三高等学校図書館の改築事業を進めている。

平成21年9月16日、茨城県教育委員会財務課は、茨城県教育委員会教育長に対して、県立水戸第三高等学校図書館改築事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成21年9月17日に現地踏査を、平成21年9月25日に試掘調査を実施し、水戸城跡の所在を確認した。

平成21年12月7日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県教育委員会財務課に対して、事業地内に水戸城跡が所在すること、及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成22年1月8日、茨城県教育委員会財務課は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、茨城県教育委員会財務課あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成22年2月16日、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年3月9日、茨城県教育委員会財務課は、茨城県教育委員会教育長に対して、県立水戸第三高等学校図書館改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年3月15日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県教育委員会財務課に対して、水戸城跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、茨城県教育委員会財務課から埋蔵文化財発掘事業について委託を受け、平成22年6月1日から10月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

水戸城跡の調査は、平成22年6月1日から10月31日までの5か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	6月	7月	8月	9月	10月
調査準備 表土除去 遺構確認					
遺構調査					
遺物洗浄 注写真整理					
補足調査 撤収					

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

水戸城跡は、茨城県水戸市三の丸2丁目7番地の27に所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置し、北は那珂市・東茨城郡城里町、東はひたちなか市・東茨城郡大洗町、南は東茨城郡茨城町、西は笠間市と接している。当市は、江戸時代に水戸徳川家の城下町として栄え、明治時代以降は県庁所在地として、本県の政治、経済、文化の中心地となっている。

市域の地形は、西部が八溝山地中央部の鶏足山塊に属する標高60～200mの丘陵地、中央部が茨城台地の北東部にあたる標高20～30mの水戸台地、北部の一部が標高30～40mの那珂台地、北部から東部へ流れる那珂川の流域が標高10m以下の沖積低地からなり、このうち台地部が最も広い地域を占めている。また、水戸台地は那珂川の支流である沢渡川、桜川、逆川によって上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地に分けられ、当遺跡は上市台地の先端部に位置している。

台地の地質は、古生代の鶏足層を基盤とし、下層から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘疊層の上市層、灰白色粘土の常緑粘土層、関東ローム層の順に堆積している。また、低地部は沖積谷に河川堆積物である紗綿層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる。

当遺跡は、水戸市街地の中心部、JR常磐線水戸駅の北側に位置し、北の那珂川、南の千波湖と桜川に挟まれ、南東にせり出した舌状台地上、那珂川右岸の標高30mの台地上に立地しており、低地との標高差は約20mに及ぶ。城の構造は、東西に細長く延びる台地を堀や土塁で区画した連郭式平山城であり、東から東二の丸（淨光寺曲輪・下の丸）、本丸、二の丸、三の丸が配置されている。現在は、学校施設や県三の丸庁舎（旧県庁舎）、県立図書館などが建つ文教地区となっているほか、本丸と二の丸の間の堀がJR水郡線、二の丸と三の丸の間の堀が県道市毛水戸線として利用されている。

今回の調査地は、茨城県立水戸第三高等学校敷地内、旧二の丸御殿のほぼ中央部分にあたる。調査前の現況は学校用地である。

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する水戸市は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く確認されている¹⁾。ここでは、当遺跡に関連する周辺遺跡を中心に、時代ごとに記述する。

旧石器時代は、十万原台地上のニガサワ遺跡、二の沢²⁾B遺跡、ドウゼンクボ遺跡などで石器が採集されており、十万原遺跡では石器集中地点や集石土坑などが確認されている²⁾。

縄文時代には、愛宕町遺跡、アラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡などが上市台地の縁辺部に位置し³⁾、この地域が早い時期から生活域として利用されていたことがわかる。また、『常陸國風土記』に巨人伝説が記され⁴⁾、古代からその存在が知られていた大串貝塚をはじめ、柳崎貝塚（40）や吉田貝塚（26）、安楽寺遺跡など、那珂川・桜川の流域が生活に豊かな資源を与える生活に適した場であったことがうかがえる。

弥生時代に入ると那珂川流域の台地上を中心に遺跡や遺物が確認されており、上市台地上においては、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などがあげられる。

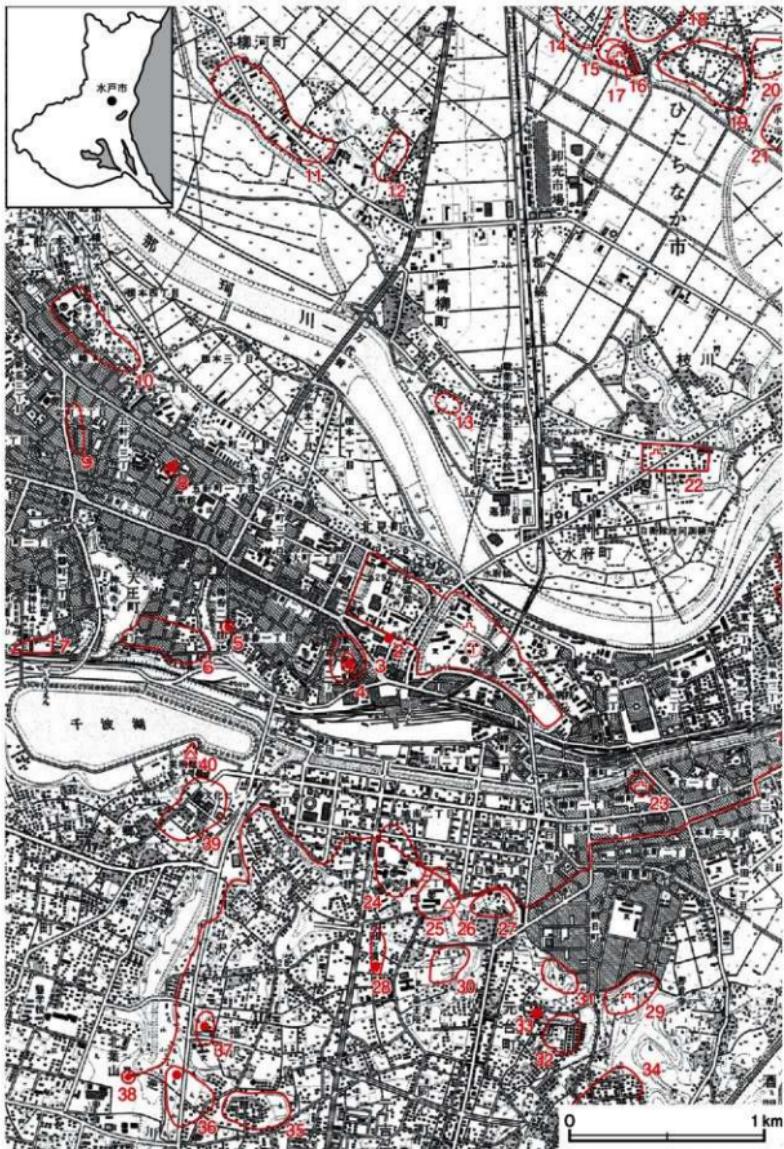
古墳時代の上市台地上の遺跡としては、^{あまたごやま}愛宕山古墳群があり、国指定史跡である愛宕山古墳が存在している。県内では石岡市の舟塚山古墳、常陸太田市の^{ふなづかやま}梵天山古墳に次ぐ全長136.5mの大形前方後円墳である。また、^{なげわたり}台渡里遺跡では一辺75mと推定される方形の堀がめぐる豪族居館跡が発見されている^⑤。

奈良・平安時代の当遺跡周辺は、那賀郡常石郷に比定されている。当時代の主な遺跡としては、国指定史跡の^{なげわたり}台渡里廃寺跡があげられる。長者山地区が那賀郡衙の正倉院に比定されており、觀音堂山地区では7世紀後半、南方地区では9世紀後半の時期の異なる寺院跡が確認されている。また、周辺にはアラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡、台渡里遺跡、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などが分布しており、台渡里廃寺跡を中心としたこれらの遺跡群は、那賀郡の郡庁院、正倉院、寺院、集落が一体となった官衙関連遺跡として捉えられている^⑥。

中世以降になると、水戸地方においても戦乱が続き、多くの城館が築かれている。当遺跡周辺の主な中世城館跡は、大掾氏の一族である吉田氏の居館と考えられる吉田城跡（29）、大掾氏の支城として築かれ、その後江戸氏の一族、春秩氏の居城であったとされる見川城跡、大掾氏配下の宍戸氏の居所とされる中河内館跡（13）や長者山城跡などがある。また、那珂川流域では枝川城跡（22）、堀口館跡、武田館跡、勝倉城跡、西木倉館跡、市毛館跡、郡河台地上においては島崎館跡、福田中坪館跡、玄蕃山館跡、原坪館跡、藤咲丹後館跡、高野氏館跡、堀の内館跡、新地館跡などの多くの城館跡が確認されている。那珂川を望む台地上において、有力領主層を頂点とする領地支配のネットワークがみてとれ、政治的・軍事的に重要な地であったことがうかがえる^⑦。

水戸城は、平安末期から鎌倉時代初期に常陸大掾馬場資幹が館を構えたのが始まりで、当初は馬場城と呼称されていた。馬場氏は大掾職を世襲していたため、現石岡市の府中に居住していたと考えられることから、馬場城は支館であり、その規模も小さかったと推定されている。次いで応永33年（1426）、河和田城主江戸道房が大掾満幹の留守に水戸城を占拠し、以来165年間、江戸氏の支配が続いた。江戸氏時代の水戸城は、居館のあった内城とその外郭である宿城からなり、城郭としての構えが成立したと考えられている。天正18年（1590）、太田城の佐竹義重・義宣が江戸氏を討伐し、本拠を太田城から水戸城へ移し、領国の中心と定めた。内城を本丸、宿城を二の丸とし、また二の丸の外側にも郭を造り、三の丸としたと伝えられている^⑧。さらに、大掾氏時代からの古い水戸明神や淨光寺のある側にも淨光寺曲輪を設けるなど、文禄2年（1593）から慶長7年（1602）ごろまで積極的に城郭の修築・拡張をおこなった。城下町においても三の丸の門前に町人町が定められ、城郭は町人町からはっきりと分離されるなど、徳川時代の城郭及び城下町の基礎は佐竹氏の時に築かれた。慶長7年（1602）5月、佐竹氏は徳川家康に秋田へ転封を命じられ、同年11月には家康の第五子武田信吉が水戸城に入封する。しかし、翌年病死したため、家康第十子の頼宣が城主となる。続いて第十一子頼房が水戸徳川家の初代藩主となり、水戸藩の基礎をなした^⑨。頼房は寛永2年（1625）に城の大修築を始め、二の丸を本丸とし、大手橋をつくった。寛永5年（1628）には、本丸多聞・二の丸帯曲輪・田町水門の普請が行われ、寛永15年（1638）には、三の丸の南北の郭門・南見付・荒神見付などもつくられた。城下町に関しては、寛永2年に町人を移住させた田町周辺が下町、それに対して城郭部分の台地上は上町と呼ばれ、整備拡張が行われた。曲輪間を区画する堀もこの徳川時代のものとされている。このような整備拡張が行われたが、上町・下町とともに上用水の確保は困難であった。そこで徳川光圀は寛文2年（1662）、笠原不動谷の湧水を引くための笠原水道の建設に着手し、翌年完成させた^⑩。天保12年（1841）には、徳川昭喜によって藩校である弘道館が開かれた。

その後、幕末の争乱を迎える。水戸城周辺でも倒幕派と佐幕派による弘道館の戦いが起り、明治4年（1871）には廢城令が公布され、翌年、放火によりほとんどの建物が焼失した。明治21年（1888）、水戸城二の丸跡に



第1図 水戸城跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「水戸」「ひたちなか」）

表1 水戸城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	水戸城跡				○	○	○		21	市毛上坪遺跡			○	○	○		
2	無名古墳			○					22	枝川城跡						○	
3	東照宮境内遺跡		○						23	武熊故城						○	
4	東照宮境内古墳群			○					24	お下屋敷遺跡		○	○	○	○		
5	梅香火葬墓跡				○				25	水戸南高校遺跡		○	○	○			
6	笠神町遺跡	○							26	吉田貝塚	○						
7	七面製陶所跡						○		27	吉田神社遺跡			○	○	○		
8	五軒町古墳群			○					28	吉田古墳群			○				
9	並松町遺跡	○							29	吉田城跡						○	
10	藤井町遺跡	○	○						30	薬王院東遺跡		○	○		○		
11	柳河町遺跡		○	○	○				31	安楽寺遺跡	○						
12	反町遺跡		○	○					32	大鋸町遺跡	○		○	○			
13	中河内館跡					○			33	大鋸町古墳				○			
14	津田若宮遺跡	○	○	○	○	○			34	横宿遺跡	○	○	○				
15	天神山遺跡	○	○	○	○	○			35	米沢町遺跡		○	○	○			
16	天神山古墳				○				36	福沢古墳群				○			
17	天神山城跡	○	○	○	○				37	払沢古墳群				○			
18	西中島遺跡	○	○	○	○				38	笠原水道						○	
19	上馬場遺跡	○	○						39	下本郷遺跡	○						
20	津田久保遺跡			○	○				40	柳崎貝塚	○						

は、小学校の教員を養成するために開設された、茨城県尋常師範学校（開設当初は拡充師範学校と呼称）が移転してきた。その後、第二次世界大戦の昭和 20 年（1945）の水戸大空襲により、三階櫓なども焼失し、現在、当時の様子をうかがえる城郭施設はほとんど残っていない。現存するものでは、弘道館が昭和 27 年に国指定特別史跡に、弘道館政庁・至善堂・正門・塀が昭和 39 年に国指定重要文化財に、土壘・空堀が昭和 42 年に県指定史跡に、薬医門が昭和 58 年に県指定有形文化財にそれぞれ指定されている。

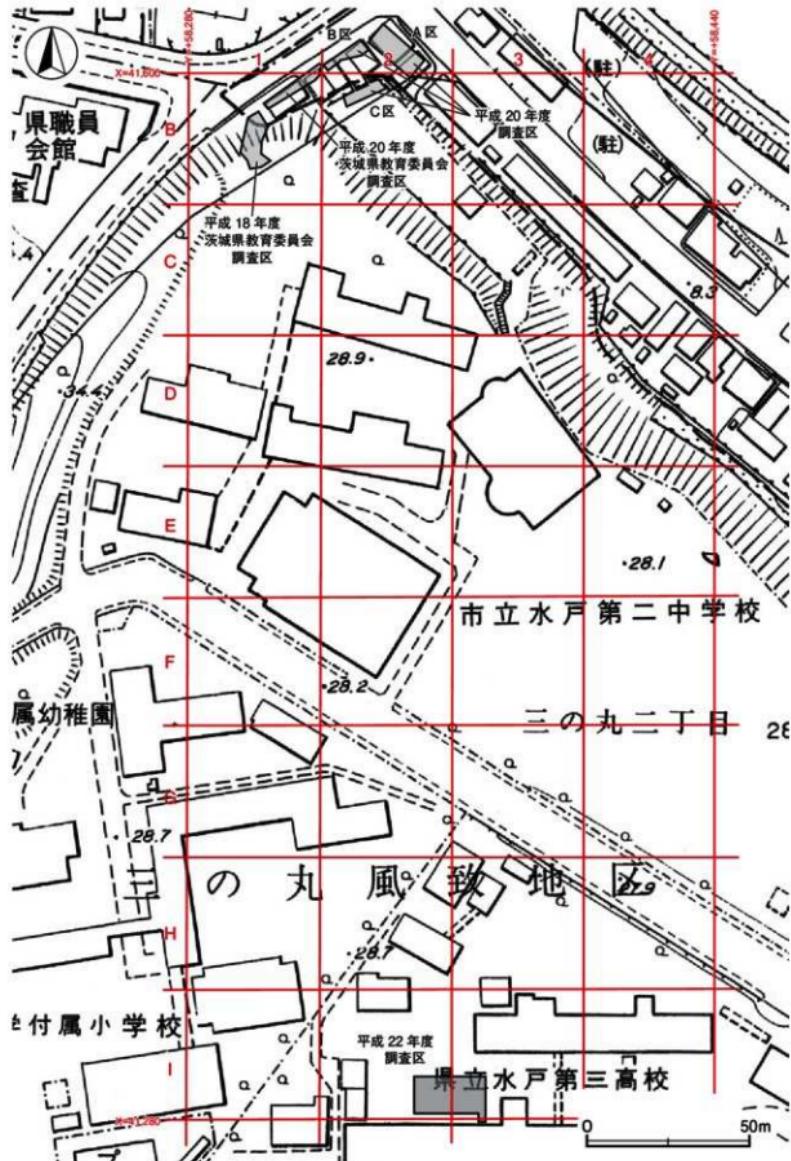
*文中の（ ）内の番号は、第 1 図及び表 1 の当該遺跡番号と同じである。なお本章は財団報告第 329 集を基にし、若干加筆したものである。

註

- 1) 茨城県教育厅文化課「茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）」茨城県教育委員会 2001 年 3 月
- 2) 皆川修「十万里地区市街地開発事業地内市街地開発事業地理藏文化財調査報告書「十万里遺跡 1」「茨城県教育財团文化財調査報告」第 179 集 2001 年 3 月
- 3) 水戸市史編さん委員会「水戸市史 上巻」水戸市 1963 年 10 月
- 4) 『常陸國風土記』那賀郡条「平津駅家。西一二里有岡。名日大拂。上古有入。體施長大。身居丘堅之上。採獵食之。其所食具。積聚成岡。時人取大朽之義。今謂大拂之岡。」
- 5) 茨城大学人文学部考古学研究室「水戸市台渡里遺跡（茨大運動場地点）発掘調査現地発表会資料」2008 年 9 月
- 6) 佐々木藤雄他「台渡里廐寺跡－市道常磐 17 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）－」「水戸市埋蔵文化財報告書」第 4 集 水戸市教育委員会 2006 年 3 月
- 7) 井上琢哉「加倉井忠光館跡主要地方道水戸茂木線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第 294 集 2008 年 3 月
- 8) 茨城地方史研究会「茨城の歴史 県北編」茨城新聞社 2002 年 5 月
- 9) 水戸市史編さん委員会「水戸市史 中巻（一）」水戸市 1968 年 8 月
- 10) 註 9) と同じ

参考文献

- 経済企画庁「土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう」「水戸」1969 年
茨城県史編集委員会「茨城県史 中世編」茨城県 1986 年 3 月
茨城県史編集委員会「茨城県史 近世編」茨城県 1985 年 3 月



第2図 水戸城跡調査区設定図（水戸市都市計画図 2,500 分の 1）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

水戸城跡は、水戸市北部を東流する那珂川右岸の台地上に立地している。

調査区は、標高約30mの舌状台地上（水戸三校敷地内普通教室棟南側）に位置し、水戸城旧二の丸御殿のほぼ中央部にある。調査前の現況は学校用地で、調査面積は270m²である。

今回の調査では、整地面や基礎地盤などを含めて、調査区を1次面から9次面まで分けた。文献に記録の残る改修事業や火災などの痕跡と層の対応や各面の遺物から時期決定を行い、近世の水戸城を中心に、徳川氏以前の水戸城の様相についても確認することを目的としている。

遺構は、堅穴住居跡1軒（平安時代）、火葬土坑1基（中世）、炉跡1基（中世）、井戸跡2基（中世）、道路跡1条（近代）、溝跡4条（平安時代1条、中世2条、近代1条）、石組み遺構3基（近世）、用排水路跡5条（近世2条・近代3条）、石敷き遺構1基（近世）、瓦溜まり6基（近代）、土坑16基（中世5基・近世10基・近代1基）、柱穴列跡5条（平安時代1条、中世2条・近世2条）、ピット群9か所（平安時代1か所・中世3か所・近世4か所・近代1か所）、不明遺構1基（中世）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）で163箱出土している。主な遺物は、土師器（壺・高台付壺・甕）、須恵器（壺・蓋・短頭壺・甕）、土師質土器（小皿・灯明皿・内耳鍋・鍋・鉢類・甕）、瓦質土器（植木鉢・鉢・甕・香炉）、陶磁器（碗・菊皿・蓋・擂鉢・壺・土瓶・甕）、瓦（軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・軒棟瓦・棟端瓦・板端瓦・棟込瓦・熨斗瓦・雁振瓦・鳥糞）、金属製品（釘・鍵・剃刀・煙管・錢貨）、土製品（五德・泥面・彈碁石）、石器・石製品（削器・石杵・茶臼）などである。

第2節 基本層序

調査区の北壁と西壁で堆積状況の観察を行った。各層の観察結果は以下の通りである。北壁と西壁で、14層に分層した。なお層の上面が生活面として利用されているものを整地層、人為的に盛土が行われている層を地業層として記述する。

調査区北壁

第1層は、暗褐色を呈する整地層である。部分的に粘土ブロックを多く含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は10～20cmである。

第2層は、暗褐色を呈する整地層である。円窓を少量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は8～16cmである。所々に炭化物が中量、堆積している状況が確認できることから、火災の後に整地が行われたと考えられる。

第3層は、灰褐色を呈する整地層である。ローム粒子を多量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は26～32cmである。

第4層は、暗褐色を呈する整地層である。ロームブロック・焼土ブロック・炭化物を微量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は16～32cmである。

第5層は、にぶい褐色を呈する地業層である。円窓を多量に含み、粘性・締まりともに強く、層厚は16～

42cmである。第4層との境界は平坦ではなく、凹凸がみられる。

第7層は、暗褐色を呈する整地層である。ローム粒子・炭化粒子・円礫を少量、焼土粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は24～40cmである。

第8層は、暗オリーブ褐色を呈する整地層である。ローム粒子を少量含み、締まりは強く、層厚は16～32cmである。

第9層は、黒褐色を呈する地業層である。ローム粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は12～28cmである。本層は、第8層との境界が平坦ではなく、凹凸がみられる。

第10層は、黒色を呈する整地層である。ローム粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は20～28cmである。

第11層は、黒色を呈する自然堆積層である。黒色バミスを少量含み、粘性・締まりは普通で、層厚は4～10cmである。

第12層は、黒色を呈する自然堆積層である。赤色粒子を微量含み、締まりは強く、層厚は30～32cmである。

第13層は、黒褐色を呈するローム層の漸移層である。ローム粒子を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は42～48cmである。

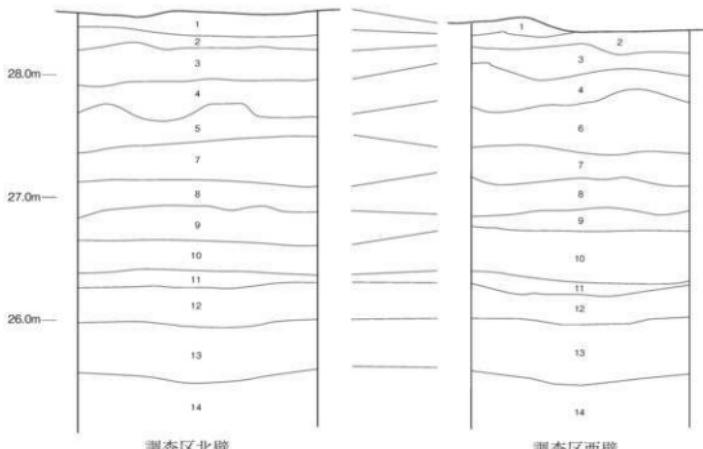
第14層は、暗褐色を呈するローム層である。ローム粒子を中量含み、粘性・締まりとともに強い。下層は未掘のため、本来の層厚は不明である。

調査区西壁

第1～4層、第7～14層は、北壁・西壁とも共通する。

第6層は、オリーブ褐色を呈する地業層である。焼土粒子を少量、炭化材・粘土ブロック・円礫を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は28～50cmである。北壁の第5層に相当する。

第2層の上面を2次面、第3層の上面を3次面、第4層の上面を4次面、第5・6層の上面を5次面、第7層の上面を6次面、第8層の上面を7次面、第10層の上面を8次面、第11層の上面を9次面とし、各次面で造構が確認された。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

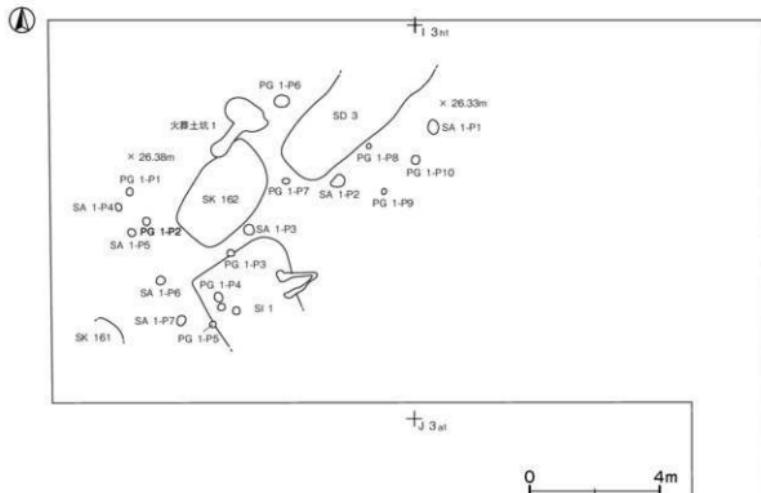
本節は、時代別に項目を設け、その中で各次面（古い順に第9～1次面）ごとに記述を行う。当調査区一帯は、中世以降、現代まで改修を繰り返しながら、土地利用されてきた。本調査で、調査区が9次面に分けられることが確認され、改修の一端が垣間見える。各時代を次面ごとに記述し、改修と土地利用の過程を、時系列で捉える。なお、第1次面は、現代の整地面であることが確認でき、遺物のみを報告の対象としている。

1 平安時代の遺構と遺物（第9次面）

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、柱穴列跡1条、ピット群1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

（1）第9次面（第4図）

平安時代の住居と、中世の火葬土坑が確認されており、改修が行われる以前の、自然堆積層を地山として遺構が構築されている。



第4図 第9次面全体図

①竪穴住居跡

第1号住居跡（第5・6図）

位置 調査区南部のI2J9区、標高26.4mの台地上に位置している。

重複関係 第1号ピット群P3～P5、第2号ピット群P11に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びており、また南東コーナー部が搅乱を受けているために、北東・南西軸は297mで、北西・南東軸は298mしか確認できなかった。主軸方向はN-62°Eで、方形と推定される。壁高は23~38cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで118cmで、燃焼部幅は36cmである。袖部は、地山を掘り残して基部とし、粘土粒子を主体とした第20・21層を積み上げて構築されている。火床部は床面から10cmくぼんでおり、赤変、硬化ともに確認できない。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床部から階段状に立ち上がっている。

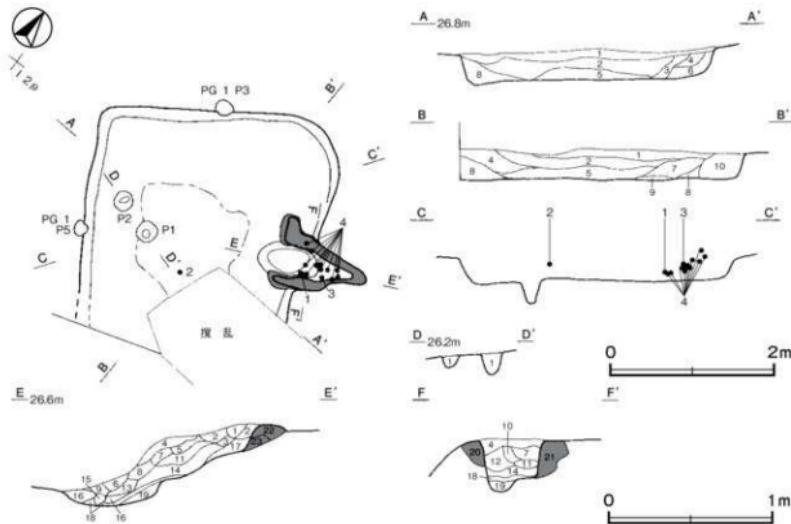
竈土層解説

1 黒 色	燒土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	13 極暗赤褐色	燒土粒子少量
2 黒 褐 色	燒土粒子・炭化粒子微量	14 暗赤褐色	燒土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
3 暗赤褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・粘土粒子微量	15 赤褐色	燒土粒子中量、ローム粒子少量
4 黒 褐 色	燒土粒子・粘土粒子微量	16 黒褐色	炭化粒子微量
5 黒 褐 色	燒土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	17 赤褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量
6 褐 色	ローム粒子微量	18 極暗褐色	ローム粒子微量
7 暗赤褐色	燒土粒子・粘土粒子少量	19 黑褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
8 暗褐色	燒土ブロック微量	20 暗赤灰色	燒土粒子中量、ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子微量
9 暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量	21 暗褐色	燒土粒子・粘土粒子少量
10 黒 褐 色	ローム粒子・燒土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	22 暗赤褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
11 黒 褐 色	燒土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	23 黑褐色	ローム粒子・燒土粒子・粘土粒子微量
12 黒 褐 色	粘土粒子少量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量		

ピット 2か所。P1は深さ26cmで、位置や硬化面の広がりから出入り口に伴うピットと考えられる。P2は深さ14cmで、性格は不明である。

ピット土層解説(各ピット共通)

1 黒 色	ローム粒子微量
-------	---------



第5図 第1号住居跡実測図

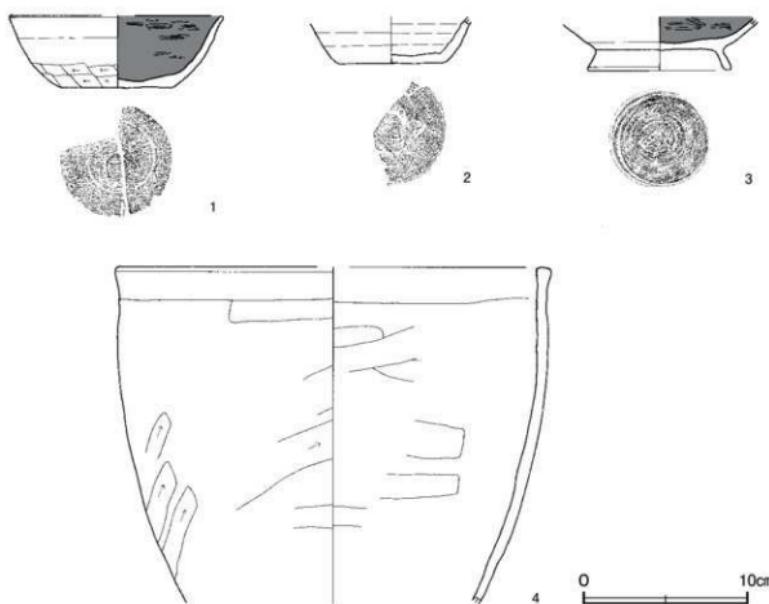
覆土 10層に分層できる。均質な黒色土と暗褐色土が周囲から流れ込んでいる堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒 褐 色	炭化粒子微量 (2層よりやや明るい色調)	6 黒 褶 色	ローム粒子少量
2 黒 褐 色	炭化粒子微量	7 黒 褶 色	ローム粒子微量 (4層よりやや明るい色調)
3 黒 褶 色	ローム粒子中量	8 暗 褶 色	ローム粒子微量
4 黒 褶 色	ローム粒子微量	9 暗 褶 色	ローム粒子微量 (8層よりやや明るい色調)
5 焦 暗 褶 色	ローム粒子微量	10 黒 褶 色	炭化物・ローム粒子微量

遺物出土状況 土器片49点 (环28, 高台付碗1, 瓶18, 瓶2), 須恵器片32点 (环15, 高台付环1, 盖1, 瓶15), 鉄滓1点 (745g) が出土している。また、流れ込みによる縄文土器片1点 (深鉢) が出土している。1は竈の覆土中層, 3は竈の覆土上層から出土している。4は竈の覆土上層と燃焼部から出土した破片が接合したものである。2は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居出土遺物観察表 (第6図)

番号	種 別	形 様	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
1	土器器	环	[13.0]	4.4	6.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	全体内面へラ剥き 体部下端手持ちへラ削り	竈覆土中層	50%
2	須恵器	环	-	(28)	[6.4]	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	全体外端ナデ	竈土中層	20%
3	土器器	高台付碗	-	(3.2)	8.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	全体内面へラ剥き 底部回転へラ削り後、高台	竈覆土上層	30% PL. 9
4	土器器	瓶	[26.4]	(20.5)	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口縁部ロクロナデ 体部外・内面へラ削り	竈覆土上層 燃焼部	20% PL. 9

②溝跡

第3号溝跡 (SE 2) (第7・8図)

位置 調査区北東部のI 2 b0区。標高 268 mの台地上に位置している。

規模と形状 I 2 i0区から北東方向(N - 41° - E)に直線状に延び、北端が調査区域外に延びているため、長さは4.00 mしか確認できなかった。規模は上幅205 m、下幅0.90m、深さ82cmほどで、横断面は東側に向かってなだらかに立ち上がり、中位に段を有している。

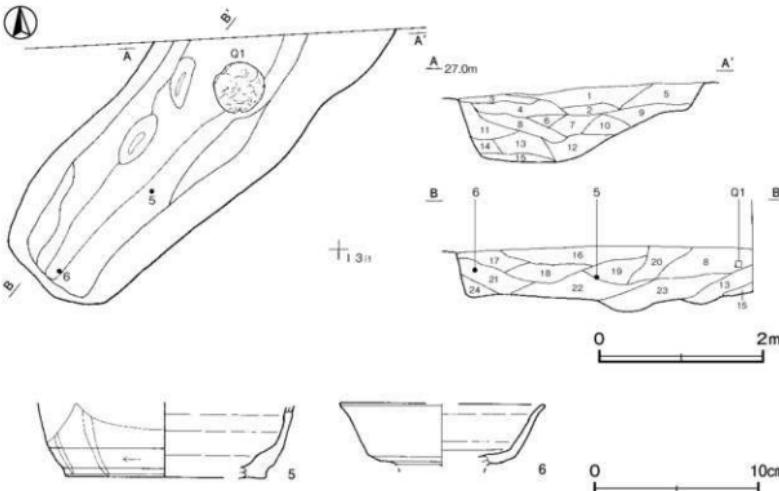
覆土 24層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

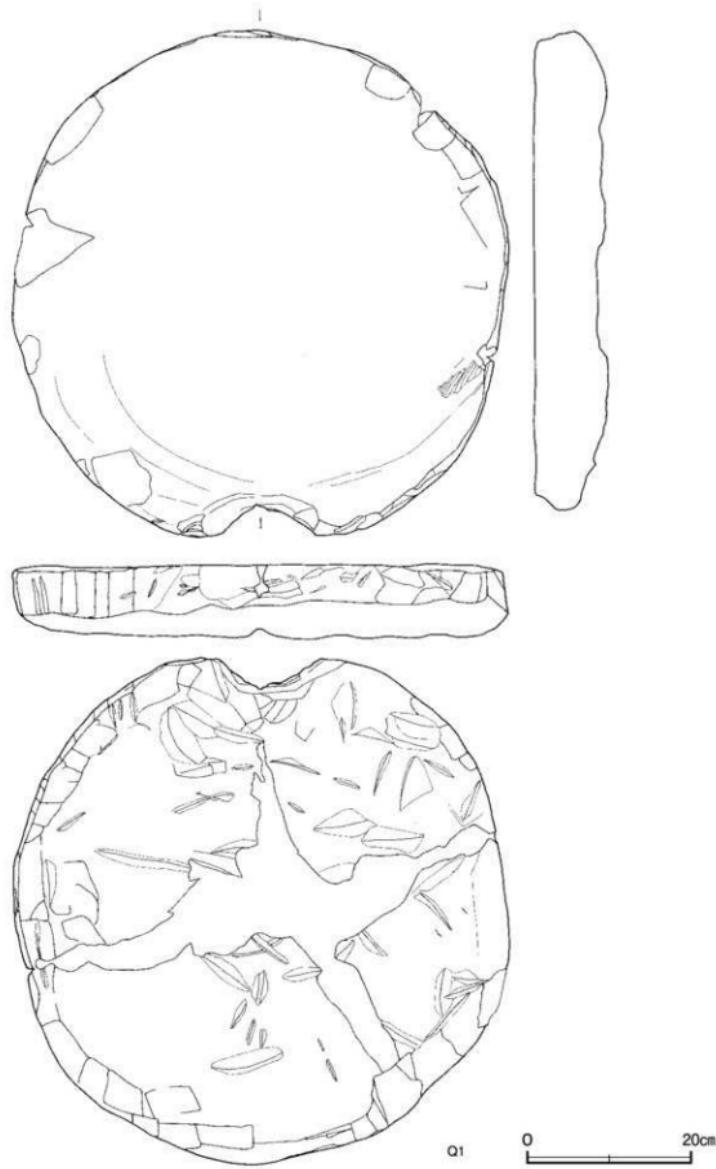
1 黒 無 色 燈土粒子・粘土粒子少量	13 黒 色 ローム粒子微量(17層より粘性・持まりともに強い)
2 黒 無 色 ローム粒子・燈土粒子微量	14 黒 色 ローム粒子極微量
3 黒 無 色 ローム粒子少量、粘土粒子微量	15 黒 色 灰化粒子微量、ローム粒子極微量
4 黒 無 色 ローム粒子・炭化粒子微量	16 黒 無 色 燈土粒子・粘土粒子微量
5 黒 無 色 赤色粒子少量	17 黒 色 ローム粒子微量
6 黒 色 燈土粒子極微量	18 黒 色 燈土粒子微量
7 黒 色 赤色粒子微量、ローム粒子極微量	19 黒 無 色 ローム粒子極微量
8 黒 無 色 ローム粒子・粘土粒子微量(20層より縛りが強い)	20 黒 無 色 ローム粒子・粘土粒子微量
9 黒 色 赤色粒子微量、燈土粒子極微量	21 極暗褐色 赤色粒子微量
10 暗褐色 ローム粒子微量	22 黑 色 ローム粒子極微量(19層より粘性・持まりともに強い)
11 黒 色 ローム粒子微量、灰化粒子微量	23 黑 色 ローム粒子・炭化粒子微量
12 黑 色 赤色粒子微量	24 黑 色 ローム粒子極微量(14層より粘性・持まりともに強い)

遺物出土状況 土師器片55点(坏5、壺50)、須恵器片46点(坏22、高台付坏1、蓋3、壺20)、灰釉陶器片2点(長頸瓶)、石製品1点(蓋カ)、鉄滓2点(220g)が出土している。また、混入した繩文土器片1点(深鉢)が出土している。5は中央部、6は南西部、Q1は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第7図 第3号溝跡・出土遺物実測図



第8図 第3号溝跡出土遺物実測図

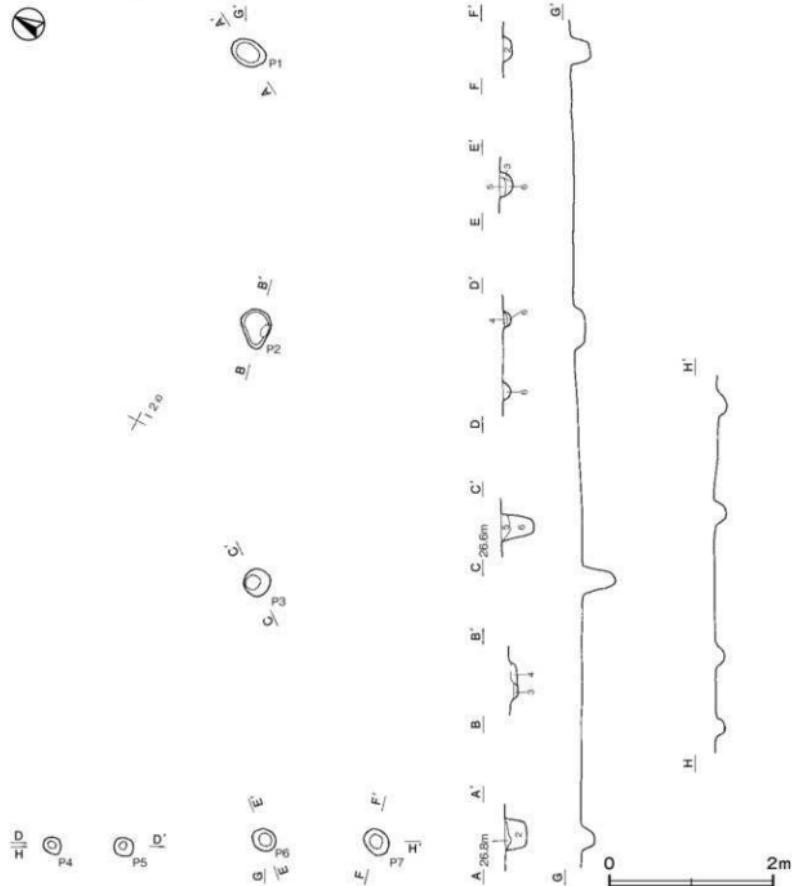
第3号溝跡出土遺物観察表（第7・8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
5	灰陶胸器	長圓瓶	-	(45)	[120]	瓦石・石英・黑色粒子	灰	普通	体部下端へラ削り 緩だれあり	覆土中層	10% PL.9
6	灰陶器	高台付耳	[124]	(38)	-	長石・石英・白色針狀鉱物	灰黃	普通	体部下端へラ削り	覆土中層	30%

番号	器種	長径	短径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	壺	61.3	60.1	9.4	(200g)	凝灰質泥岩	円錐の周縁を削取り 周縁の一部に把手状の凹み両面に不規則な工具痕	覆土中層	PL.12

③柱穴列跡

第1号柱穴列跡（第9図）



第9図 第1号柱穴列跡実測図

位置 調査区中央部のI 2i8 ~ I 3h1 区、標高 26.5 m の平坦な台地上に位置している。

規模と構造 短軸のP 4 ~ P 7 は、I 2j9 区から I 2i8 区にかけて、N - 27° - W で直線上に並び、確認できた長さは 40m である。それに直交して、P 6 から N - 62° - E 方向へ P 3 ~ P 1 が直線上に並び、確認できた長さは 9.6m である。柱間寸法は、P 4 ~ P 7 が 0.88m ~ 1.76m、P 6 ~ P 3 ~ P 1 が 3.16m ~ 3.40m で、柱筋はほぼ揃っている。調査範囲内では T 字状で、全容は不明である。

柱穴 平面形は円形または梢円形で、長径 21 ~ 48cm、短径 21 ~ 36cm である。深さは 9 ~ 40cm で、断面形は U 字状及び皿状である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

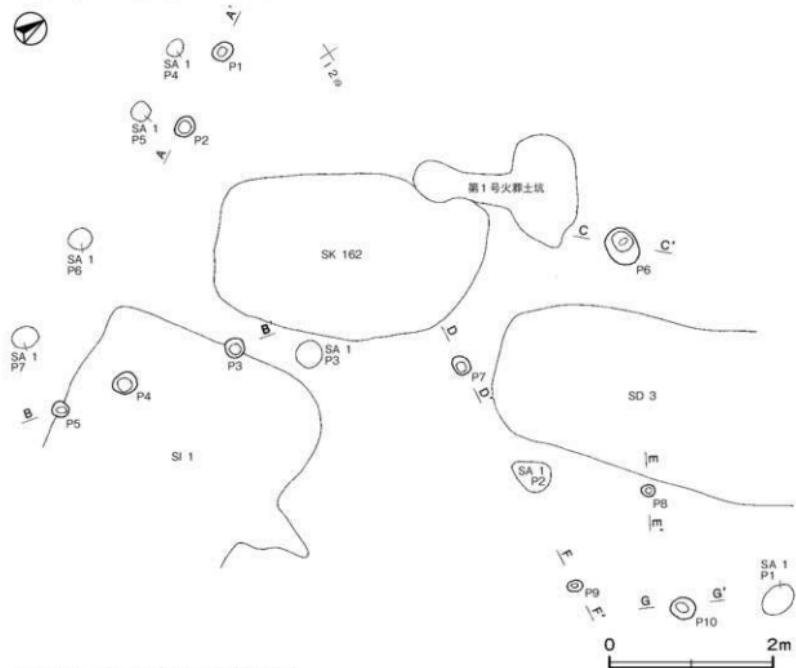
1 黑褐色 ローム粘子微量	4 黑褐色 ローム粘子少量
2 黒褐色 ローム粘子微量 (第3層より粘性・締まりともに強い)	5 灰褐色 ローム粘子少量
3 黒褐色 ローム粘子微量	6 黒褐色 ローム粘子微量 (第1層より締まりが強い)

遺物出土状況 土師器片 3 点（壺）、須恵器片 2 点（坏、壺）が柱穴から出土している。いずれも薄片のため図示できない。

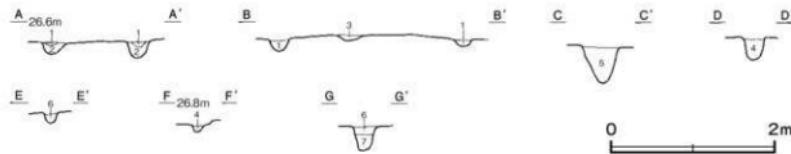
所見 時期は、出土土器や、同じ面で確認できた第1号住居跡と軸方向が近似することから、平安時代と推定できるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。

④ピット群

第1号ピット群（第10・11図）



第10図 第1号ピット群実測図(1)



第11図 第1号ビット群実測図(2)

位置 I 2h9区からI 3i1区、標高26.5mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北7.2m、東西9.0mの範囲に、10か所のビットを確認した。

ビット 10か所。長径0.17～0.47m、短径0.16～0.37mの円形または橢円形で、深さは8～46cmである。

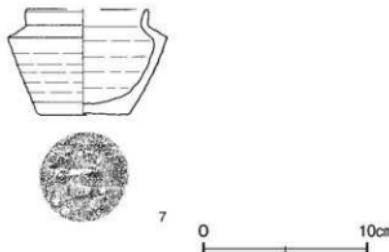
ビット土層解説(各ビット共通)

1 黒褐色 ローム粒子少量	4 極暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子微量(第6層より粘性・締まりとともに強い)	5 極暗褐色 ローム粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量(第1層より粘性・締まりとともに強い)	6 黒褐色 ローム粒子微量
	7 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(坏2、壺3)、須恵器片1点(壺)が各ビットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から平安時代の可能性があるが、出土量が少ないので明確でない。

⑤遺構外出土遺物(第9次面)(第12図)



第12図 遺構外出土遺物実測図

第9次面遺構外出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	須恵器	小柄脚壺	[73]	64	54	良石・石英・黒色粒子	灰	普通	底部鉋輪ヘラ切り後、ナデ	I 2h0	65% PL. 9

2 中世の遺構と遺物(第9・8・7・6次面)

当時代の遺構は、火葬土坑1基、炉跡1基、井戸跡2基、溝跡2条、土坑5基、柱穴列跡2条、ビット群3か所、不明遺構1基を確認した。

(1) 第9次面

①火葬土坑

第1号火葬土坑 (SK160) (第13図)

位置 調査区北部のI 2h9区、標高26.4mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第162号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 T字状を呈している。燃焼部は、長軸1.38m、短軸0.80mの隅丸長方形で、長軸方向はN-37°-Eである。北東壁は外傾し、南西壁は開口部に向かって緩やかに立ち上がっている。燃焼部の中央が、隅丸長方形に落ち込み、深さは30cmで、底面は皿状である。開口部は、長軸1.20m、短軸0.48mの隅丸長方形である。南西壁は外傾し、北東壁は燃焼部に向かって緩やかに落ち込んでいる。深さは22cmで、底面は平坦である。燃焼部の中央で赤変が見られる。

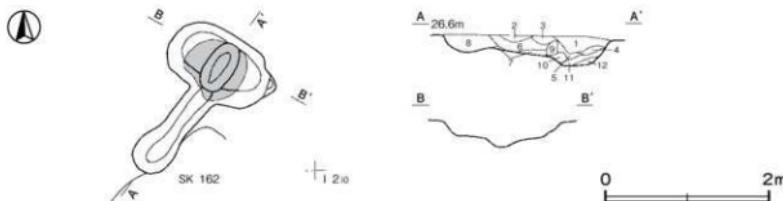
覆土 12層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第12層からは骨片が検出されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量	8 黒褐色 灰化物・焼土粒子微量
2 暗褐色 焼土粒子少量	9 暗褐色 焼土粒子少量(第2層より粘性・締まりともに強く、第10層より締まりが強い)
3 極暗褐色 焼土粒子微量	10 暗褐色 焼土粒子少量(第2層より粘性が強い)
4 黒褐色 ローム粒子微量	11 極暗褐色 焼土粒子・灰化粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子微量(第4層より粘性が強い)	12 黒褐色 灰化物・焼土粒子・骨片微量
6 黒褐色 焼土粒子微量	
7 黒褐色 焼土粒子・灰化粒子微量	

遺物出土状況 混入した陶器片1点(碗)、土師器片10点(环1、壺9)、須恵器片12点(环7、蓋2、壺3)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、遺構の形状から、15世紀後葉から16世紀代と推定されるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため、明確でない。



第13図 第1号火葬土坑実測図

②土坑

第161号土坑 (第14図)

位置 調査区西部のI 2j8区、標高26.7mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第163号土坑に掘り込まれている。

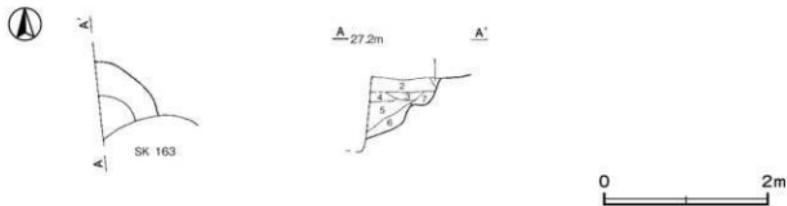
規模と形状 西側が調査区外に延び、南側が第163号土坑に掘り込まれているため、南北軸0.84m、東西軸0.70mしか確認できなかった。円形もしくは梢円形と推定される。深さは78cmで、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 7層に分層できる。各層に粘土粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	5 白	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 黒	褐色	粘土ブロック微量	6 黒	褐色	粘土ブロック・炭化粒子微量
3 黒	褐色	ロームブロック・粘土粒子微量	7 黒	褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
4 黒	褐色	粘土ブロック少量・ローム粒子微量			

所見 時期は、確認面から平安時代から中世と推定されるが、遺物が出土していないため明確でない。



第14図 第161号土坑実測図

第162号土坑（第15図）

位置 調査区中央部のI 219区、標高26.4mの台地上平坦部に位置している。

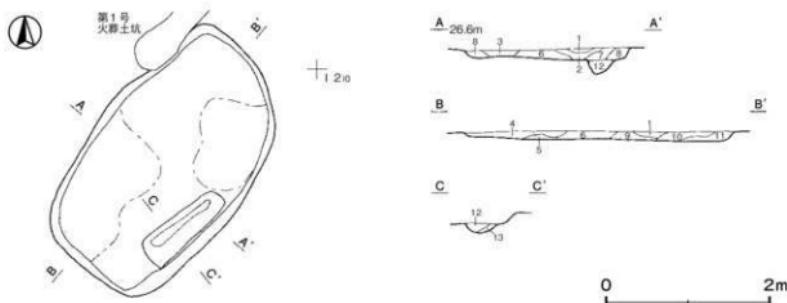
重複関係 第1号火葬土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.20m、短軸2.03mの隅丸長方形で、長軸方向はN - 40° - Eである。深さは11cmで、底面は平坦であるが、南東の壁に平行して長軸1.16m、短軸0.40mの隅丸長方形に16cm程下がっている。北東及び西南のコーナー部は硬化している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 13層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒	褐色	ローム粒子微量	8 黒	褐色	ローム粒子微量
2 黒	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	9 黒	褐色	ローム粒子・粘土粒子微量（第4層よりやや明るい色調）
3 暗褐色	褐色	ローム粒子微量	10 黒	褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
4 黒	褐色	ローム粒子微量、粘土粒子微量	11 黒	褐色	ローム粒子微量（第1層よりやや明るい色調）
5 黒	褐色	ローム粒子少量	12 黒	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
6 黒	褐色	ローム粒子微量、炭化粒子微量	13 黒	褐色	ローム粒子微量（第5層よりやや明るい色調）
7 黒	褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量			



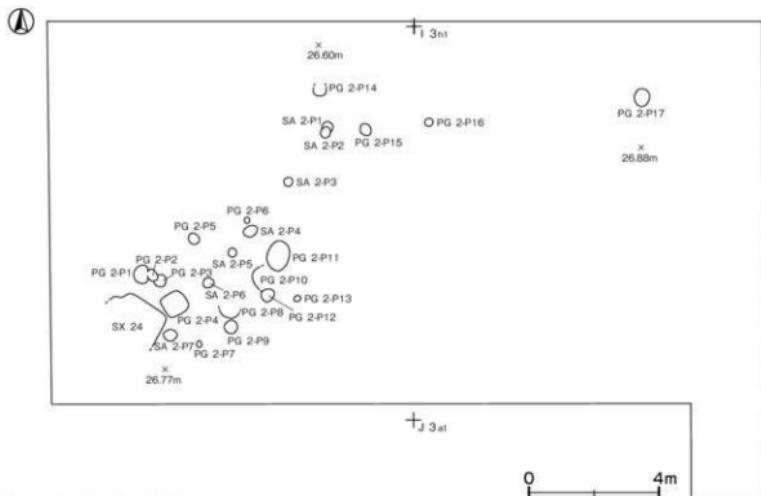
第15図 第162号土坑実測図

遺物出土状況 陶器片1点(甕)、鉄滓1点(153g)が出土している。また混入した土師器片15点(甕7、高台付甕1、甕7)、須恵器片6点(甕5、甕1)が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、確認面と出土土器から中世と推定される。

(2) 第8次面(第16図)

当次面は第9次面の、中世に比定される火葬土坑を埋め戻して構築されており、中世に行われた、改修の初期段階と推定される。



第16図 第8次面全体図

①柱穴列跡

第2号柱穴列跡(第17図)

位置 調査区中央部のI 2 h0 ~ I 2 j0 区、標高26.8mの平坦な台地上に位置している。

規模と構造 I 2 j0 区から北東方向に、N - 38° - E で直線上に並んでいる。確認できた長さは、8.0mで、柱間寸法は、20mを基調としている。P 1はP 2に掘り込まれており、P 5は、P 4から0.9m、P 6から1.2mの不規則な位置に配され、建て替え又は補修が行われたと想定される。柱筋はほぼ描っている。

柱穴 平面形は円形または梢円形で、長径 27 ~ 45cm、短径 26 ~ 39cmである。深さは 17 ~ 54cm で、断面形はU字状である。

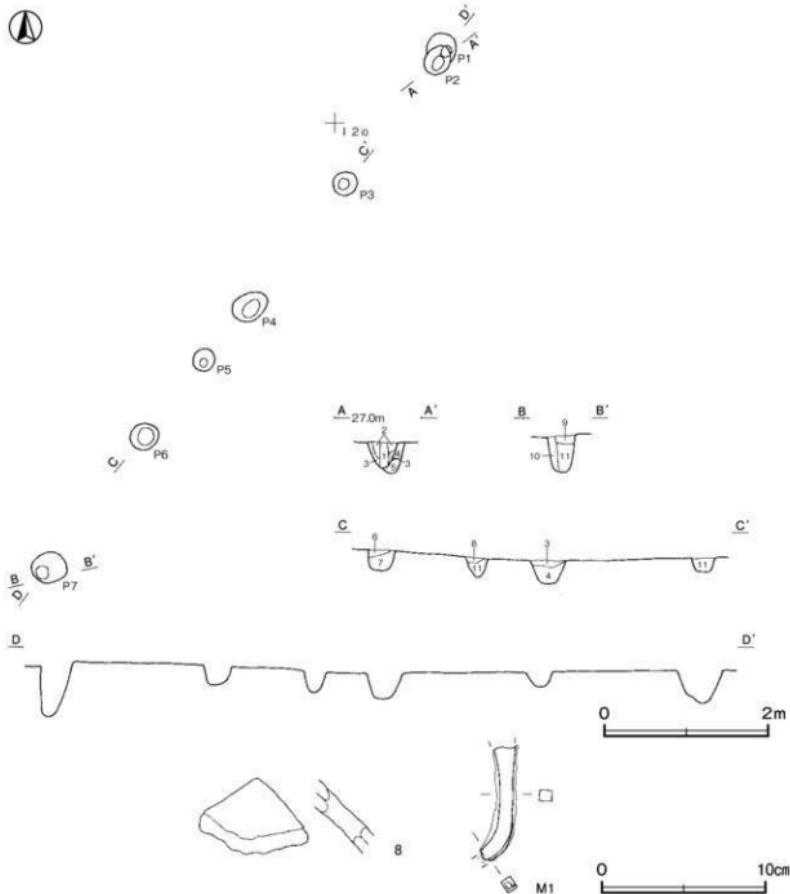
柱穴土層解説(各柱穴共通)

1	灰	黄褐色	粘土粒子少量、炭化粒子微量	7	黒	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2	黒	色	粘土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子微量	8	黒	色	ローム粒子微量
3	黒	褐色	粘土粒子微量	9	褐	色	ローム粒子少量
4	黒	褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量	10	黒	褐色	ローム粒子少量
5	暗	褐色	ローム粒子微量	11	黒	色	ローム粒子、炭化粒子微量
6	黒	褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量				

遺物出土状況 陶器片1点(甕)、土製品1点(羽口)、鉄製品1点(釘カ)、鉄滓4点(3357.8g)が各柱穴か

ら出土している。また、混入した土師器片2点（坏、甕）、須恵器片5点（坏3、甕2）が出土している。8・M 1はP 7から出土しており、鉄滓3点（3204g）も出土している。

所見 時期は、出土遺物や確認面から中世と推定されるが、詳細な時期は明確でない。



第17図 第2号柱穴列・出土遺物実測図

第2号柱穴跡出土遺物観察表（第17図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎	土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
8	陶器	甕	-	(4.5)	-	長石・石英・輝	にふい層	普通	無釉		P 7 (SK154)	5%常温
M 1	不明	(7.0)	0.8	0.7	0.4	(242)	鉄	断面方形	先端が中空	釘±	P 7 (SK154)	

②ピット群

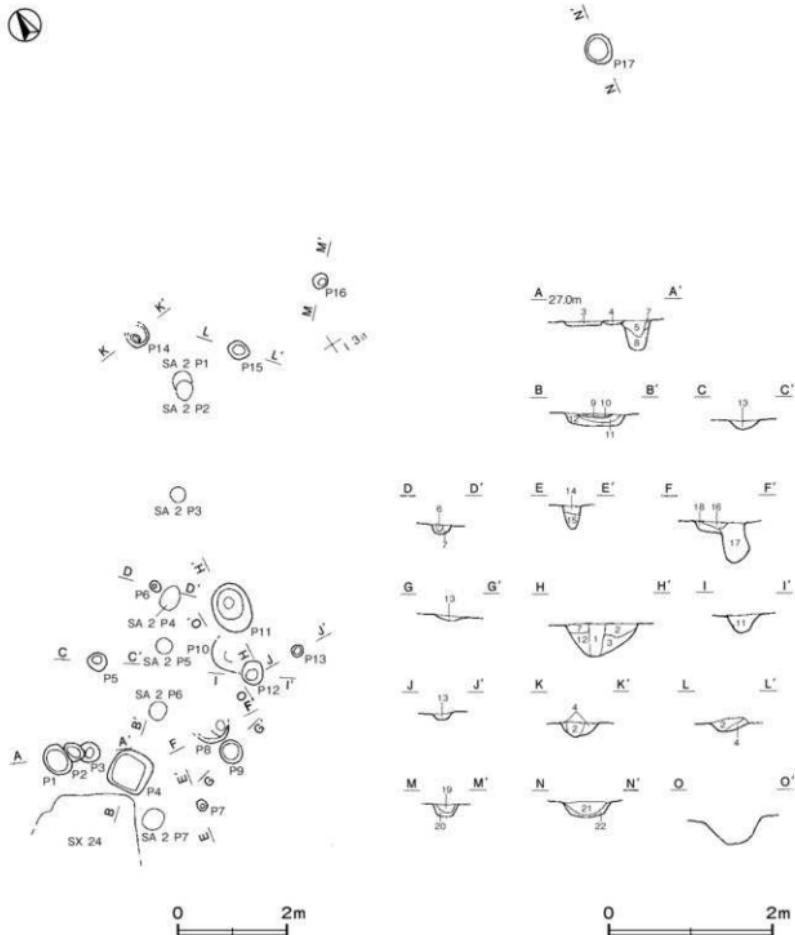
第2号ピット群 (第18図)

位置 I 2 i8区からI 3 h2区、標高26.6mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北8.4m、東西15.9mの範囲に、17か所のピットを確認した。

ピット 17か所。長径20~93cm、短径18~74cmの円形・楕円形及び隅丸方形で、深さは5~50cmである。



第18図 第2号ピット群実測図

ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒 褐 色	ローム粒子少量（第7層よりやや明るい色調）	12 黒 色	ローム粒子微量
2 褐 褐 色	ローム粒子微量	13 褐 褶 色	ローム粒子少量
3 黒 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	14 黒 褶 色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
4 褐 褶 色	ローム粒子微量	15 黒 褶 色	ローム粒子微量
5 黒 褶 色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	16 黒 褶 色	ローム粒子、粘土粒子少量
6 黒 褶 色	ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子微量	17 黒 褶 色	ローム粒子少量
7 黒 褶 色	ローム粒子少量	18 黒 色	ローム粒子、粘土粒子微量
8 黒 褶 色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	19 黒 色	ローム粒子、炭化粒子微量
9 黒 褶 色	ローム粒子微量	20 黒 褶 色	ローム粒子、粘土粒子微量
10 黒 褶 色	粘土粒子微量	21 黒 褶 色	焼土粒子、炭化粒子中量、ローム粒子微量
11 黑 褶 色	ローム粒子微量（第9層よりやや明るい色調）	22 黒 色	炭化粒子中量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片10点（壺）、須恵器片7点（壺5、壺2）、鉄滓10点（50.3g）、鉄片1点（3.1g）が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、確認面から中世と考えられるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。

③不明遺構

第24号不明遺構（第19図）

位置 調査区南西部のI-2J8区、標高268mの台上地平部に位置している。

重複関係 第163号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第163号土坑に掘り込まれておらず、また西部が調査区外に延びているため、東西軸1.66m、南北軸1.32mしか確認できなかった。形状は不定形である。壁高は8cmで、緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土 3層に分層できる。各層にローム粒子を含み、縮まりが強いことから、整地を行う際に埋め戻されたと考えられる。

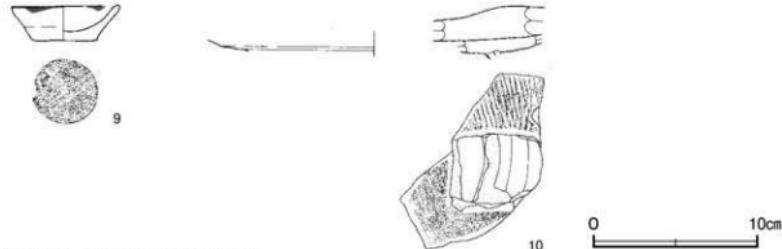
土層解説

1 褐 褶 色	ローム粒子中量	3 黒 褶 色	ローム粒子微量
2 黒 褶 色	ローム粒子少量、粘土粒子微量		

所見 時期は、確認面から中世と推定される。

④遺構外出土遺物（第8次面）（第20図）

10は、当次面の時期を決定するものではないが、参考資料として掲載する。



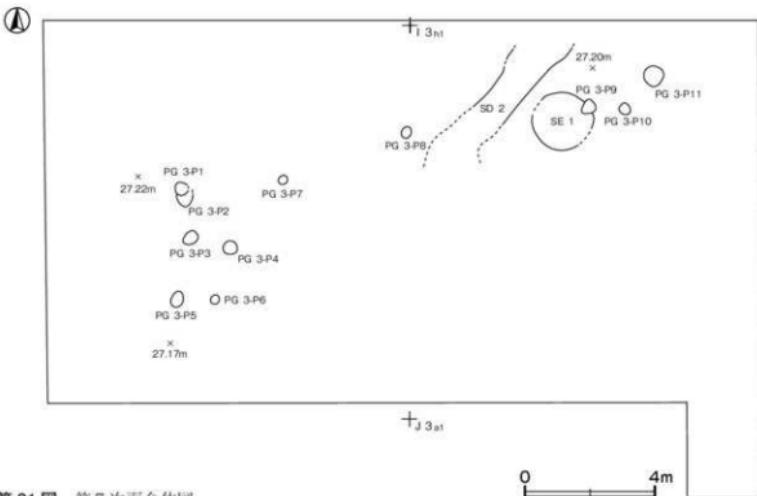
第20図 遺構外出土遺物実測図

第8次面遺構外出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土器質土器	小皿	6.5	2.2	4.0	長石・石英・黄母・赤色粒子	褐	普通	底部剥離毛切り後、ナゲ 底部に板目状生痕	12b6	70% PL 9
10	黒漆器	高台付盤	-	(16)	-	長石・黒色粒子	灰	普通	盤に須恵器の要がは着	12d6	5% PL 9
10	黒漆器	盤	-	(107)	-	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	底部外面斜位の平行叩き	12d6	5% PL 9

（3）第7次面（第21図）

当次面で、井戸跡や溝跡を確認した。このことから、生活面として機能していたことが推定される。出土遺物から、当次面は15世紀～16世紀代に比定される。



第21図 第7次面全体図

①井戸跡

第1号井戸跡（SE1・SX23）（第22図）

位置 調査区東部のI 3 h2区、標高27.2mの台地上に位置している。

重複関係 第3号ピット群P9、第4号ピット群P29・P32に掘り込まれている。

規模と形状 長経1.88m、短経1.76mの円形で、確認面から1.0mまでは、ほぼ垂直に掘り込まれ、そこから漏斗状にすさまりながら0.3m程下がり、その下は円筒状に掘り込まれる。約2.0m掘り下げた段階で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

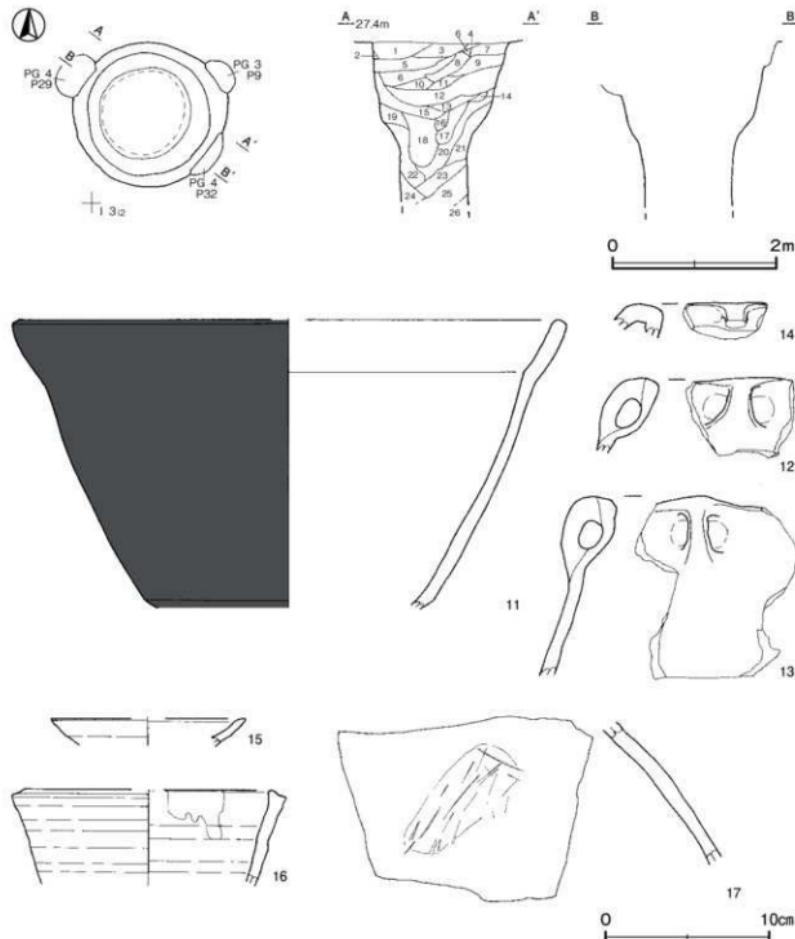
覆土 26層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量	3 極褐色 粘土粒子少量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量
2 黑褐色 ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量	4 黑褐色 粘土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子微量

- 5 黒 色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
 6 極暗褐色 焼土粒子微量
 7 黄褐色 粘土粒子多量
 8 にぶい褐色 粘土粒子多量
 9 暗褐色 細縫中量、粘土粒子少量
 10 黒褐色 粘土ブロック少量
 11 暗褐色 細縫・細縫微量
 12 暗褐色 円縫、炭化粒子・粘土粒子微量
 13 黒褐色 焼土粒子少量、粘土粒子・細縫微量
 14 にぶい黄褐色 砂粒少量
 15 暗褐色 粘土粒子少量

- 16 暗褐色 細縫微量
 17 暗褐色 細縫・砂粒少量、粘土粒子微量
 18 オリーブ褐色 粘土粒子微量
 19 黑褐色 円縫微量
 20 オリーブ黑色 細縫・砂粒微量
 21 オリーブ黑色 粘土粒子少量、細縫微量
 22 黑褐色 細縫少量
 23 暗褐色 粘土粒子・細縫微量
 24 オリーブ色 砂粒少量、円縫微量
 25 暗オリーブ色 細縫微量
 26 暗オリーブ色 砂粒中量



第22図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 陶器片3点(丸皿、鍋類、甕)、土師質土器片9点(内耳鍋)、鉄製品1点(釘)、鉄滓11点(694.1g)が出土している。また、混入した土師器片17点(坏5、甕12)、須恵器片20点(坏16、甕4)が出土している。11は覆土中層と下層から出土した破片が接合したものである。14・15・16は覆土上層、13は覆土中層から出土している。12・17は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から15世紀中葉から16世紀代に比定できる。

第1号井戸跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師質土器	内耳鍋	[32.6]	(17.5)	[17.6]	長石・石英・雲母 針状鉱物	橙	普通	外面保付着	覆土中層・下層	30%
12	土師質土器	内耳鍋	-	(4.5)	-	長石・石英・角閃石・ 斜方輝石	橙	普通	外面保付着	覆土中	5% PL.9
13	土師質土器	内耳鍋	-	(11.0)	-	長石・石英・角閃石・ 斜方輝石	にふく橙	普通	外面保付着	覆土中層	10% PL.9
14	土師質土器	内耳鍋	-	(2.2)	-	長石・石英・角閃石・ 斜方輝石	橙	普通	外面保付着	覆土上層	
15	陶器	丸皿	[11.8]	(1.7)	-	精良 灰釉	浅黄	良好	外・内面熱釉	覆土上層	5% 浅黄・美濃
16	陶器	鍋類	[15.0]	(5.8)	-	石英・赤色粒子 鐵鉢 清熱	暗赤褐	普通	口コ成形 外面・口縁部内面熱釉 体部内面 清熱	覆土上層	5% 浅黄・美濃
17	陶器	甕	-	(8.9)	-	石英・鐵 赤色粒子	にふく赤	普通	体部外面を砥石軋用	覆土中	5% 常滑

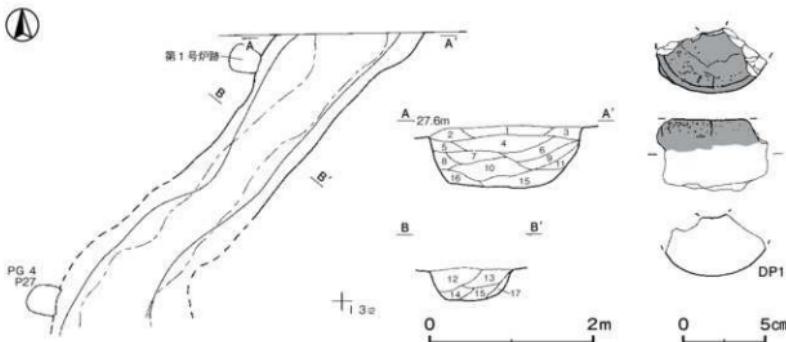
②溝跡

第2号溝跡(第23図)

位置 調査区東部のI 3hl区、標高27.5mの台地上に位置している。

重複関係 第1号炉、第4号ピット群P27・P28に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区外に延び、南西部が搅乱を受けているため、長さは4.74mしか確認できなかった。I 3il区から北東方向(N - 44° - E)に直線状に延び、規模は上幅1.26m、下幅0.94m、深さ74cmほどで、断面はU字状である。底面に、硬化が確認できる。



第23図 第2号溝跡・出土遺物実測図

覆土 17層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色	細繊少量、ローム粒子・炭化粒子微量	10 黒 褐 色	炭化粒子・赤色粒子・細繊少量、ローム粒子微量
2 黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子・細繊微量	11 黒 褐 色	ローム粒子少量、炭化粒子・細繊微量
3 黒 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒 褐 色	ローム粒子・赤色粒子少量、炭化粒子微量
4 極暗褐色	細繊中量、ローム粒子・炭化粒子微量	13 黒 褐 色	ローム粒子・赤色粒子・細繊少量、炭化粒子微量
5 黒 褐 色	赤色粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・細繊微量	14 黒 色	ローム粒子少量、炭化粒子・細繊微量
6 黒 褐 色	炭化粒子・細繊少量、ローム粒子・炭化粒子微量	15 黒 褐 色	赤色粒子・細繊中量、ローム粒子少量
7 黒 褐 色	炭化粒子・赤色粒子少量、ローム粒子・細繊微量	16 黒 褐 色	細繊中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
8 黒 色	ローム粒子・炭化粒子微量	17 黒 色	赤色粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
9 黒 褐 色	細繊中量、ローム粒子・赤色粒子微量		

遺物出土状況 混入した土師器片2点(甕)、須恵器片6点(坏1、高台付坏1、蓋1、甕2、高台付盤1)、土師質土器片2点(鍋)、土製品1点(羽口)が出土している。DP 1は覆土中から出土している。

所見 時期は、同じ面で、15世紀中葉から16世紀代の第1号井戸跡が確認できることから、本跡も近い時期に機能していたと推定される。性格は不明であるが、底面に硬化が認められることから、道としても利用されていたと推定される。

第2号溝跡出土遺物観察表(第23図)

番号	器種	長さ	厚さ	径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 1	羽口	(425)	(38)	(68)	(91.4)	長石・石英・赤色粒子	外面部灰色 内面にぶい粉 灰色部は炉との連絡部々	覆土中	

③ピット群

第3号ピット群(第24図)

位置 I 219区からI 312区、標高27.4mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号井戸跡を掘り込み、第2B号石組み造構に掘り込まれている。

規模と形状 南北68m、東西15.2mの範囲に、11か所のピットを確認した。

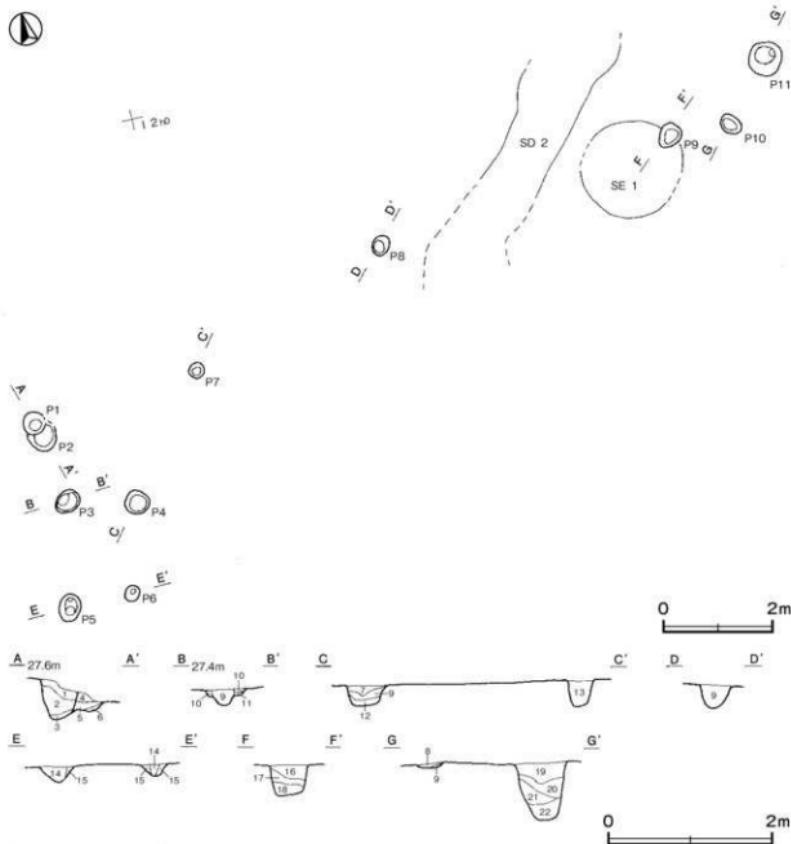
ピット 11か所。長径28~64cm、短径28~62cmの円形または梢円形で、深さは6~70cmである。

ピット土層解説(各ピット共通)

1 黒 褐 色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	13 極暗褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 黒 褐 色	粘土粒子多量、ローム粒子少量	15 暗褐色	ローム粒子少量
4 黒 褐 色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	16 黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
5 極暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	17 黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
6 黒 褐 色	赤色粒子少量	18 黒 褐 色	ローム粒子少量、炭化粒子・細繊微量
7 極暗褐色	赤色粒子少量	19 黒 褐 色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
8 黒 褐 色	ローム粒子少量、細繊微量	20 黒 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・細繊微量
9 黒 褐 色	ローム粒子微量	21 黒 褐 色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細繊微量
10 極暗褐色	ローム粒子少量	22 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
11 暗褐色	中円錐微量		
12 黒 色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 混入した土師器片4点(坏1、甕3)、須恵器片2点(坏、甕)、鉄滓1点(86.8g)が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

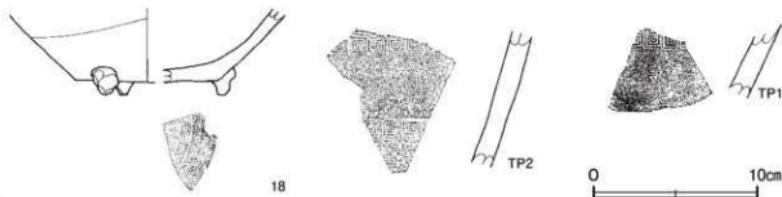
所見 時期は、同じ面で15世紀中葉から16世紀代に比定できる第1号井戸跡が確認されていることから、同時期と推定されるが、伴う遺物がないため明確でない。



第24図 第3号ピット群実測図

④遺構外出土遺物（第7次面）（第25図）

18は、古瀬戸後期様式の直線大皿に形状は類似するが、同じ時期の遺物かは不明である。



第25図 遺構外出土遺物実測図

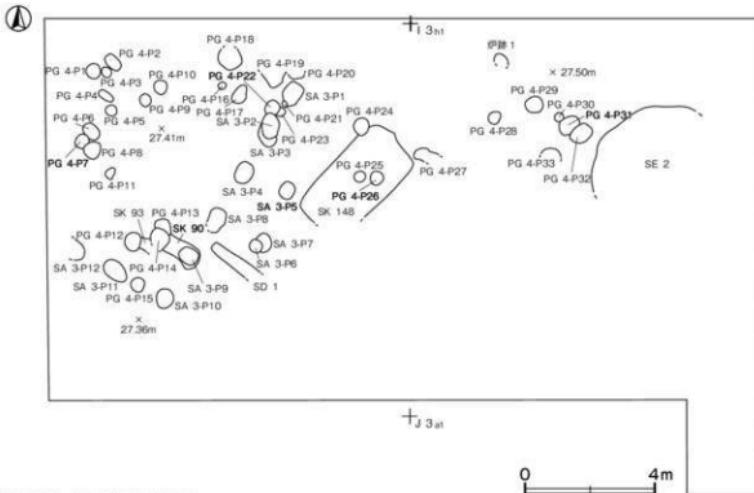
第7次面遺構外出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	騎士・軸轆	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	陶器	有足器	-	(5.3)	(8.8)	石英 軸轆	にぶい褐色	良好	体壁上面・内面軸轆主体、部分的に自然軸体 底部下落跡・足部貼付	I 216	5% PL16

番号	種別	器種	粘土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	瓦質土器	火鉢	長石・石英・針状鉱物	暗灰	体部外面にスタンプによる雷文	I 2 8	PL12
TP 2	瓦質土器	火鉢	長石・石英・針状鉱物	橙	体部外面に2段のスタンプによる雷文	I 2 9	PL12

(4) 第6次面（第26図）

当次面は、井戸跡や溝跡、柱穴列跡などを確認した。当次面は、第7次面と異なる生活面として機能していたことが推定される。出土遺物から、16世紀後葉～17世紀代に比定でき、中世から近世への過渡期と推定される。



第26図 第6次面全体図

①井戸跡

第2号井戸跡（SK36下）（第27図）

位置 調査区東部のI 3 h2区、標高274 mの台地上に位置している。

重複関係 第36号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区外に延び、南部が擾乱を受けているため、東西経は3.60 m、南北経は2.60 mしか確認できなかった。平面形は円形と推定でき、確認面から1.5mまでは漏斗状に掘り込まれ、その下は円筒状に掘り込まれている。約1.8m掘り下げた段階で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

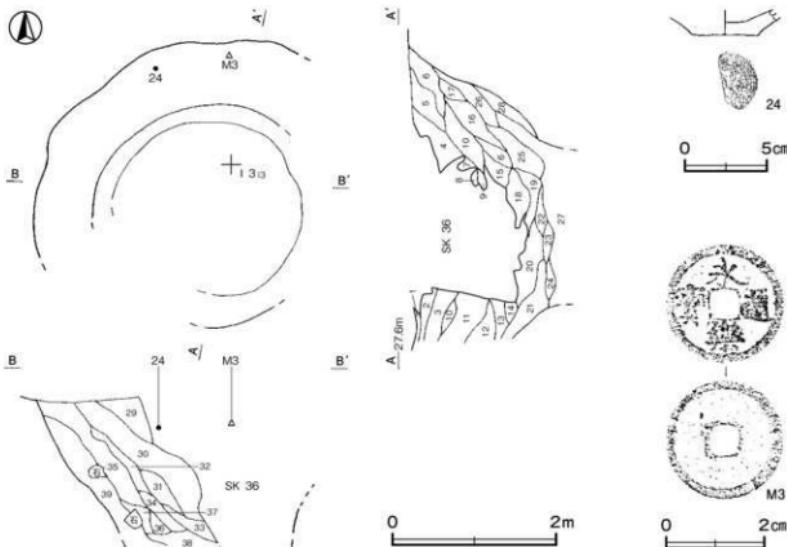
覆土 39 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	21 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量	22 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子、粘土粒子、細繩微量	23 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子微量
4 黒褐色	燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子、細繩微量	24 黒褐色	ローム粒子微量
5 黒褐色	炭化粒子、細繩微量	25 黒褐色	炭化粒子、粘土粒子、細繩微量
6 黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量	26 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子、円繩微量
7 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子、粘土粒子微量	27 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子、炭化粒子、円繩微量
8 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子、燒土粒子微量	28 黒褐色	内繩少量、ローム粒子、炭化粒子微量
9 黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量	29 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子微量
10 黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量	30 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子、細繩微量
11 黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量	31 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
12 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子微量	32 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子、粘土粒子微量
13 黒褐色	炭化粒子、粘土粒子微量	33 暗褐色	粘土ブロック、ローム粒子、炭化粒子微量
14 黒褐色	炭化粒子微量	34 暗褐色	円繩少量、ローム粒子、炭化粒子微量
15 黒褐色	燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量	35 暗褐色	細繩少量、ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子微量
16 黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、細繩微量	36 黒褐色	ローム粒子、細繩微量
17 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子、細繩微量	37 黒褐色	ローム粒子、円繩微量
18 黒褐色	粘土ブロック、ローム粒子、炭化粒子微量	38 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
19 黒褐色	燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量	39 黒褐色	細繩中量、ローム粒子、炭化粒子微量
20 黒褐色	ローム粒子、炭化粒子、粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師質土器片 3 点（小皿）、銭貨 1 点（永樂通寶）が出土している。24・M3 は、覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器と、近世の土坑に掘り込まれていることから、16世紀後半に比定できる。



第27図 第2号井戸跡・出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	断面	口径	断高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
24	土師質土器	小皿	-	(15)	[40]	長石・石英・黒色粒子	棕	普通	底部回転糸切り	覆土上層	20%

番号	鉢種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初跡年	特徴	出土位置	備考
M3	木製通貫	24	06	01	18	銅	1408	明鏡 無背鏡	覆土上層	PL13

②炉跡

第1号炉跡（第28図）

位置 調査区北部のI 3h1区、標高27.5mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南部が搅乱を受けているため、東西軸は0.44mで、南北軸は0.38mしか確認できなかったが、楕円形と推定される。深さは12cmで、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。ほぼ全面で焼土が確認でき、その周囲に灰が不定形に広がっている状況が確認できた。底面や壁に赤変硬化は確認できなかった。

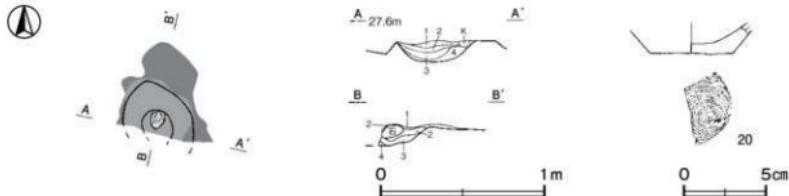
覆土 4層に分層できる。各層が焼土を多く含むことから埋め戻されている。

土層解説

1	灰褐色	灰多量、焼土ブロック・灰化物少量、骨片微量	3	暗赤褐色	焼土粒子多量、円礫微量
2	赤褐色	焼土粒子多量、円礫微量	4	深暗赤褐色	焼土粒子中量、円礫微量

遺物出土状況 混入した土師器片3点（甕）、土師質土器片1点（小皿）、瓦1点（平瓦）、鐵製品1点（不明）が出土している。20は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土遺物や同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代と考えられるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため、明確でない。第1層から骨片が検出されているが、微量のため、火葬施設かは不明である。



第28図 第1号炉跡・出土遺物実測図

第1号炉跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師質土器	小皿	-	[18]	[5.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部削除余切り	覆土上層	20%

③土坑

第90号土坑（第29図）

位置 調査区西部のI 2i9区、標高274mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第3号柱穴列P9、第4号ピット群P13・P14、第5号ピット群P10に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が、第4号ピット群P13・P14に掘り込まれているため、短軸は0.67mで、長軸は1.12mしか確認できなかった。長軸方向がN - 58° - Wの長方形と推定できる。深さは21cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。礫を含み、締まりが強いことから、整地を行う際に埋め戻したと考えられる。

土層解説

- 1 黒 褐 色 円錐・焼土粒子微量
2 黒 褐 色 焼土粒子少量

- 3 黒 褐 色 円錐・焼土粒子微量

遺物出土状況 瓦片1点(平瓦)が出土している。細片のため図示できない。

所見 時期は、同じ面の遺構から16世紀後葉から17世紀代と推定されるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。



第29図 第90号土坑実測図

第93号土坑 (第30図)

位置 調査区西部のI 218区、標高273mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第4号ピット群P12・P14、第5号ピット群P10に掘り込まれている。

規模と形状 東西の立ち上がりが掘り込まれているため、短軸は0.29mで、長軸は0.37mしか確認できなかつた。深さは19cmで、底面は平坦であり、南北の壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量

- 2 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・赤色粒子少量

所見 時期は、同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代と推定されるが、遺物が出土していないため明確でない。



第30図 第93号土坑実測図

第148号土坑 (第31図)

位置 調査区中央部のI 210区、標高272mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第4号ピット群P24～P26に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.53m、短軸1.90mの隅丸長方形で、長軸方向はN-46°Eである。深さは59cmで、底面は平坦であり、壁は直立している。

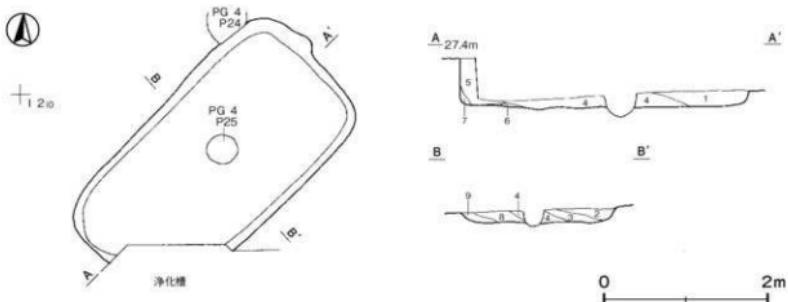
覆土 9層に分層できる。各層にローム粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細錐微量 | 6 黒 褐 色 粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子少量 | 7 黒 褚 色 ローム粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 ローム粒子少量 | 8 黒 褚 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 9 黒 褚 色 ローム粒子微量 |
| 5 黒 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 混入した土師器片 23 点（環 11、壺 12）、須恵器片 13 点（壺 6、高台付壺 1、蓋 1、壺 5）、鉄滓 2 点（1182g）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代と推定されるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。



第31図 第148号土坑実測図

④溝跡

第1号溝跡（第32図）

位置 調査区西部の I 2 i9 区、標高 27.5 m の台地上に位置している。

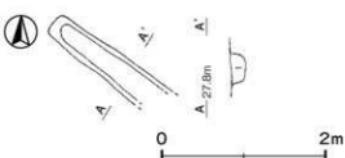
規模と形状 南東部が擾乱を受けているため、長さは

165 m しか確認できなかった。I 2 j0 区から北西方向 (N - 55° - W) に直線状に延び、規模は上幅 0.40m、下幅 0.27m、深さ 18cm ほどで、断面は U 字状である。

覆土 単一層である。縁まりが極めて強く、整地を行った際に埋め戻されたとみられる。

土層解説

1 基 桃色 炭化物・焼土粒子少量、粘土粒子微量



第32図 第1号溝跡実測図

遺物出土状況 混入した土師器片 1 点（環）、土師質土器片 1 点（内耳鍋）、鉄製品 1 点（釘）、瓦 6 点（丸瓦 1、平瓦 5）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器や同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代と推定されるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。性格も不明である。

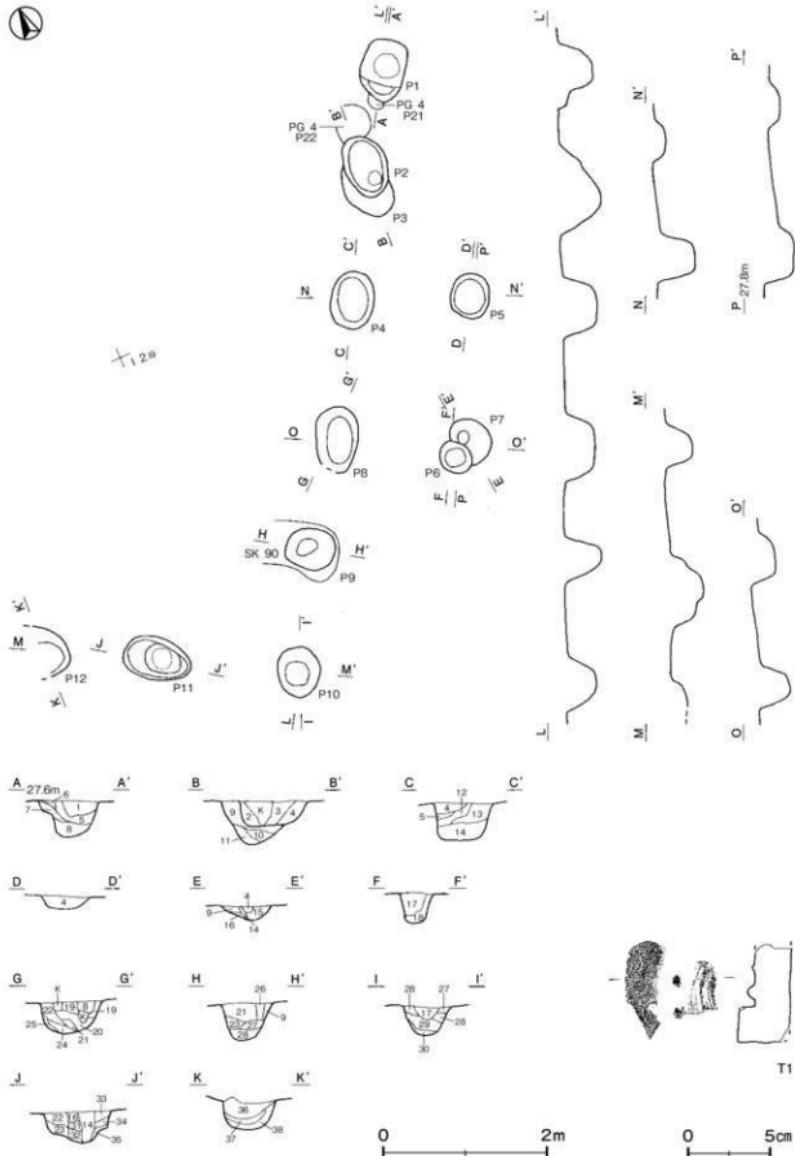
⑤柱穴列跡

第3号柱穴列跡（第33図）

位置 調査区西部の I 2 h0 ~ I 2 j9 区、標高 27.5 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 90 号土坑、第 4 号ピット群 P21・P22 を掘り込み、第 5 号ピット群 P 14 に掘り込まれている。

規模と構造 I 2 j9 区から北東方向に、N - 33° - E で、P 1 ~ P 4、P 8 ~ P10 が直線上に並び、P 4 と P 8 が平行して、南東に、P 5 ~ P 7 が配される。P 2 が P 3 を、P 6 が P 7 を掘り込んでおり、補修が行



第33図 第3号柱穴列跡・出土遺物実測図

われたものと推定される。P10に直交して、北西に、P11とP12が並ぶ。確認できた長さは、P1～P10が7.6m、P10～P12が3.2mである。柱間寸法は、1.50mを基準とする。

柱穴 平面形は円形または梢円形で、長径40～86cm、短径36～55cmである。深さは16～53cmで、断面形はU字状及び皿状である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	20	灰	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	
2	暗	褐	色	燒土粒子少量、炭化物微量	21	暗	褐	色	燒土粒子少量
3	暗	褐	色	燒土粒子少量、炭化粒子微量	22	褐	色	ローム粒子中量	
4	暗	褐	色	ローム粒子微量	23	黑	褐	色	燒土粒子微量
5	褐	色	ローム粒子微量	24	褐	色	ローム粒子・炭化粒子微量		
6	にい	黄褐色	燒土粒子微量	25	暗	褐	色	ローム・ブロック微量	
7	褐	色	ローム粒子少量	26	褐	色	燒土粒子少量、炭化粒子微量		
8	暗	褐	色	燒土粒子微量	27	褐	色	燒土粒子微量	
9	黒	褐	色	燒土粒子・炭化粒子微量	28	黒	褐	色	燒土粒子多量
10	暗	褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量、燒土粒子微量	29	褐	色	燒土粒子少量、炭化粒子微量	
11	褐	色	ローム粒子・燒土粒子、炭化粒子微量	30	暗	褐	色	ローム粒子少量、細繩微量	
12	黒	褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量	31	褐	色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	
13	黒	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	32	暗	褐	色	ローム粒子少量
14	暗	褐	色	ローム粒子少量	33	暗	褐	色	燒土粒子少量、ローム粒子微量
15	黒	褐	色	燒土粒子少量、炭化粒子微量	34	褐	色	燒土粒子少量	
16	黒	褐	色	ローム粒子少量	35	暗	褐	色	赤色粒子少量
17	暗	褐	色	炭化物・焼土粒子微量	36	暗	褐	色	燒土粒子少量、炭化物・粘土粒子微量
18	黒	褐	色	ローム粒子微量	37	にい	黄褐色	燒土粒子少量、粘土粒子微量	
19	にい	黄褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	38	黒	褐	色	炭化粒子少量、燒土粒子・赤色粒子微量	

遺物出土状況 陶器片3点（壺）、磁器片1点（碗）、瓦片19点（丸瓦3、平瓦16）、鉄滓1点（81.1g）が各柱穴から出土している。また、混入した土師器片1点（壺）、須恵器片4点（环2、壺2）が出土している。T1は、P4の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土遺物や同じ面の遺構から、16世紀後葉から17世紀代に比定できる。構造は、全容が確認できおらず、柱穴列が延びる可能性もあり、不明である。

第3号柱穴列跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部			文様部			色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠数	横幅	縦幅	高さ						
T 1	瓦	軒丸瓦	(3.5)	-	(6.0)	(3.8)	10	(2)	-	-	黒	褐	紅・黒・青	普通	巴文右 (SK107)	PL14

⑥ピット群

第4号ピット群（第34・35図）

位置 I 2h8区からI 3h2区、標高27.5mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号井戸跡、第2号溝跡、第90・93・148号土坑を掘り込み、第3号柱穴列P1・P2、第5号ピット群P10に掘り込まれている。

規模と形状 南北64m、東西16.0mの範囲に、33か所のピットを確認した。

ピット 33か所。長径20～100cm、短径22～68cmの円形または梢円形で、深さは5～91cmである。

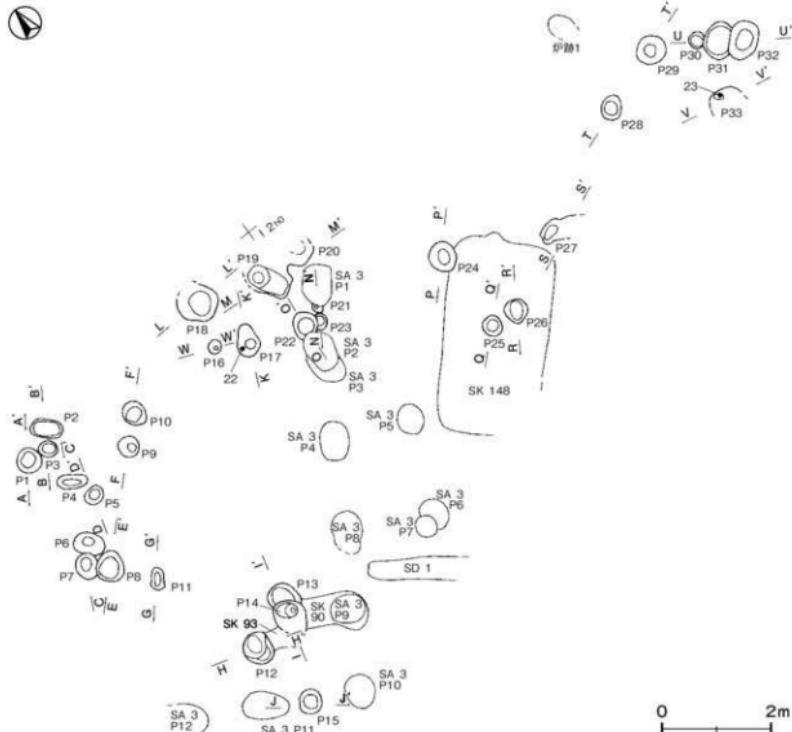
ピット土層解説（各ピット共通）

1	灰	黄褐色	燒土粒子少量、粘土粒子・細繩微量	10	黒	褐	色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	
2	灰	褐	色	炭化粒子・粘土粒子微量	11	黒	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3	灰	黄褐色	燒土粒子・粘土粒子少量	12	暗	褐	色	ローム粒子・炭化粒子微量	
4	灰	褐	色	燒土粒子少量、粘土ブロック微量	13	褐	色	炭化粒子微量	
5	黒	褐	色	燒土粒子微量	14	暗	褐	ローム粒子・燒土粒子少量	
6	にい	黄褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量	15	褐	色	燒土粒子少量、炭化粒子微量		
7	褐	色	ローム粒子中量、燒土粒子微量	16	褐	色	ローム粒子少量		
8	黒	褐	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	17	黒	褐	色	ローム粒子少量	
9	黒	色	ローム粒子・細繩微量	18	暗	褐	色	炭化粒子多量、ローム粒子・燒土粒子少量	

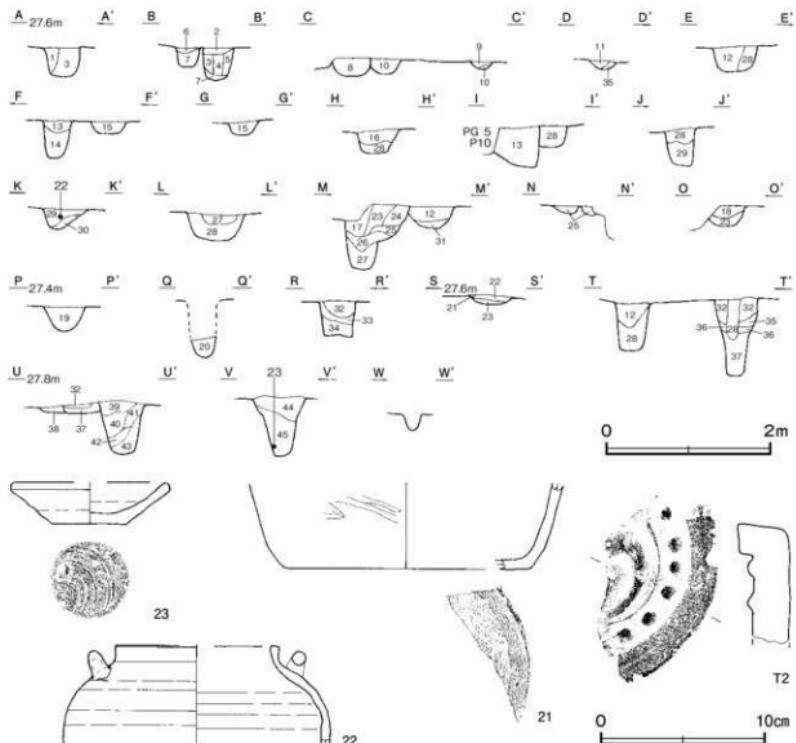
19	黒	色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
20	黒	褐	ローム粒子・細繊微量
21	褐	色	燒土粒子中量
22	暗	褐	色
23	暗	褐	燒土粒子少量・炭化粒子微量
24	褐	色	ローム粒子少量・炭化粒子微量
25	暗	褐	赤色粒子少量
26	褐	色	ローム粒子微量
27	褐	色	ローム粒子中量
28	黒	褐	ローム粒子微量
29	褐	色	ローム粒子少量
30	暗	褐	燒土粒子微量
31	黒	褐	色 ローム粒子少量 (第17層より粘性・結まりともに強い)
32	黒	褐	色 ローム粒子・炭化粒子微量
33	黒	色	ローム粒子微量
34	黒	色	炭化物・ローム粒子微量
35	黒	褐	色 ローム粒子・燒土粒子微量
36	褐	褐	色 ローム粒子少量
37	黒	褐	色 燒土粒子・炭化粒子微量
38	黒	褐	色 ローム粒子・炭化粒子・細繊微量
39	黒	褐	色 纖維中量・ローム粒子・粘土粒子微量
40	黒	褐	色 ローム粒子少量・粘土粒子・細繊微量
41	暗	褐	色 ローム粒子少量・炭化粒子・細繊微量
42	黒	褐	色 ローム粒子・粘土粒子少量・炭化粒子・円繊微量
43	黒	色	ローム粒子・粘土粒子微量
44	暗	褐	色 纖維中量
45	灰	褐	色 円繊・ローム粒子・燒土粒子微量

遺物出土状況 陶器片4点(甕3、壺1)、磁器片2点(碗)、土師質土器片8点(小皿2、内耳鍋6)、瓦質土器片1点(鉢)、瓦片10点(丸瓦3、平瓦7)、鐵製品2点(釘、不明)が各ピットから出土している。また混入した土師器片5点(甕)、須恵器片2点(壺、甕)が出土している。22は、P 17の覆土中層、23は、P 33の覆土下層から出土している。21はP 2、T 2はP19からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から、17世紀前葉に比定できる。



第34図 第4号ピット群実測図



第35図 第4号ピット群・出土遺物実測図

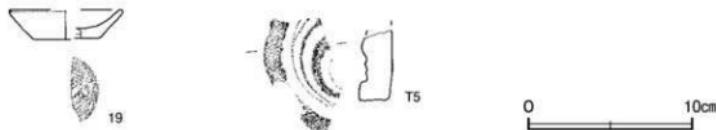
第4号ピット群出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底坪	胎土・施薬	色調	焼成	手法の特徴ほか		出土位置	備考
									瓦当部	文様区		
21	瓦質土器	鉢	-	(5.3)	[15.2]	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部外側ハラ焼き		P 2 (SK81)	5%
22	陶器	有耳壺	[100]	(6.1)	-	鐵錫	黒褐色	良好	外側・口縁部内面施釉、耳點付		P 17 (SK95)	20%廻戻・ 美濃 PL.6
23	土質質土器	小皿	[9.3]	2.5	4.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	ロクロ成形、底部回転舟切り		P 33 (SK108)	50% PL.9

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部		文様区			色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
					外径	内径	底径	株数	横幅								
T 2	瓦	軒丸瓦	(32)	-	(7.0)	(4.9)	0.9	(6)	-	-	-	-	灰	鉢・底・施釉	普通	巴文右	P 19 (SK101) PL.14

⑦遺構外出土遺物（第6次面）（第36図）

遺構外の遺物は、実測図と観察表で記載する。



第36図 遺構外出土遺物実測図

第6次面遺構外出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか			出土位置	備考
19	土師質土器	小皿	(6.8)	1.8	(4.0)	板石・石瓦 赤色粒子・黒色粒子	褐	普通	底部削除切り			—	40%

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部			文様区			色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	底径	疊数	横幅	縦幅							
T 5	瓦	軒瓦瓦	(19)	—	(3.7)	(2.7)	—	—	—	—	—	灰	長石	普通	巴文右	T 2 b8	—

(5) 中世遺構一覧表

表2 井戸一覧表

番号	次面	位置	長洋方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考	重複関係(古→新)
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	7	13b2	—	円形	1.88 × 1.76	(200)	—	漏斗状	人為	陶器、土師質土器	本跡→PG 3・4	—
2	6	1 3b2	—	[円形]	(3.60 × 2.60)	(180)	—	漏斗状	人為	土師質土器、鐵貨	本跡→SK36	—

表3 溝跡一覧表

番号	次面	位 置	方 向	形 状	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考	重複関係(古→新)
					長 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ(cm)				
2	7	1 3b1	N - 44° - E	直線状	(4.74)	1.26	0.94	74	U字状	人為	—	本跡→即 1、PG4
1	6	1 2b9	N - 55° - W	直線状	(1.65)	0.40	0.27	18	U字状	外縁 人為	—	—

表4 土坑一覧表

番号	次面	位 置	長洋方向	平 面 形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考	重複関係(古→新)
					長径×短径(m)	深さ(cm)						
161	9	1 2b8	—	[円形]	(0.84 × 0.70)	(78)	漏状	傾斜 人為	—	—	本跡→SK83	—
162	9	1 2b9	N - 40° - E	楕丸長方形	3.20 × 2.03	11	平坦	傾斜 人為	—	陶器	本跡→第1号火葬土坑	—
90	6	1 2b9	N - 58° - W	[長方形]	(1.12) × 0.67	21	平坦	外縁 人為	瓦	本跡→SA 3、PG 4・5	—	—
93	6	1 2b8	—	—	(0.27) × 0.29	19	平坦	外縁 人為	—	—	本跡→PG 4・5	—
148	6	1 2b10	N - 46° - E	楕丸長方形	3.53 × 1.90	59	平坦	直立 人為	—	—	本跡→PG 4	—

表5 柱穴列跡一覧表

番号	次面	位 置	方 向	長 広 (m)	柱間寸法(m)	柱 穴			主な出土遺物	備 考	重複関係(古→新)	
						柱穴数	平 面 形	長 広 / 柱 穴 (m)	深さ(cm)			
2	8	1 2b0 ~ 1 2b2	N - 38° - E	8.0	2.0	7	円形 楕円形	0.27 ~ 0.45 0.26 ~ 0.39	17 ~ 54	陶器、土製品、 鉄製品	—	—
3	6	1 2b0 ~ 1 2b2	N - 33° - E	7.6	1.5	12	円形 楕円形	0.40 ~ 0.86 0.36 ~ 0.55	16 ~ 53	陶器、磁器、瓦	SK90 PG 4 → 本跡 → PG 5	—

表6 ピット群一覧表

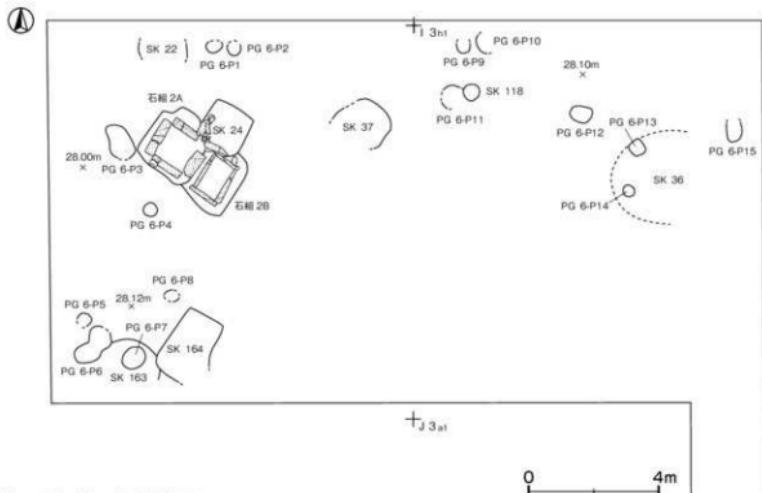
番号	次面	位置	形状	範囲(m)	柱穴			主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					柱穴数	平面形	長径/短径(m)		
2	8	12b ₁ ~ 13b ₂	不定形	[8.4 × 15.9]	17	円形 楕円形 横丸方形	0.20 ~ 0.93/ 0.18 ~ 0.74	5 ~ 50	土器器、灰器器 SI 1 → 本跡
3	7	12b ₁ ~ 13b ₂	不定形	[6.8 × 15.2]	11	円形 楕円形	0.28 ~ 0.64/ 0.28 ~ 0.62	6 ~ 70	— SE 1 → 本跡 → 第 2 B 另石組み遺構
4	6	12b ₁ ~ 13b ₂	不定形	[6.4 × 16.0]	33	円形 楕円形	0.20 ~ 1.00/ 0.22 ~ 0.68	5 ~ 91	陶器、鐵器、土器器上部 瓦器、土器器、灰器器 SE 1, SD 2, SK 90 ~ 93 瓦器、土器器、灰器器 148 → 本跡 → SA 3, PG 3

3 近世の遺構と遺物(第4・5・3次面)

当時代の遺構は、石組み遺構3基、用排水路跡2条、石敷き遺構1基、土坑10基、柱穴列跡2条、ピット群4か所を確認した。第4次面は生活面であり、その構築に伴う基礎地盤面が第5次面である。そのため本項では第4次面から順に記述する。

(1) 第4次面

当次面は、近世の中で最も長期間に渡り、生活面として機能していたと考えられる。おおよその時期は、17世紀中葉～18世紀代に比定できる。



第37図 第4次面全体図

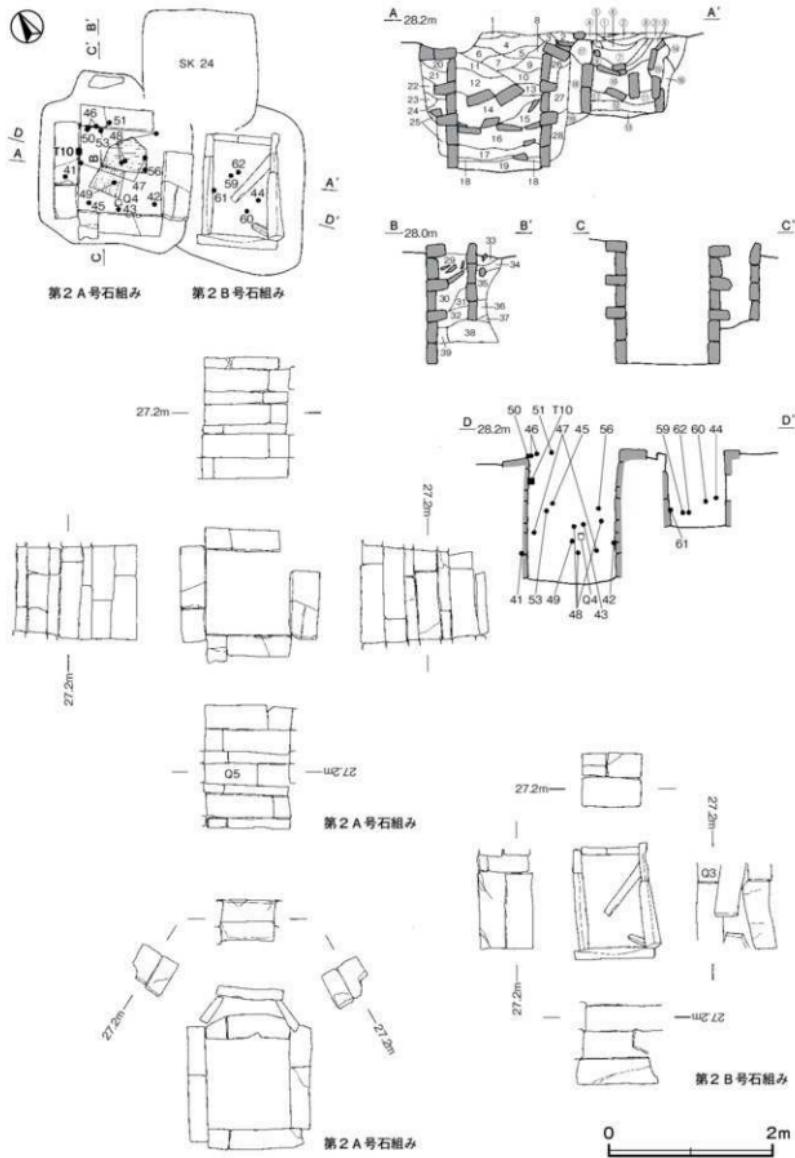
①石組み遺構

第2A号石組み遺構(SX14西)(第38~42図)

位置 調査区西部のI 2 b9 区、標高 28.0 m の台地上に位置している。

重複関係 第2B号石組み遺構を掘り込み、第24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 石組みの規模は、北東・南西軸 1.92 m、北西・南東軸 1.52 m で、方形の石組みの北東部に、同じ石材を用いた台形状の張り出しが構築される。掘方の規模は北東・南西軸 2.08 m、北西・南東軸 1.88 m の不



第38図 第2A・2B号石組み遺構実測図

定形で、北東・南西軸方向は N - 29° - E である。深さは 167m で、底面は平坦である。

石組みの構築状況 石材 60 点（北東 15, 南西 14, 南東 15, 北西 16）を確認した。長さ 78 ~ 84cm、幅 24 ~ 29cm、厚さ 11 ~ 14cm、重量 40 ~ 46kg の凝灰岩の切石が最も多く、長さ 62 ~ 66cm・92 ~ 98cm の石材も含まれる。積み方は、各段の高さを揃える布積みで、すべての石材が、長辺を横にして積まれている。最下段は、天端を垂直に 2 段に積み、その後は天端を水平と垂直に積む工程を一段ずつ繰り返している。石材の端が揃わないように互い違いに積まれ、18 ~ 38cm の石材で、隙間ができないように調節されている。底面に石材は確認されない。張り出し部は、天端を垂直に積み、ハの字状を呈する短い石材に合わせて、方形の石組みの角が落とされている。

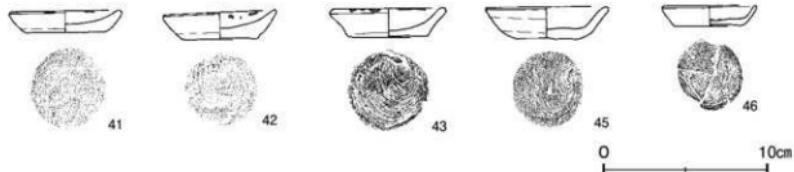
覆土 19 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 20 ~ 39 層は掘方への埋土である。

土層解説

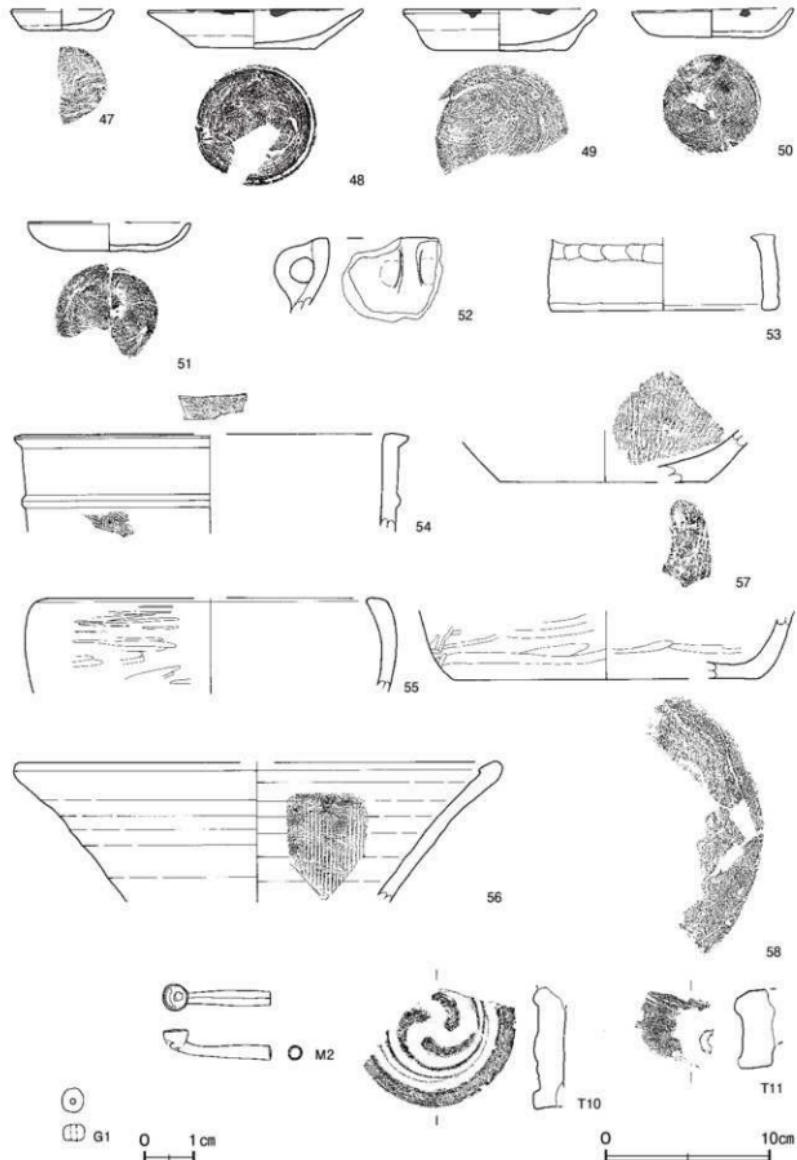
1	褐	色	ローム粒子多量	21	暗	褐	色	焼土粒子中量、凝灰岩片少量
2	暗	褐	色	22	黒	褐	色	焼土粒子微量
3	黄	褐	色	23	黒	褐	色	ローム粒子多量
4	黒	褐	色	24	黒	褐	色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
5	暗	褐	色	25	暗	褐	色	粘土粒子少量、ローム粒子微量
6	暗	褐	色	26	暗	褐	色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
7	褐	褐	色	27	黒	褐	色	粘土粒子少量、ローム粒子微量
8	褐	褐	色	28	暗	褐	色	ローム粒子、焼土粒子微量
9	灰	黄	褐	29	暗	褐	色	焼土粒子、炭化粒子、凝灰岩片微量
10	にぶ	黄褐色	色	30	黒	褐	色	ローム粒子微量
11	灰	黄	褐	31	黒	褐	色	ローム粒子、粘土粒子少量、焼土粒子微量
12	灰	オリーブ	色	32	黒	褐	色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
13	オリーブ	黒	色	33	オリーブ	黒	色	焼土粒子少量、大円錐微量
14	褐	オリーブ	色	34	黒	色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	
15	褐	オリーブ	色	35	黒	褐	色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
16	黒	褐	色	36	褐	色	ローム粒子、粘土粒子、細錐少量、炭化粒子微量	
17	黒	褐	色	37	黒	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子、細錐微量
18	灰	褐	色	38	黒	色	ローム粒子少量、炭化粒子、粘土粒子微量	
19	黒	色	ローム粒子微量	39	黒	色	ローム粒子中量、焼土粒子、炭化粒子微量	
20	暗	褐	色					
			大円錐・焼土粒子少量、粘土粒子微量					

遺物出土状況 陶器片 8 点（碗 1, 楼鉢 3, 鉢 2, 壺 2）、磁器片 6 点（碗）、土師質土器片 22 点（小皿 11, 盆 6, 内耳鍋 1, 焙烙 1, 火鉢 1, 鉢 1, 壺 1）、瓦質土器片 4 点（火鉢 2, 壺 2）、瓦片 162 点（丸瓦 60, 平瓦 98, 棟込瓦 1, 不明 3）、銅製品 1 点（煙管）、鐵製品 2 点（釘）、ガラス製品 1 点（小玉）が出土している。また混入した土師器片 11 点（坏 4, 壺 7）、須恵器片 16 点（坏 9, 高台付坏 1, 盖 1, 壺 5）、鐵滓 1 点（209g）、鐵片 1 点（10.7g）、自然遺物 2 点（牡蠣貝殻、板材）が出土している。41 は掘方の埋土下層、42 ~ 49 は覆土下層、43 ~ 53 は覆土中層、46 ~ 50, 51, T10 は覆土上層から出土している。47 ~ 48 は覆土下層と中層、56 は覆土中層と第 5 次面の遺構外から出土した破片が接合したものである。52 ~ 54, 55 ~ 57, 58 ~ T11, M 2, G 1 は覆土中層から出土している。工具痕が明瞭な石材はサンプルとし、拓影図及び観察表に記載する。

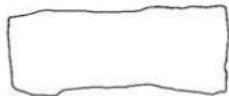
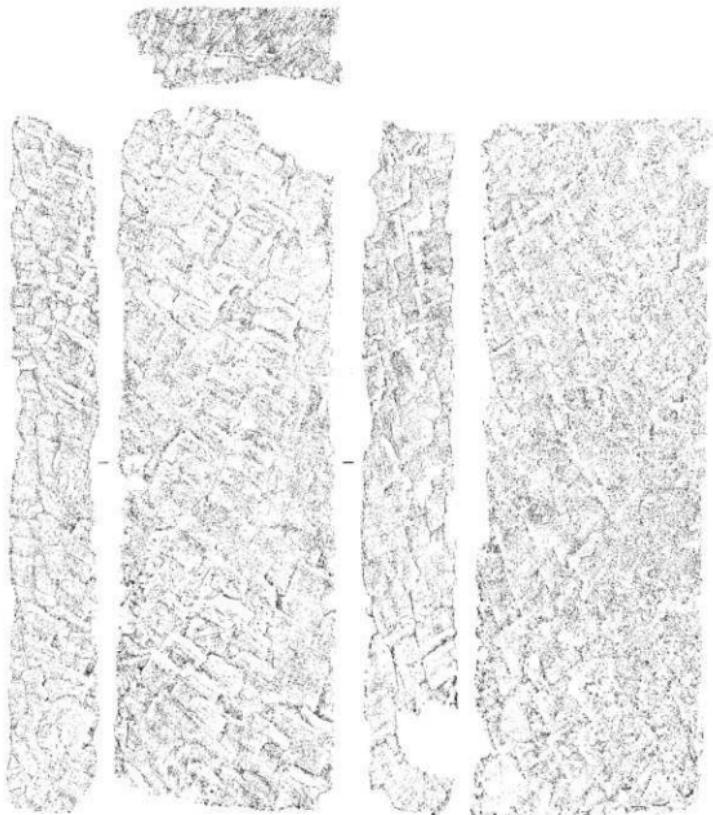
所見 時期は、出土遺物と確認面から、17 世紀中葉から 18 世紀代に比定できる。隣接する第 2B 号石組みから作り替えられたものと推定される。性格は不明である。



第 39 図 第 2A 号石組み遺構出土遺物実測図 (1)



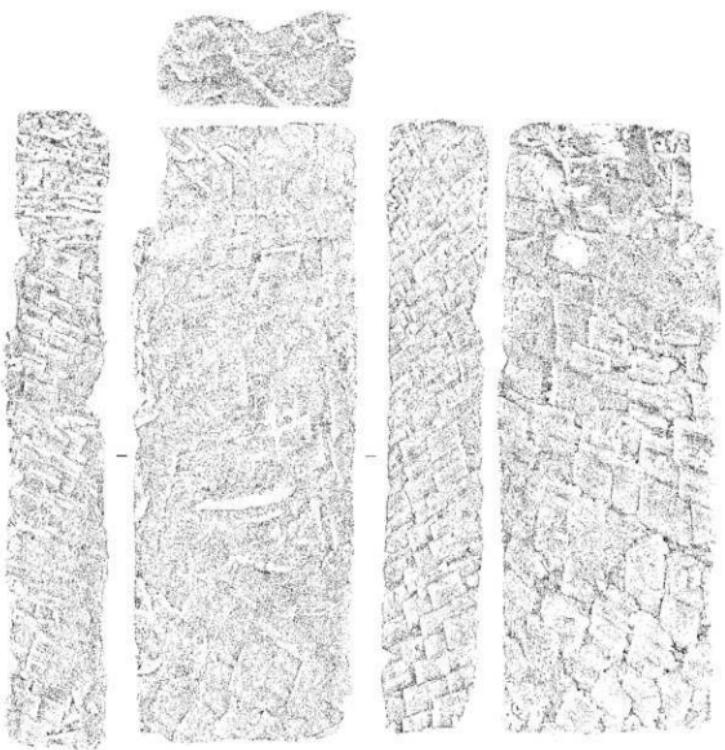
第40図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(2)



Q4



第41図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(3)



Q5



第42図 第2A号石組み遺構出土遺物実測図(4)

第2A号石組み遺構出土遺物観察表（第39～42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師質土器	小皿	6.6	1.3	4.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい相	普通	底部鉛軸糸切り 口縁部油煙付着	撲土埋下層	100% PL10
42	土師質土器	小皿	6.8	1.8	4.6	長石・石英・赤色粒子	相	普通	底部鉛軸糸切り 口縁部・体部内面油煙付着	覆土下層	98% PL10
43	土師質土器	小皿	6.7	1.8	4.8	長石・石英・赤色粒子	浅黄相	普通	底部鉛軸糸切り 見込みに若干の突出 口縁部	覆土中層	95% PL10
45	土師質土器	小皿	7.4	2.0	4.0	長石・石英・青母・赤色粒子	相	普通	底部鉛軸糸切り後、ナデ	覆土中層	100% PL10
46	土師質土器	小皿	5.6	1.2	4.1	長石・石英・青母・赤色粒子	にぶい相	普通	底部鉛軸糸切り後、ナデ	覆土上層	80%
47	土師質土器	小皿	[6.2]	1.3	4.4	長石・石英・青母・赤色粒子	相	普通	底部鉛軸糸切り	覆土下層	50% PL10
48	土師質土器	皿	13.0	2.4	7.3	長石・石英・青母・繩	相	普通	底部鉛軸糸切り 口縁部に油煙付着	覆土中層	70% PL10
49	土師質土器	皿	11.6	2.5	8.0	長石・石英・青母・青灰白・赤色粒子	相	普通	底部鉛軸糸切り後、外周ナデ 口縁部油煙付着	覆土下層	60% PL10
50	土師質土器	皿	9.8	1.8	6.0	長石・石英・青母・赤色粒子	相	普通	底部鉛軸糸切り後、ナデ 口縁部内面油煙付着	覆土上層	70% PL10
51	土師質土器	皿	[10.0]	1.7	6.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい相	普通	底部鉛軸糸切り後、ナデ 底部内面埋付着	覆土上層	60% PL10
52	土師質土器	内耳鍋	~	(4.6)	~	長石・石英・青母・赤色粒子	にぶい相	普通	外縁ナデ	覆土中	5%
53	土師質土器	火鉢	~	(4.6)	[13.7]	長石・石英・青母・赤色粒子	相	普通	体部から剥離した脚部。上面に強い横ナデ	覆土中層	20%
54	瓦質土器	火鉢	[23.0]	(6.0)	~	長石・石英・青母・赤色粒子	灰	普通	体部外側に陰帯貼付 陰帯下にスタンプによる 覆土中 文	覆土中	5%
55	瓦質土器	火鉢	[20.4]	(5.8)	~	長石・石英・繩	灰	普通	体部外側へラ撒き 口縁部内溝	覆土中	5%
56	陶器	擂鉢	[29.2]	(8.5)	~	長石・繩・鉄軸	暗赤褐色	良好	口縁部折り返し 摘り口 17条一単位ヶ	覆土中層 6.5次回収外	20% 薫戸・美 PL10・16
57	陶器	擂鉢	~	(3.2)	[12.7]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	擗り口 6条一単位ヶ	覆土中	10%
58	瓦質土器	甌	~	(4.2)	[18.6]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端へ削り 外・内へ磨き	覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴			出土位置	備考
Q 4	石材	860	27.5	10.5	(32.5)	凝灰岩	幅4cm程の工具痕	尖端は斜めに工具痕	~	~	~
Q 5	石材	765	27.5	12.3	30.0	凝灰岩	幅4cm程の工具痕	角の切り落としにはより細い工具が用いられていた	石材を組むための加工刀	~	~

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
M 2	壺管	6.6	1.6	0.9	(8.6)	陶	雅音	火薙が広がる	~	覆土中	PL13

番号	器種	種	絆	厚さ	孔径	重量	材質	特徴			出土位置	備考
G 1	小玉	0.5	0.4	0.1	0.1	ガラス	若干の気泡	~	~	~	覆土中	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部	文様区	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T10	瓦	輕瓦丸	(1.8)	~	(9.7)	(7.6)	~	~	~	~	黒 長石・石英 普通
T11	瓦	輕平丸	~	~	~	(17)	(25)	0.5	~	(4.9)	灰 長石・石英 普通 唐草文

第2B号石組み遺構（SX14東）（第38・43図）

位置 調査区西部のI 219区、標高28.0mの台地上に位置している。

重複関係 第3号ピット群P 1・P 2を掘り込み、第2A号石組み遺構、第24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 石組みの規模は、北東・南西軸137m、北西・南東軸0.97mの長方形で、掘方の規模は、北東・南西軸は204mで、北西・南東軸は1.38mしか確認できなかったが、隅丸長方形と推定される。北東・南西軸方向はN - 34° - Eである。深さは1.04mで、底面は平坦である。

石組みの構築状況 石材17点（北東4、南西3、南東6、北西4）を確認した。南東・北西壁は、長さ72～80cm、幅28～32cm、厚さ約10cm、重量16.5～44kg。北東・南西壁は、長さ92～98cm、幅30～34cm、厚さ9～12cm、重量13～42kgの凝灰岩の切石を主に用い、隙間を様々な大きさの石材で埋めている。いずれも石材の劣化が著しく、剥離などが確認でき、計測した重量は均一でない。天端を垂直に積み、石材の端を揃えて積んでいる。

覆土 13層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第14～19層は掘方への埋土である。

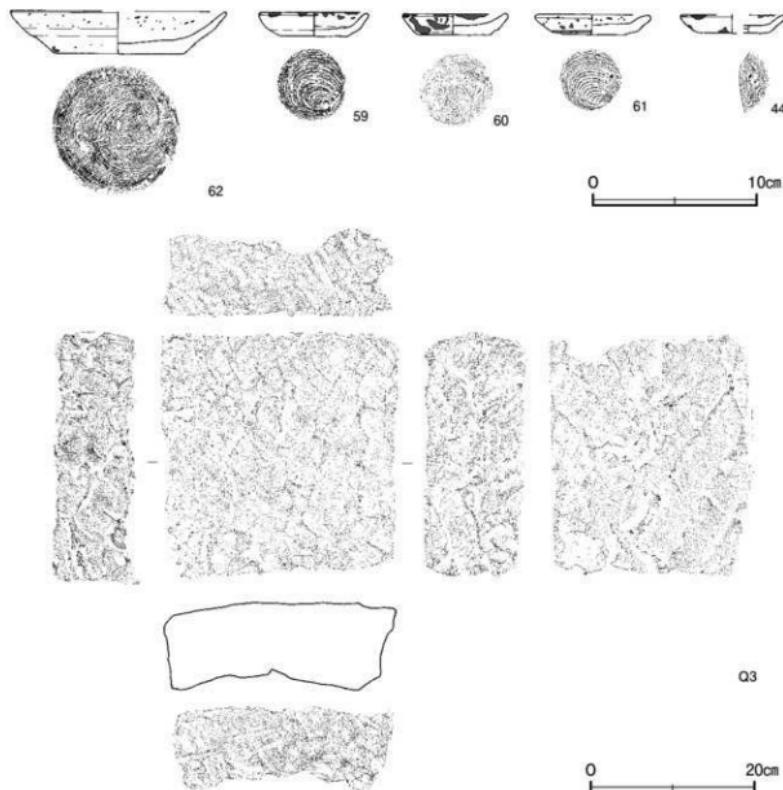
土層解説

① 明褐色	ロームブロック多量、白色粘土ブロック少量	⑪ 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量
② 茶褐色	ローム粒子多量	⑫ 黒褐色	ローム粒子、焼土粒子、粘土粒子少量、炭化粒子微量
③ 暗褐色	焼土粒子、粘土粒子少量	⑬ 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子、粘土粒子微量、炭化粒子微量
④ 青褐色	ローム粒子、焼土粒子微量	⑭ 青褐色	焼土粒子、炭化粒子微量
⑤ 灰褐色	焼土粒子、粘土粒子微量	⑮ 灰褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量
⑥ 黑褐色	焼土粒子、粘土粒子微量	⑯ 黒褐色	焼土粒子、粘土粒子少量、炭化粒子微量
⑦ 黑褐色	焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量	⑰ オリーブ褐色	焼土粒子、粘土粒子少量
⑧ 灰褐色	粘土粒子微量	⑲ 灰褐色	焼土粒子少量、粘土ブロック微量
⑨ 茶褐色	粘土粒子少量、大円窓微量	⑳ 黒褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量
⑩ にじみ茶褐色	焼土粒子中量、灰粒子微量		

遺物出土状況 陶器片1点(壺)、磁器片1点(碗)、土師質土器片5点(小皿4、皿1)が出土している。

また混入した須恵器片1点(蓋)、灰釉陶器片1点(瓶)が出土している。59・61・62は覆土下層、44・60は覆土中層から出土している。工具痕が確認された石材はサンプルとし、拓影図及び観察表に記載する。

所見 時期は、確認面と出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代に比定できる。性格は不明である。



第43図 第2B号石組み遺構出土遺物実測図

第2B号石組遺構出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師質土器	小皿	[62]	11	[40]	長石・雲母	にぶい青	普通	底部削輪系切り 口縁部・体部外側油煙付着 見込みに若干の凹み 内面に同心円状のナゲ	覆土中層	40%
59	土師質土器	小皿	65	15	42	石英・雲母・ 黒色粒子	にぶい青	普通	底部削輪系切り 口縁部・体部内面油煙付着 見込みに若干の凹み 内面に同心円状のナゲ	覆土下層	100% PL10
60	土師質土器	小皿	62	13	45	長石・雲母・ 赤色粒子	浅黄褐	普通	底部削輪系切り 口縁部・体部外・内面油煙付着 見込みに若干の凹み 内面に同心円状のナゲ	覆土中層	100% PL10
61	土師質土器	小皿	67	13	40	長石・石英・雲母	淡黄	普通	底部削輪系切り 口縁部・体部外・内面油煙付着 見込みに若干の凹み 内面に同心円状のナゲ	覆土下層	90% PL10
62	土師質土器	皿	[132]	26	76	長石・石英・雲母	浅黄褐	普通	底部削輪系切り 体部外・内面油煙付着	覆土下層	80% PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	石材	300	295	10.8	8.9	凝灰岩	幅4cm程の工具痕 横面はより密な工具痕	—	—

②土坑

第22号土坑（第44図）

位置 調査区西部のI 2h9区、標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区外に延び、南部が擾乱を受けているため、

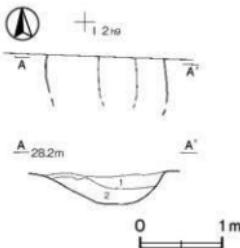
長径は1.48mで、短径は0.50mしか確認できなかった。深さは39cmで、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。礫を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 燃土粒子・細繊少量、ローム粒子・粘土粒子微量
2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・細繊微量

所見 時期は、同じ面の遺構から17世紀葉から18世紀代と推定できるが、時期決定の根拠となる遺物が出土していないため明確でない。



第44図 第22号土坑実測図

第24号土坑（第45・46図）

位置 調査区西部のI 2h9区、標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

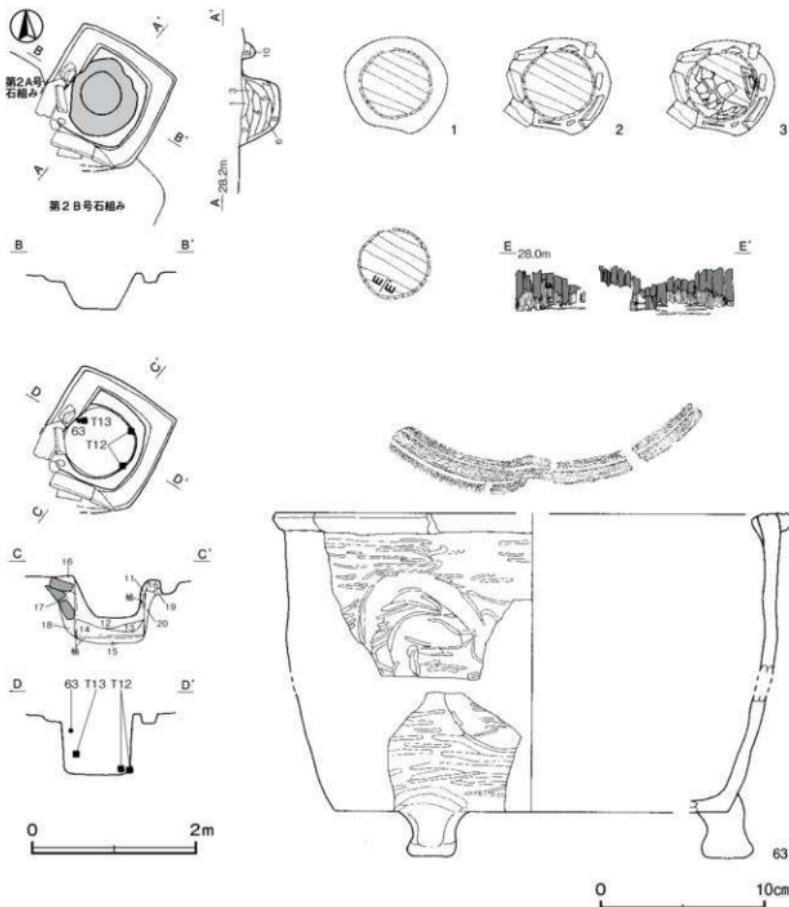
重複関係 第2A・2B号石組み遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.56m、短軸1.42mで、長軸方向がN-30°-Eの方角である。底面は平坦で、深さは44cmである。上幅20~30cmの溝が方形に巡り、その中央部が円形に掘り下げられ、焼土粒子や炭化粒子が多く確認されることから、燃焼部として使用されていたと考えられる。燃焼部の下には桶が埋設されている。桶と掘方の間には凝灰岩が入れ込まれており、桶の固定、あるいは耐火が目的と想定される。また、板塀瓦が、桶内で確認され、耐火性を強める役割を果たしていると考えられる。桶の底面までの深さは、確認面から68cmである。

覆土 10層に分層できる。第1~6層、第9・10層は、締まりが強いことから、整地の際に埋め戻されたと推定される。第7・8層は、焼土粒子や炭化粒子を含む、本跡使用時の自然堆積層である。第11~14層は、燃焼部を構築するための埋土である。第12層は、焼土粒子・炭化粒子を顕著に含んでいることから、本層の上面が燃焼部として用いられていたと考えられる。第15~20層は、掘方への埋土である。

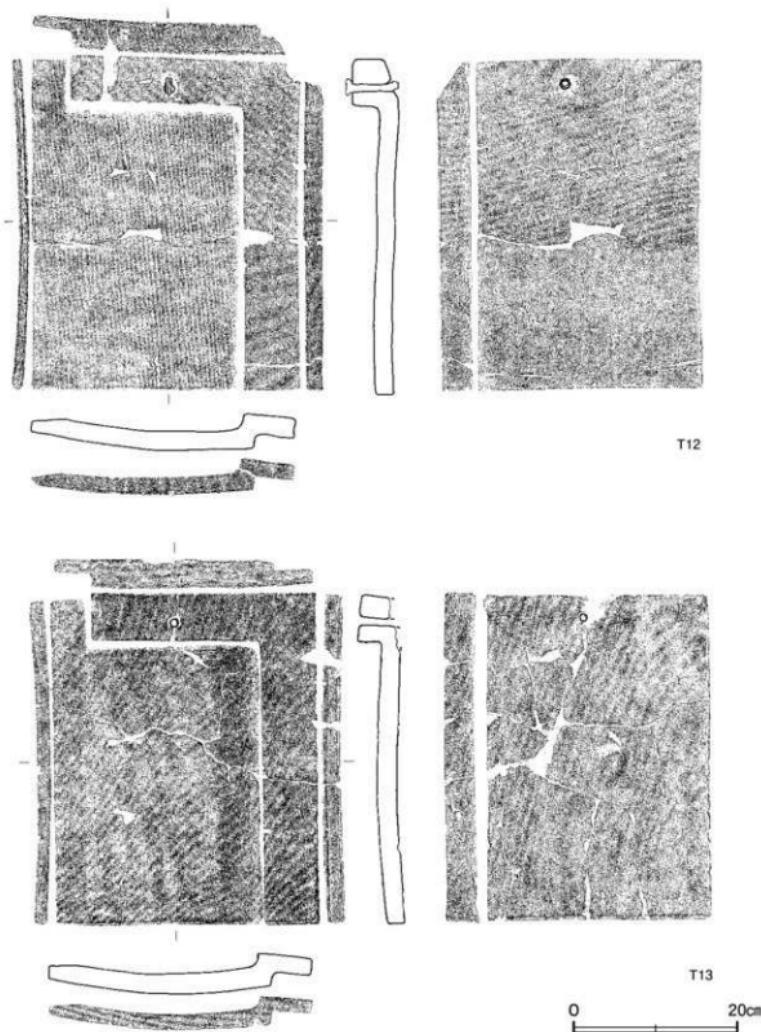
土層解説

1 白 色	ローム粒子・粘土粒子少量。燒土粒子・炭化粒子・ 纖維微量	10 暗 褐 色	炭化物微量
2 にふい赤褐色	粘土ブロック・炭化物・燒土粒子・纖維微量	11 明赤褐色	燒土ブロック多量。炭化粒子中量。ローム粒子微量
3 黒 色	粘土ブロック少量。燒土粒子・炭化粒子微量	12 赤褐色	燒土粒子多量。炭化粒子中量。ローム粒子微量
4 黑褐色	ロームブロック少量。燒土ブロック・粘土ブロック・ 炭化粒子微量	13 褐 色	大円錐・燒土粒子微量
5 紺褐色	ローム粒子少量。燒土粒子・炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子微量
6 黑 色	ローム粒子少量。燒土粒子・炭化粒子微量	15 暗褐色	大円錐・燒土粒子・炭化粒子少量
7 斜暗褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量	16 黑褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・凝灰岩片微量
8 黑褐色	燒土粒子中量。炭化物少量。ローム粒子微量	17 暗褐色	燒土粒子少量
9 黑褐色	燒土粒子・粘土粒子微量	18 オリーブ褐色	燒土粒子少量
		19 暗褐色	大円錐・燒土粒子・粘土粒子微量
		20 にふい黄褐色	粘土粒子少量。炭化物微量



第45図 第24号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 陶器片3点(碗2、壺1)、磁器片2点(碗)、土師質土器片5点(小皿3、火鉢1、鉢1)、瓦質土器片2点(火鉢、鉢)、瓦片36点(丸瓦10、平瓦20、板瓦5、不明1)、鐵製品1点(釘)が出土している。63は振方の埋土上層、T12・T13は振方の埋土下層から出土している。



第46図 第24号土坑出土遺物実測図

所見 時期は、同じ面の遺構と出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代と推定できる。掘方に充填されている凝灰岩は、石組み遺構の石材から転用したものと推定でき、性格は、何らかの火に関わる遺構であると考えられるが、不明である。

第24号土坑出土遺物観察表（第45・46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	船土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
63	土器質土器	火鉢	[31.2]	[21.0]	[24.0]	長石・石英・輝	橙	普通	体部外面ナメで施文化。ヘラ焼き 口縁部外面陰帯付 口縁部押付で部分的に消去 口脇部に2条の沈窓 脚部無付脚、横付脚付	掘方埋土上層	30% PL11

番号	種別	器種	左長	右長	底長	尻長	重複部 (上)	重複部 (下)	高さ	船土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T12	瓦	板瓦	41.2	[38.1]	[30.7]	33.2	6.4	4.3	4.6	長石・石英・赤色粒 子・鉄化鉱物	橙	普通	軸で固定するため に穿孔	掘方埋土下層	瓦残存 PL15
T13	瓦	板瓦	40.0	40.7	32.2	32.2	6.7	4.5	3.9	長石・石英・蛋白 色粒子・鉄化鉱物	橙	普通	軸で固定するため に穿孔	掘方埋土下層	PL15

第36号土坑（第47～50図）

位置 調査区東部のI-312区、標高27.9mの台地上平坦部に位置している。

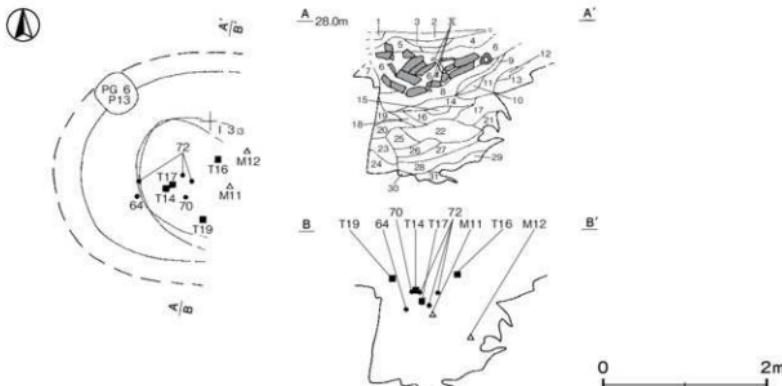
重複関係 第2号井戸跡を掘り込み、第6号ピット群P13・P14、第8号ピット群P2・P6に掘り込まれている。

規模と形状 東部が、調査区外に延びているため、長径23.9mで、短径は1.54mしか確認できなかつたが、円形と推定できる。深さは182cmで、南壁は内傾して立ち上がっており、本跡の構築時に、重複している第2号井戸跡の覆土が崩れたためと推定される。

覆土 31層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

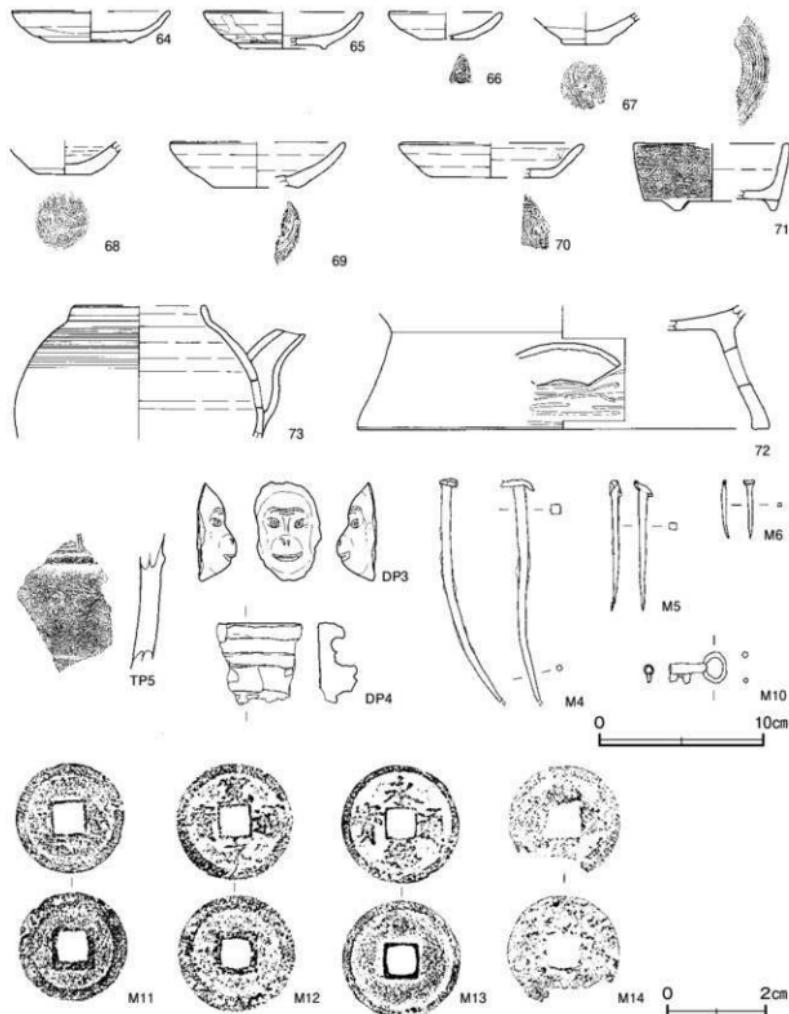
土層解説

1	褐	色	円錐少量化、炭化物、鹿沼バミス微量	9	赤	褐	色	燒土粒子多量	
2	暗	褐	色	鹿沼バミス中量、ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量	10	赤	褐	色	燒土粒子少量、粘土粒子微量
3	暗	褐	色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	11	赤	褐	色	燒土粒子少量、円錐微量
4	暗	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量	12	黄	褐	色	粘土粒子・砂粒・細繊少量、ローム粒子・炭化粒子微量
5	褐	褐	色	灰中量、燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	13	にい	黄	色	粘土粒子多量
6	灰	褐	色	炭化物・ローム粒子・燒土粒子少量	14	暗	褐	色	ローム粒子・鹿沼バミス少量、燒土粒子・炭化粒子微量
7	にい	黄	色	粘土粒子中量、燒土粒子・炭化粒子・細繊少量、ロー ム粒子微量	15	褐	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼バミス微量
8	暗	赤	褐色	炭化粒子中量、燒土粒子少量	16	暗	褐	色	鹿沼バミス・細繊少量、ローム粒子微量
					17	にい	黄	色	細繊中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量



第47図 第36号土坑実測図

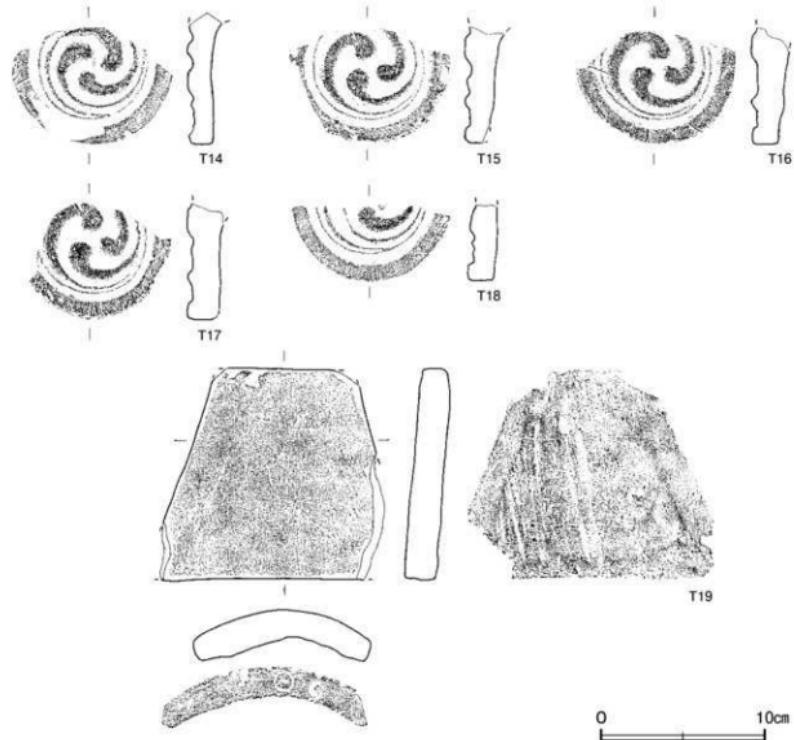
- 18 黒 色 粘土粒子・繊維少量、炭化粒子微量
 19 暗 黒 色 ローム粒子・粘土粒子少量、燒土粒子・炭化粒子、
繊維微量
 20 黒 黒 色 炭化粒子・粘土粒子少量、燒土粒子微量
 21 黒 色 粘土ブロック中量、砂粒・繊維少量、ローム粒子微量
 22 にぶい黄褐色 粘土粒子・繊維少量、ローム粒子、炭化粒子微量
 23 暗 暗 黒 色 粘土ブロック・ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
 24 黒 色 粘土ブロック中量、繊維微量



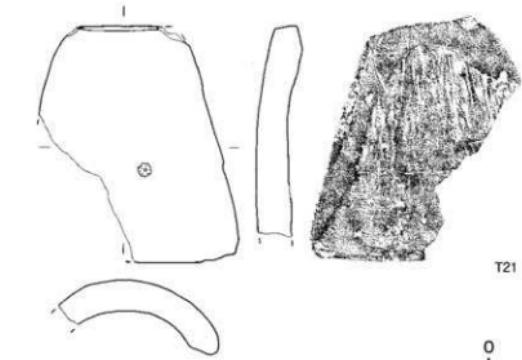
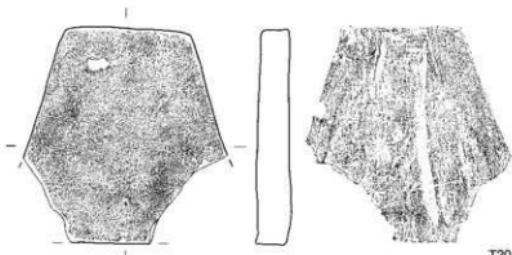
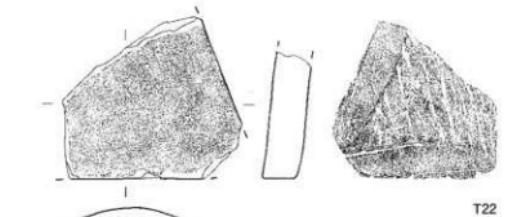
第48図 第36号土坑出土遺物実測図(1)

遺物出土状況 陶器片 10 点（碗 1, 丸皿 2, 鉢 1, 壺 5, 土瓶 1), 磁器片 1 点（碗), 土師質土器片 56 点（小皿 22, 皿 4, 火鉢 3, 植木鉢 2, 鉢 25), 瓦質土器片 5 点（碗, 火鉢, 撞鉢, 植木鉢, 香炉), 瓦片 492 点（丸瓦 69, 平瓦 337, 板埠瓦 9, 輪邊瓦 44, 栎込瓦 22, 雁振瓦 2, 不明 9), 土製品 7 (泥面子 1, 不明 6), 鉄製品 4 点 (釘 3, 鍵 1), 銭貨 5 点 (寛永通寶 2, 永樂通寶 1, 不明 2), 銅製品 (環状銅製品), 鉄滓 (6438.4g), 鉄片 (2140g) が出土している。68・M13 は覆土中・下層, 64・70・72・M11・M12・T14・T17 は覆土中層, T16・T19 は覆土上層から出土している。65・67・69・71・73・TP 5・DP 3・DP 4・M 4・M 6・M10・M14・M15・T15・T18・T20～T22 は覆土中から出土している。なお M15 は破損が著しいため、観察表の記載に止める。

所見 時期は、同じ面の遺構や出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代と推定できる。第6次面で確認された第2号井戸跡を掘り込んで構築されている。性格は、切石の凝灰岩や、焼土・炭化材、以前の生活面に帰属する16世紀後葉の遺物が確認されることから、焼却の伴う廃棄土坑である。当次面は、徳川期の二の丸御殿跡であり、御殿内に、本跡が開口していたことは想定しにくい。改修を行う際に、本跡を利用し、整地が完了した時には、本跡上も整地されていたと想定される。



第49図 第36号土坑出土遺物実測図(2)



0 10cm

第50図 第36号土坑出土遺物実測図(3)

第36号土坑遺構出土遺物観察表（第48～50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
61	陶器	丸皿	[96]	19	52	長石・石英・輝 鉄	褐色 に赤茶色	良好	底部下端露胎	覆土中層	50% 游 ¹⁴ , 30% 游 ¹⁴ , PL16
65	陶器	丸皿	[96]	23	[52]	長石・石英・輝 鉄	に赤茶色	良好	底部下端露胎	覆土中	40% 游 ¹⁴ , 美濃 PL16
66	土器質土器	小皿	[68]	16	[32]	長石・石英・雲母 輝	に赤茶色	普通	底部外面口クロナデ	覆土中	30%
67	土器質土器	小皿	-	(19)	28	長石・石英	輕	普通	底部鉗輪糸切り 底部が約3mm突出	覆土中	50% PL9
68	土器質土器	小皿	-	(20)	32	長石・石英・雲母 輝	輕	普通	底部鉗輪糸切り 内面ロクロ口	覆土中・下層	30%
69	土器質土器	皿	[106]	38	[54]	長石・石英・雲母 赤色粒子	普通	底部鉗輪糸切り	底部油煙付	覆土中	30%
70	土器質土器	皿	[110]	21	[74]	長石・石英 赤色粒子	黄灰	普通	底部鉗輪糸切り 内面油煙付 二次焼成	覆土中層	20%
71	瓦質土器	春卯	[96]	41	[82]	長石・石英 輝	に赤い斑	普通	底部露胎付 露胎外削、底露胎削、白背景へ黒書き 佐那谷 鍋スランプによる黒書き、底露胎内削に7字の落款	覆土中	30% PL11
72	土器質土器	火鉢	-	(75)	[25.2]	長石・石英・雲母 輝	輕	普通	底部欠欠 脚部外側へ黒書き 脚部扇形の襷か 脚部扇形の襷か	覆土中層	10% PL11
73	陶器	土瓶	[80]	(80)	-	長石・石英 白色粒子	灰褐色	良好	一単位6条の櫛状工具による横位の沈継	覆土中	10% PL17

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 5	瓦質土器	火鉢	長石・石英	黒	外面露帯粘付 外面スタンプによる露文	覆土中	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 3	泥混土	60	41	24	363	長石・石英・赤色粒子	表面ナデ 旗 ¹⁴	覆土中	PL13
DP 4	不明	(50)	(50)	(24)	(326)	長石・石英	2条の線竹が入っていた痕跡 すざ混入 土燒片 ¹⁴	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	莉	(35)	21	06	(26.2)	鉄	断面方形 頭部折り返し	覆土中	PL13
M 5	莉	80	11	04	7.1	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付脊	覆土中	PL13
M 6	莉	36	07	02	1.1	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付脊	覆土中	PL13
M 10	鍼	35	19	06	4.5	鉄	差し込み部中空	覆土中	PL13

番号	銹種	注	孔幅	厚さ	重量	材質	初鉄年	特徴	出土位置	備考
M 11	更永通背	22	06	0.1	25	銅	1626	日本銹 無背銹	覆土中層	PL13
M 12	更永通背	24	06	0.14	30	銅	1626	日本銹 無背銹	覆土中層	PL13
M 13	水葉通背	24	06	0.18	34	銅	1408	明銹 無背銹	覆土中・下層	PL13
M 14	不明	23	06	0.13	(13)	銅	-	-	覆土中	PL13
M 15	不明	[20]	[05]	0.16	(08)	銅	-	-	覆土中	

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区		色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠徑	珠数	横幅	縦幅							
T14	瓦	楕込瓦	(21)	-	9.7	7.4	-	-	-	-	-	灰	長石・石英 赤色粒子	普通	巴文右	覆土中層	PL14
T15	瓦	楕込瓦	(24)	-	9.3	7.4	-	-	-	-	-	灰	長石・石英 赤色粒子	普通	巴文右	覆土中	PL14
T16	瓦	楕込瓦	(25)	-	9.4	7.3	-	-	-	-	-	灰	長石・石英 輝	普通	巴文右	覆土中層	PL14
T17	瓦	楕込瓦	(22)	-	(7.0)	(5.9)	-	-	-	-	-	灰	長石・石英	普通	巴文右	覆土中層	PL14
T18	瓦	楕込瓦	(19)	-	(9.4)	(7.4)	-	-	-	-	-	灰	長石・ 黑色粒子	普通	巴文右	覆土中	PL14

番号	種別	器種	全長	全幅	厚さ	全高	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T19	瓦	輪進瓦	13.0	(139)	2.0	4.8	長石	黒褐	普通	内面布目痕と3条の硬目痕 ¹⁴ の刻印	覆土上層	PL14
T20	瓦	輪進瓦	13.2	(125)	2.1	4.6	長石・ 黑色粒子	灰	普通	内面布目痕と2条の硬目痕 ¹⁴ の刻印	覆土中	PL14
T21	瓦	輪進瓦	14.5	(121)	2.1	(6.1)	長石・石英・輝	灰灰	普通	内面布目痕 外面に花文の刻印	覆土中	
T22	瓦	輪進瓦	(9.9)	(104)	2.3	(5.1)	長石・石英・輝 赤色粒子	普通	内面に8条の硬目痕 ¹⁴ の刻印	覆土中	PL14	

第37号土坑（第51図）

位置 調査区中央部のI 2 b0区、標高27.9mの台地上平坦部に位置している。

規模と形状 南西部が搅乱を受けているため、長軸は1.60mで、短軸は1.22mしか確認できなかったが、長軸方向がN-55°-Eの隅丸方形と推定できる。深さは24cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。また部分的に粘土が確認できた。

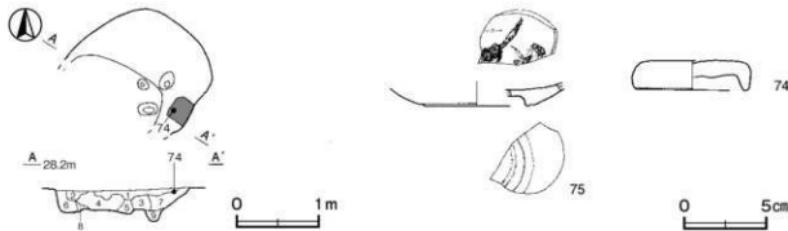
覆土 9層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
3	褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	8	黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
4	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	9	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5	黒褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土 ブロック微量			

遺物出土状況 磁器片6点（碗4、小鉢2）、土師質土器片1点（焼塙壺蓋）が出土している。74は覆土上層、75は覆土中から出土している。

所見 時期は、同じ面の遺構と出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代に比定できる。



第51図 第37号土坑・出土遺物実測図

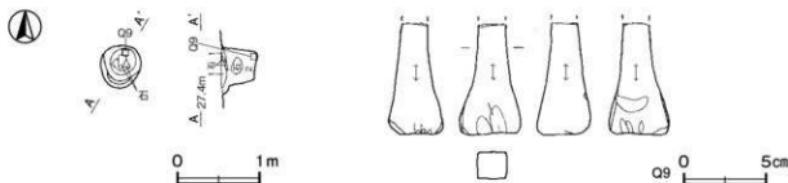
第37号土坑出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	破成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
74	土師質土器	焼塙壺蓋	6.7	1.8	-	長石・石英・輝石 にぶい青緑	普通	内面ナデ	内面が黒色に焼されている	覆土上層	80% PL1
75	磁器	小鉢	-	(1.4)	[6.3]	緻密 透明釉	灰白 良好	見込みに花文		覆土中	5% 肥前瓦

第118号土坑（第52図）

位置 調査区中央部のI-3h1区、標高272mの台地上平坦部に位置している。

規模と形状 径0.50mの円形である。深さは45cmで、底面は平坦であり壁は外傾して立ち上がっている。覆土中に20cm程の礫が確認できた。



第52図 第118号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 燃土粒子少量、ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・燃土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 瓦片2点(残瓦)、銭貨1点(不明)、石製品1点(砥石)が出土している。Q9は覆土下層、M16は覆土中から出土している。M16は、破損が著しいため観察表の記載に止める。

所見 挖り込み面は不明であるが、出土遺物から近世に比定できる。

第118号土坑出土遺物観察表(第52図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	砥石	(68)	38	33	(989)	凝灰岩	底面4面 端部に鋸刃などを研いた凹み	覆土下層	PL12
M 16	不明	46	67	0.1	(172)	陶	-	覆土中	計画のみ

第163号土坑(第53図)

位置 調査区南西部のI 2J8区、標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第161号土坑、第5号ピット群P 25・P 26、第24号不明遺構を掘り込み、第1A・1B号用排水路、第164号土坑、第6号ピット群P 6・P 7に掘り込まれている。

規模と形状 南部及び西部が調査区域外に延びているため、長軸は2.06mで、短軸は1.00mしか確認できなかつたが、円形と推定できる。調査区間に位置し、調査区壁の崩落の危険性があるため、約140cm下げた段階で、下部の調査を断念した。

覆土 10層に分層できる。砂粒が主体であり、ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 白色 ローム粒子少量、炭化物微量

7 オリーブ黒色 燃土粒子・細繊維微量

2 オリーブ黒色 ロームブロック・炭化粒子微量

8 オリーブ黒色 ローム粒子少量、細繊維微量

3 白色 瓦片少量、炭化物微量

9 暗オリーブ色 砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子・燃土粒子微量

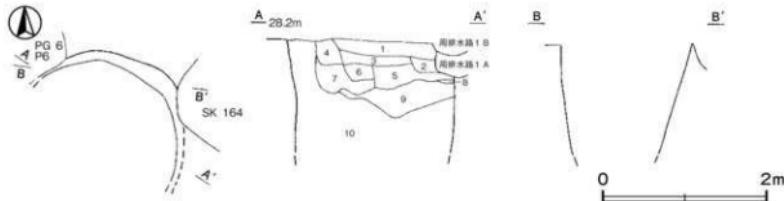
4 暗オリーブ色 粘土ブロック・中凹縫少量

10 暗オリーブ色 砂粒多量、細繊維微量

5 白色 炭化粒子少量、燃土粒子微量

6 暗オリーブ色 細繊維少量、燃土粒子微量

所見 時期は、同じ面の遺構から17世紀代中葉から18世紀代と推定できるが、遺物が伴わないため、明確ではない。



第53図 第163号土坑実測図

第164号土坑(第54図)

位置 調査区南部のI 2J9区、標高28.0mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第163号土坑、第5号ピット群P 24を掘り込み、第1A・1B号用排水路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.18m、短軸1.54mで、長軸方向がN-34°-Eの長方形である。深さは94cmで、外傾し

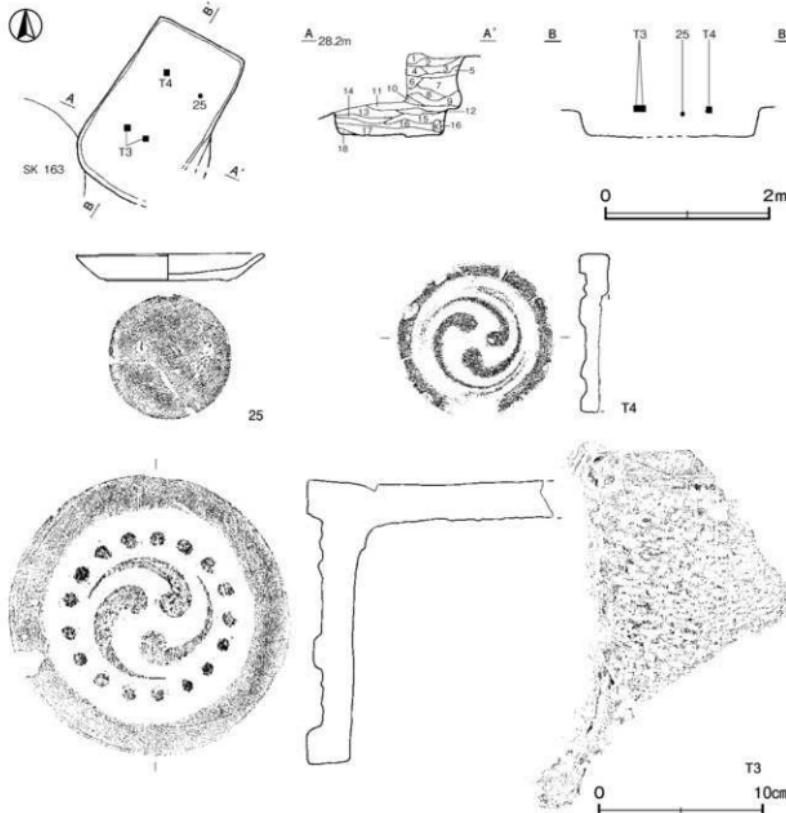
て立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土 18層に分層できる。各層にローム粒子を含み、締まりが強いことから、整地を行う際に埋め戻されたと推定される。

土層解説

1	暗オリーブ色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	10	灰オリーブ色	焼土粒子少量
2	暗オリーブ色	炭化物、繊維微量	11	暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
3	オリーブ色	ローム粒子多量、炭化粒子、繊維微量	12	暗褐色	赤色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	オリーブ色	焼土粒子・炭化粒子微量	13	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
5	オリーブ黒色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	14	灰褐色	砂粒少量
6	オリーブ黒色	ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子微量	15	灰褐色	炭化粒子少量
7	にじ	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	16	褐色	焼土粒子少量
8	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	17	灰オリーブ色	炭化粒子・粘土粒子微量
9	暗褐色	炭化物、焼土粒子少量、繊維微量	18	オリーブ黒色	焼土粒子微量

遺物出土状況 陶器片1点(碗)、土師質土器片1点(皿)、瓦質土器片1点(鉢)、瓦片18点(丸瓦4、平瓦13、棟込瓦1)、鉄製品1点(釘)、銅製品1点(鏡)が出土している。また、混入した土師器片3点(壺1、甕2)。



第54図 第164号土坑・出土遺物実測図

灰釉陶器片 1 点（碗），鐵滓 1 点（73.6g）が出土している。25・T 3・T 4 は覆土下層から出土している。

所見 時期は、同じ面の遺構と出土遺物から、18世紀代に比定できる。

第 164 号土坑出土遺物観察表（第 54 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
25	土質質土器	皿	113	17	7.5	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	底部回転糸切り後、ナデ	覆土下層	80% PL.9

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部		文様(△)		色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考					
					外径	内径	珠律	珠数	横幅	縦幅	仰衝(上)	俯衝(下)							
T 3	瓦	軒丸瓦	(15.0)	17.3	17.3	13.5	0.9~1.0	17	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・赤色粒子	普通	巴文右	覆土下層	PL.14
T 4	瓦	轍丸瓦	(20)	96	96	7.3	-	-	-	-	-	-	-	黄灰	長石・石英・赤色粒子	普通	巴文右	覆土下層	PL.14

③ ピット群

第 6 号ピット群（第 55・56 図）

位置 I 2 h9 区～I 3 h3 区、標高 28.1m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 36・163 号土坑を掘り込み、第 1 号石敷き遺構、第 4 号柱穴列 P 2～P 5、第 5 号柱穴列 P 2、第 7 号ピット群 P 7 に掘り込まれている。

規模と形状 南北 10.5m、東西 25.5m の範囲に、15 か所のピットを確認した。

ピット 15 か所。長径 39～132cm、短径 33～76cm の円形・椭円形・不整椭円形で、深さは 4～84cm である。P 9・P12・P13 では礫を確認した。

ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・細繊微量	19	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子・細繊微量
2 黒褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	20	褐	色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・細繊微量
3 黒褐色	細繊少量、ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量	21	暗褐色	色	ローム粒子少量、中円繊微量
4 黒褐色	ローム粒子少量、大円繊・燒土粒子・炭化粒子微量	22	褐	色	燒土粒子・炭化粒子少量
5 黒褐色	細繊多量、燒土粒子・炭化粒子微量	23	褐	色	燒土ブロック・大円繊少量
6 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	24	灰褐色	色	燒土粒子微量
7 明褐色	中円繊中量、ローム粒子少量	25	灰褐色	色	大円繊・燒土ブロック・凝灰岩片微量
8 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	26	褐	色	ローム粒子多量
9 褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	27	暗褐色	色	炭化粒子少量、燒土粒子微量
10 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・燒土粒子微量	28	灰褐色	色	燒土粒子・炭化粒子少量
11 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	29	黑褐色	色	燒土粒子・炭化粒子微量
12 黒褐色	細繊少量、ローム粒子・燒土粒子少量、炭化粒子微量	30	褐色	色	燒土ブロック少量、炭化物微量
13 灰褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	31	黑褐色	色	燒土粒子・炭化粒子少量、大円繊微量
14 褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	32	褐	色	中円繊多量、ローム粒子少量、燒土粒子微量
15 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	33	暗褐色	色	中円繊少量、炭化物・燒土粒子微量
16 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	34	灰褐色	色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック・細繊微量
17 黒褐色	炭化粒子中量、燒土粒子微量	35	褐	色	ローム粒子中量、細繊微量

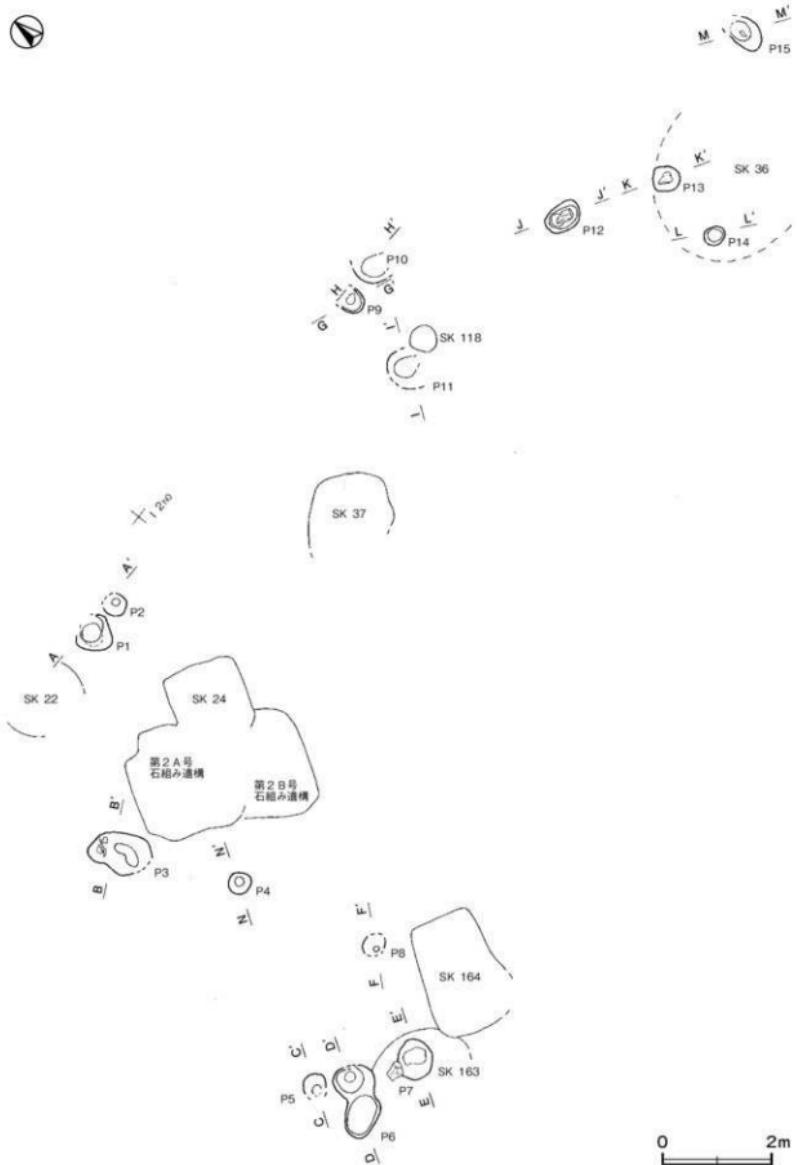
細繊微量

遺物出土状況 陶器片 4 点（鉢 1、蓋 1、壺 2）、磁器片 11 点（碗 6、鉢 5）、土質質土器片 13 点（小皿 7、火鉢 2、鉢 1、壺 2、壺 1）、瓦質土器片 2 点（火鉢、鉢）、瓦片 68 点（丸瓦 24、平瓦 20、棟瓦 2、板棚瓦 13、不明 9）、鉄製品 1 点（釘）が出土している。また、混入した鐵滓 1 点（165g）が出土している。39 は P 6 から、40 は P 9 からそれぞれ出土している。

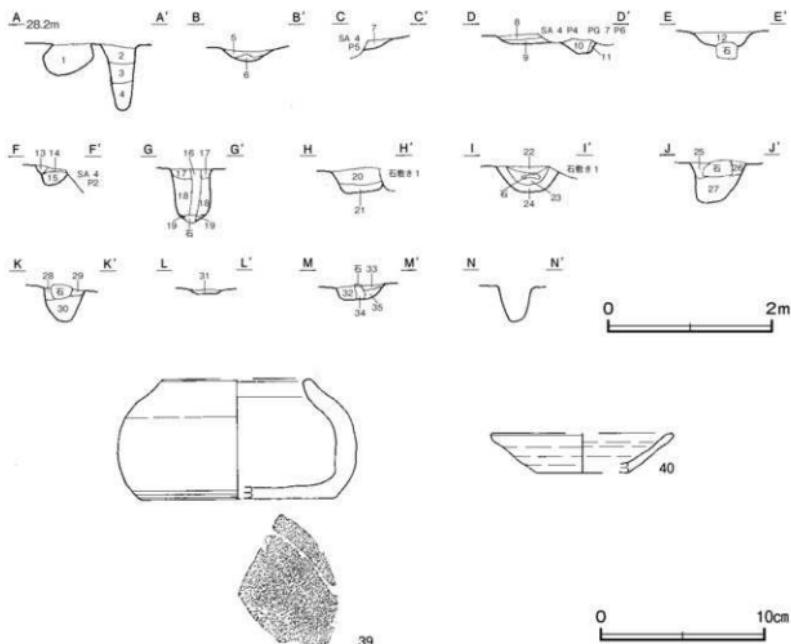
所見 時期は、同じ面の遺構と出土遺物から、17世紀中葉から18世紀代と推定できるが、明確でない。

第 6 号ピット群出土遺物観察表（第 56 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
39	土質質土器	皿	(90)	7.3	[118]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面底部に同心円のロクロ目	P 6 (SK15)	30%
40	土質質土器	小皿	[110]	24	[57]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	ロクロ成形	P 9 (SK30)	10%



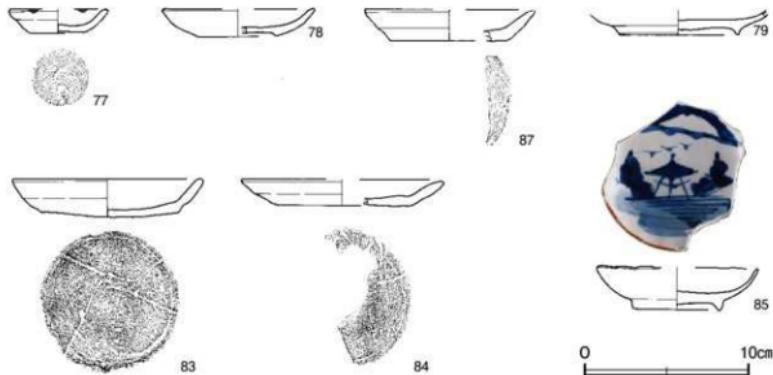
第55図 第6号ピット群実測図



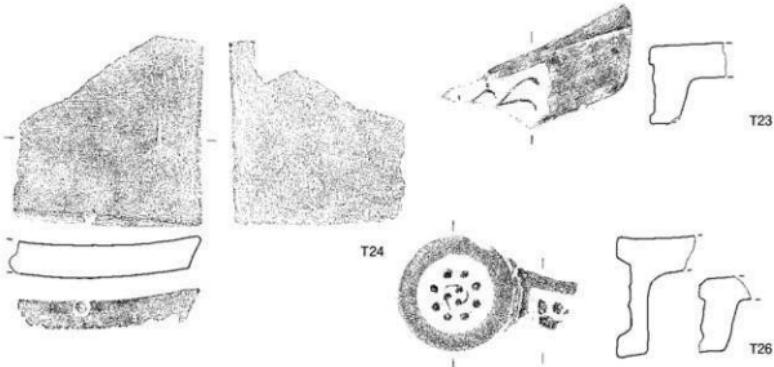
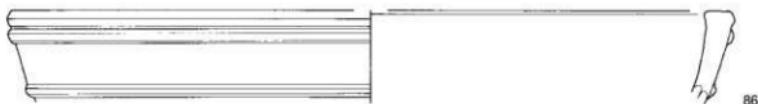
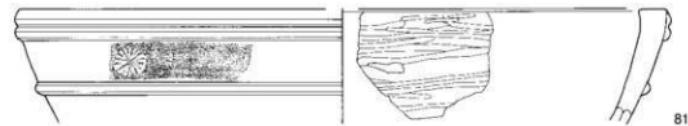
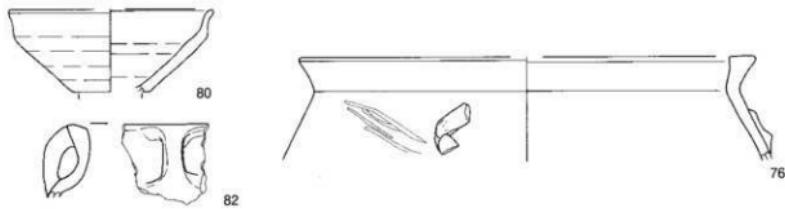
第56図 第6号ピット群・出土遺物実測図

④遺構外出土遺物（第4次面）（第57～59図）

当次面の遺物は、17世紀中葉から18世紀代の遺物が主体となる。

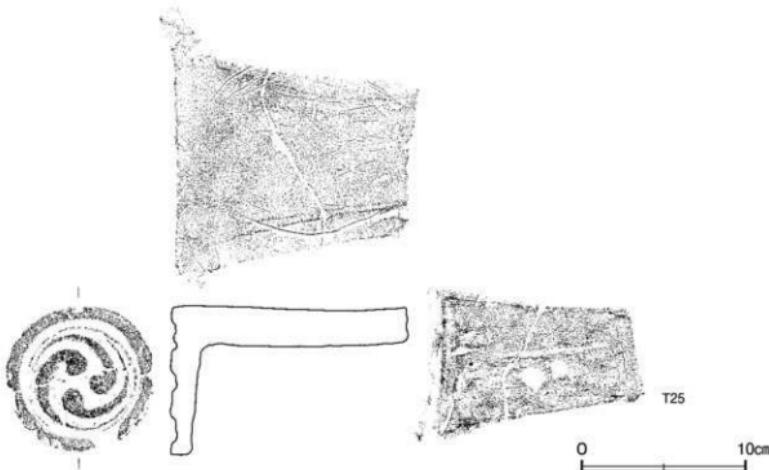


第57図 遺構外出土遺物実測図(1)



0 10cm

第58図 遺構外出土遺物実測図（2）



第59図 造構外出土遺物実測図（3）

第4次面造構外出土遺物観察表（第57～59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	瓦質土器	甕	[27.8]	(64)	—	長石・輝	灰	普通	体部外面へラ磨き 外面隆帯貼付	12b6	5%
77	土質質土器	小甕	[6.0]	14	3.4	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	底部鉛軸系切り 口縁部油煙付着	12b9	PL. 9
78	陶器	小甕	[9.1]	17	[4.8]	長石 底輪	オリーブ青	普通	外・内面施釉	12b9	30% 褐 ¹ 、 米色 PL.16
79	陶器	甕	—	[1.5]	[7.4]	精良 長石輝	灰白	良好	外・内面施釉 細かな貫入	12b9	20% 唐津
80	陶器	天日茶碗	[12.4]	(50)	—	長石 純輝	褐	良好	外・内面施釉 底部露胎	12b9	5% 褐 ² 、 米色 PL.17
81	瓦質土器	大鉢	[39.4]	(7.0)	—	長石・石英・輝	灰	普通	体部外面2条の隆帯貼付 従帯間にスタンプによる花文 体部内面へラ磨き	12b9	5%
82	土質質土器	内耳瓶	—	(4.9)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面部付着	12b9	5%
83	土質質土器	甕	11.6	24	8.4	長石・輝	褐	普通	底部鉛軸系切り後、ナデ 体・底部外面の一部に水窓	12b9	80% PL. 9
84	土質質土器	甕	[12.4]	16	[8.2]	長石・輝 赤色粒子	橙	普通	底部鉛軸系切り後、ナデ	12b9	30%
85	磁器	小甕	[9.7]	26	5.3	穀壳 透明釉	灰白	良好	内面染付の模様山水文	12b9	60% 褐 ³ 、 米色 PL.17
86	瓦質土器	火拂	[43.8]	(57)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子・輝	灰	普通	体部外面2条の隆帯貼付 従帯間に文様が押印されているが、劣化が激しく印象ではない	12b9	5%
87	土質質土器	小甕	[10.4]	19	[7.2]	長石・拘泥石・ 赤色粒子	浅黄橙	普通	底部鉛軸系切り	—	20%

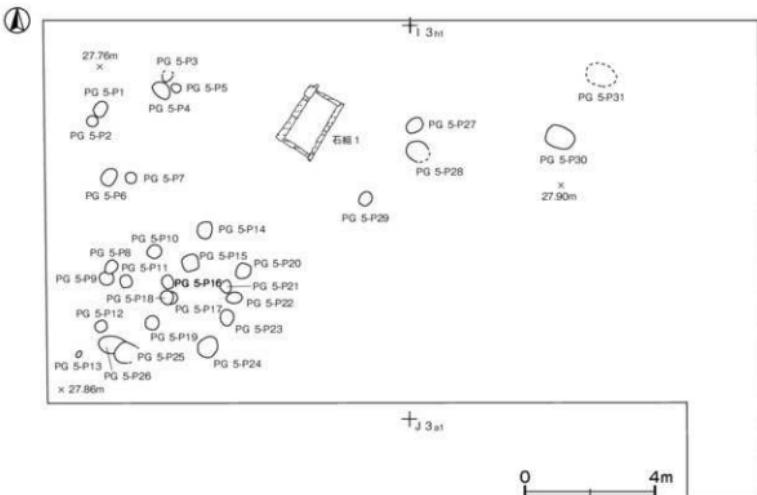
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 6	瓦質土器	火拂	長石・石英・赤色粒子	黒褐	体部外面へラ磨き 外面隆帯貼付 外面スタンプによる要形文	12b9	PL.12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	刃	(6.9)	1.4	0.4	(7.2)	鉄	断面方形 頭部折り返し	—	PL.13
M8	刃	6.9	0.6	0.3	5.0	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付着	—	PL.13
M9	刃	2.8	0.7	0.2	1.1	鉄	断面方形 頭部折り返し 赤色塗料付着	12b9	PL.13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠洋	珠数	横幅	縱幅	W(H)(L)	H(W)F							
T23	瓦	軽平瓦	(47)	(12.4)	-	-	-	-	(6.2)	3.0	1.0	0.5	4.7	灰	長石・石英	普通	唐草文	I 2.09	
T24	瓦	平瓦	(11.7)	(11.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・針状鉱物	普通	○の刻印	I 2.09	PL15
T25	瓦	極込瓦	89	89	89	7.4	-	-	-	-	-	-	-	灰	長石・石英・針状鉱物 長石・石英・石墨 長石・石英・石墨	普通	三文右 円筒1条の 裏面・内面指印	I 2.09	PL14
T26	瓦	軽伐瓦	(56)	(11.6)	7.4	4.9	0.6	8	(2.8)	2.5	0.7	-	4.5	灰	長石・石英・ 周縁斜子	普通	巴文右	-	

(2) 第5次面

当次面は、第4次面に伴う、礎を主体とした基礎地盤面である。



第60図 第5次面全体図

①石組み造構

第1号石組み造構 (SX20) (第61・62図)

位置 調査区中央部のI 2 b0区。標高 27.6 m の台地上に位置している。

規模と形状 石組みの規模は、長軸 2.02 m、短軸 1.17 m の長方形で、掘方の規模は、北東・南西軸は 2.30 m で、長軸方向は N - 32° - E である。壁高は 0.80 m で、底面は平坦である。

石組みの構築状況 石材 28 点 (北東3、南西3、南東9、北西13) を確認した。長さ 84 ~ 88 cm、幅 23 ~ 26 cm、厚さ 10 ~ 12 cm、重量 33.5 ~ 47.8 kg の凝灰岩の切石が多く用いられている。積み方は、各段の高さを揃える布積みで、すべての石材が、長辺を横にして積まれている。下から3段は天端を垂直に積み、4段目を水平に積んでいる。南西・北東壁の石材は、端を揃えて積み、南東壁・北西壁は、端が揃わないよう、互い違いに積み、

長さ 16 ~ 20cmの石材で、隙間ができないように調節している。底面に、石材は確認されなかった。

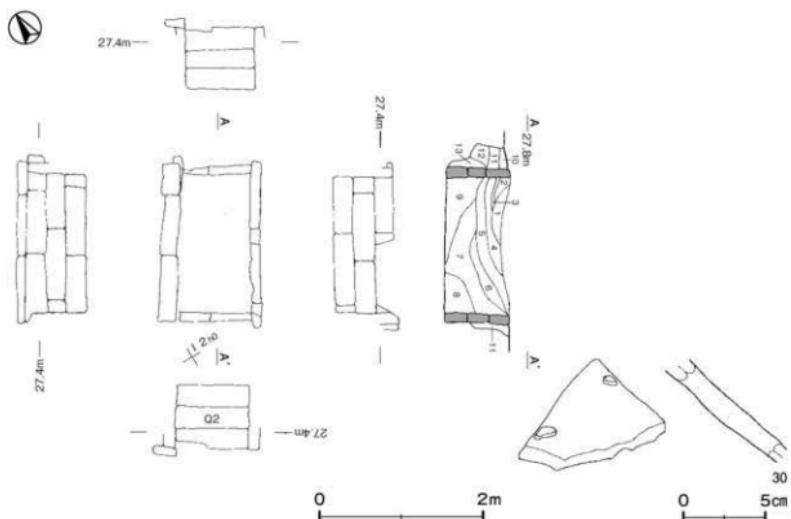
覆土 9層に分層できる。各層に、細礫や粘土ブロックなどが含まれ、締まりが強いことから、整地の際に埋め戻されたと推定される。第 10 ~ 13 層は、掘方への埋土である。

土層解説

1 灰 黄褐色	粘土粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	8 にぬ・黄褐色	細礫少量、炭化物微量
2 灰 色	燒土粒子・炭化粒子少量	9 灰 色	粘土粒子中量
3 灰 褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	10 灰 褐色	粘土粒子・細礫少量
4 灰 褐色	炭化粒子・赤色粒子微量	11 灰 褐色	ローム粒子中量、赤色粒子微量
5 灰 褐色	ローム粒子少量、炭化物・燒土粒子微量	12 灰 褐色	燒土粒子・粘土粒子少量
6 黑 褐色	ロームブロック微量	13 灰 褐色	燒土粒子少量、炭化粒子微量
7 灰 褐色	炭化粒子微量		

遺物出土状況 混入した陶器片 1 点（甕）、瓦片 6 点（平瓦）、鐵製品 3 点（釘）が出土している。30 は覆土中から出土している。石材のサンプルは拓影図及び観察表に記載する。

所見 時期は、当次面が第4次面に伴う地業面と推定されることから、17世紀代に比定できる。本跡は、生活面である第4次面で、機能していたと推定される。性格は不明である。

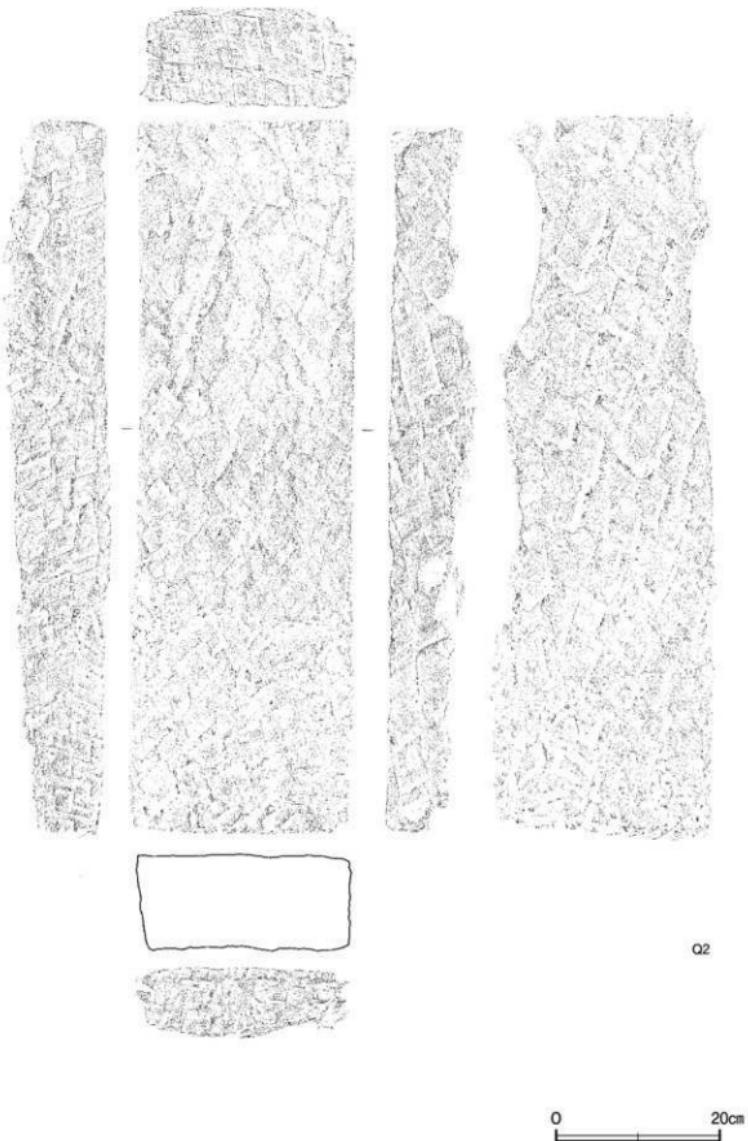


第 61 図 第 1 号石組み遺構・出土遺物実測図

第 1 号石組み遺構出土遺物観察表（第 61・62 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	陶器	甕	-	(63)	-	焼石・石英・赤色粒子	暗オリーブ	普通	体部外面自然釉	覆土中	5%常滑

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q.2	石材	88.5	27.0	11.6	(30.3)	凝灰岩	幅 4cm 程の刃先が斜めの工具痕、無面はより密な工具痕		



第62図 第1号石組み遺構出土遺物実測図

②ピット群

第5号ピット群 (第63・64図)

位置 I 2h8区～I 3h2区、標高27.8mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第93号土坑、第3号柱穴列跡P8、第4号ピット群P14を掘り込み、第163・164号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北9.0m、東西16.7mの範囲に、31か所のピットが確認できた。

ピット 31か所。長径32～86cm、短径27～68cmの円形・楕円形・隅丸方形で、深さは7～65cmである。

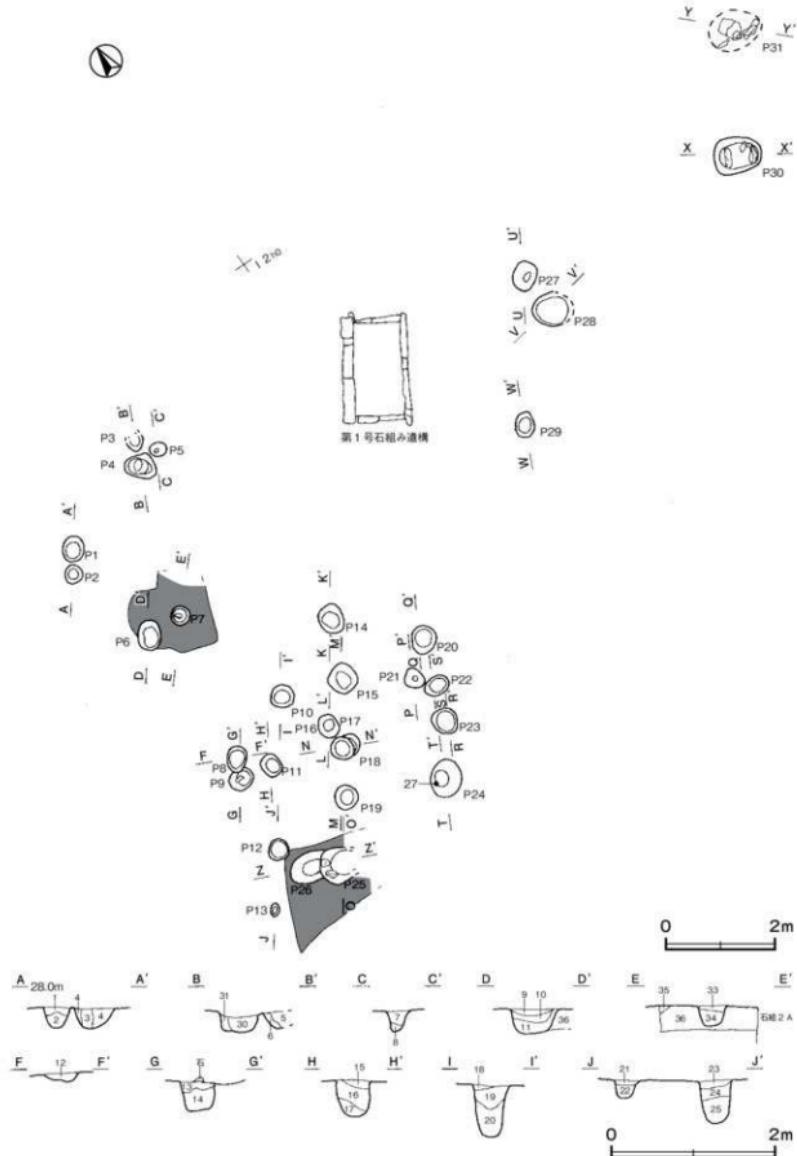
P31は掘り込みが浅く、石材が確認できただけだが、礎石の可能性を考慮し、本跡に含めて記述する。

ピット土層解説 (各ピット共通)

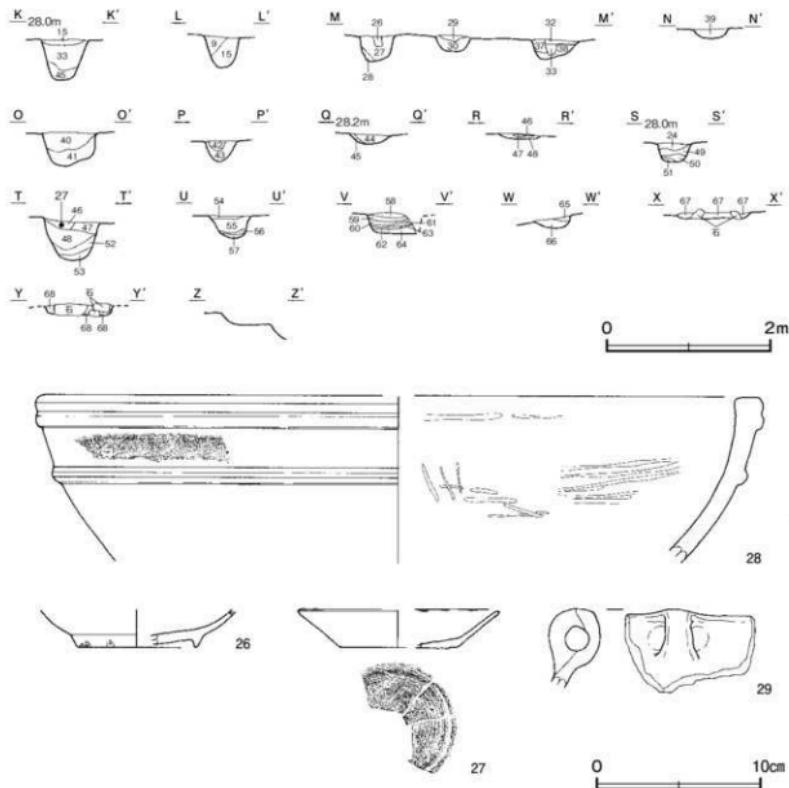
1 明 黄 色	ローム粒子少量、粘土粒子・細繩微量	33 黒 黄 色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰 黄 色	ローム粒子少量、粘土ブロック微量	34 黒 黄 色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	35 黄 黄 色	焼土粒子少量、炭化物微量
4 黄 色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細繩微量	36 黄 黄 色	中円錐・ローム粒子中量、粘土ブロック微量
5 黑 黄 色	ローム粒子・炭化粒子微量	37 黒 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
6 黄 色	炭化粒子・粘土粒子・細繩微量	38 黑 黄 色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
7 棕 色	細繩中量、粘土ブロック・ローム粒子微量	39 黑 黄 色	炭化粒子少量、焼土粒子微量
8 にぶい褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	40 黄 黄 色	中円錐少量
9 暗 黄 色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	41 黄 黄 色	細繩中量
10 黑 黄 色	炭化粒子少量、粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量	42 黑 黄 色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
11 灰 黄 色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量	43 黑 黄 色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
12 黄 色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	44 黄 黄 色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
13 暗 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・円錐微量	45 黑 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
14 暗 黄 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	46 黑 黄 色	炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
15 黑 黄 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	47 黑 黄 色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
16 黑 黄 色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	48 黄 黄 色	ローム粒子微量
17 暗 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	49 黄 黄 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
18 黑 色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	50 黑 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
19 黑 黄 色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	51 明 黄 黄 色	粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
20 黄 色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	52 黄 黄 色	ローム粒子・粘土粒子微量
21 暗 暗 褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	53 暗 暗 褐色	ローム粒子微量
22 黑 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細繩微量	54 にぶい褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量
23 黑 黄 色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	55 黄 黄 色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量
24 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	56 黃 黄 色	粘土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量
25 黑 黄 色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	57 黑 黄 色	炭化粒子少量、焼土粒子微量
26 黑 色	ローム粒子少量	58 にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子・細繩少量
27 黄 色	炭化粒子・炭化粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	59 黄 黄 色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
28 黄 色	ローム粒子・炭化粒子微量	60 黄 黄 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量
29 黑 黄 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	61 黄 黄 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子微量
30 黑 黄 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細繩微量	62 黄 黄 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
31 黄 色	ローム粒子・粘土粒子微量	63 底 黄 色	焼土粒子・炭化粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
32 黑 黄 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	64 明 黄 黄 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細繩微量
		65 黄 黄 色	燒土ブロック微量
		66 暗 黄 色	炭化物・焼土粒子少量、ロームブロック微量
		67 にぶい黄褐色	ローム粒子多量、粘土ブロック・細繩微量
		68 にぶい黄褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 陶器片3点(碗、擂鉢、甕)、磁器片5点(碗4、皿1)、土師質土器片11点(小皿9、内耳鍋1、鉢1)、瓦質土器片3点(鍋、火鉢、鉢)、瓦片78点(丸瓦17、平瓦57、輪違瓦1、棟込瓦2、不明1)、鉄製品6点(釘1、不明5)が出土している。また混入した土師器片1点(甕)、須恵器片1点(甕)、石製品1点(不明)が出土している。26はP17、28はP24、29はP25の覆土中からそれぞれ出土している。27はP24から出土しており、覆土上層と覆土中から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、当次面が第4次面に伴う地業面と推定されることから、17世紀代に比定できる。性格は、不明である。網伏せ部はロームを主体とした土が、部分的に確認できたところである。



第63図 第5号ピット群実測図



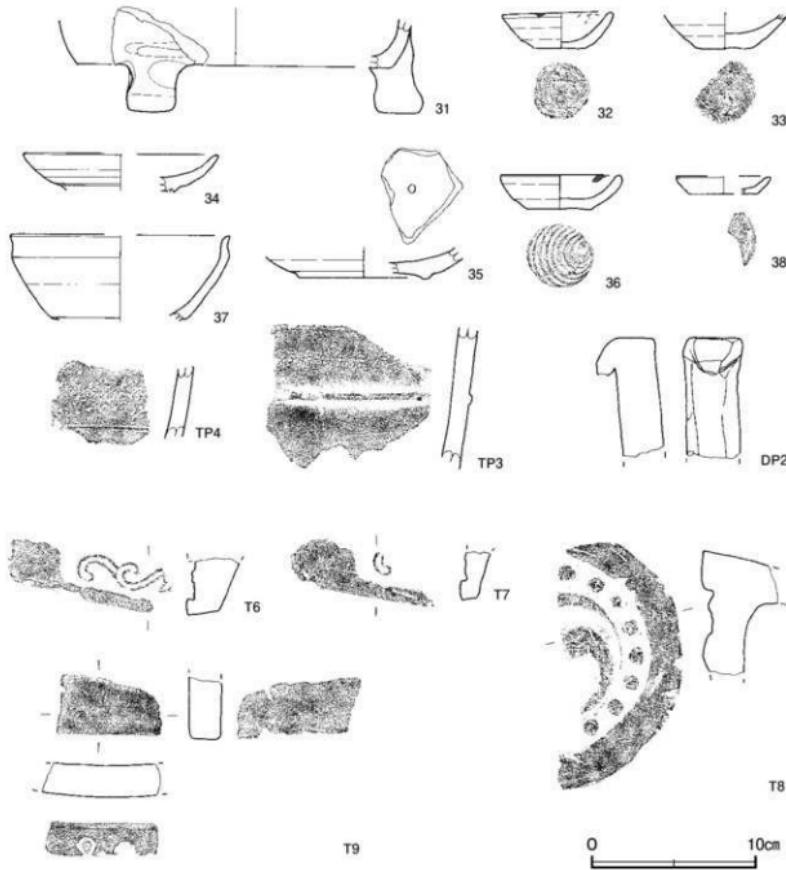
第64図 第5号ピット群・出土遺物実測図

第5号ピット群出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	磁器	瓶	-	(23)	[7.4]	緻密 灰釉	青オーブル灰	良好	外・内面施釉 高台部砂粒付着	P17 (SK69)	10% PL16
27	土器質土器	小瓶	[12.2]	23	[7.0]	石英・角尖石・赤色粒子	橙	普通	底部削軸系切り後、ナデ 口縁部油焼付着	P24 (SK66)	30%
28	瓦質土器	火葬	[44.0]	(10.1)	-	長石・石英・輝	灰	普通	体部外面2条の除帯黏付 除帯間にスタンプによる花文 体部内面へラ磨き	P24 (SK66)	10% PL 9
29	土器質土器	内面磨	-	(4.8)	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄	普通	口縁部内面ナデ	P25 (SK65)	5% PL11

③遺構外出土遺物（第5次面）（第65図）

当次面の出土遺物は、16世紀後葉から17世紀代に比定できる。



第65図 造構外出土遺物実測図

第5次面造構外出土遺物観察表（第65図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	瓦質土器	火鉢	—	(6.3)	[19.1]	良石・石英・ 褐色粒子	暗灰	普通	体部外面へラ磨き 脚部くびれ部分に掛彫痕	12b9	5%
32	土質質土器	小皿	6.6	2.3	3.0	良石・石英・砂粒	褐	普通	底部鉛軸系切り後、ナデ 口縁部油煙付着	12d8	99% PL. 9
33	土質質土器	小皿	—	(2.2)	3.2	良石・石英・雲母・ 赤色粒子	浅黄褐	普通	底部鉛軸系切り後、ナデ	12d9	40%
34	陶器	皿	[11.8]	(2.3)	—	良石・石英・長石粉	灰灰	普通	体部下端へラ磨り 外・内面施釉 真入 志野	12b9	10% 面糊 ¹ PL. 16
35	陶器	皿	—	(1.9)	[7.8]	長石・長石粉	灰白	普通	外・内面施釉 真入 志野	12d9	5% 面糊 ¹ PL. 16
36	土質質土器	小皿	7.1	2.1	4.0	良石・石英・雲母・ 赤色粒子・針状物	にぶい褐	普通	底部鉛軸系切り 口縁部・内面油煙付着	12d9	90% PL. 9
37	陶器	天目茶碗	[13.4]	(5.3)	—	石英・鐵鉱	にぶい赤褐	普通	高台削りだし 体部下端露胎	13b2	5% 面糊 ¹ PL. 16
38	土質質土器	小皿	[5.6]	1.1	[4.2]	良石・石英・雲母・ 赤色粒子	褐	普通	底部鉛軸系切り	—	30%

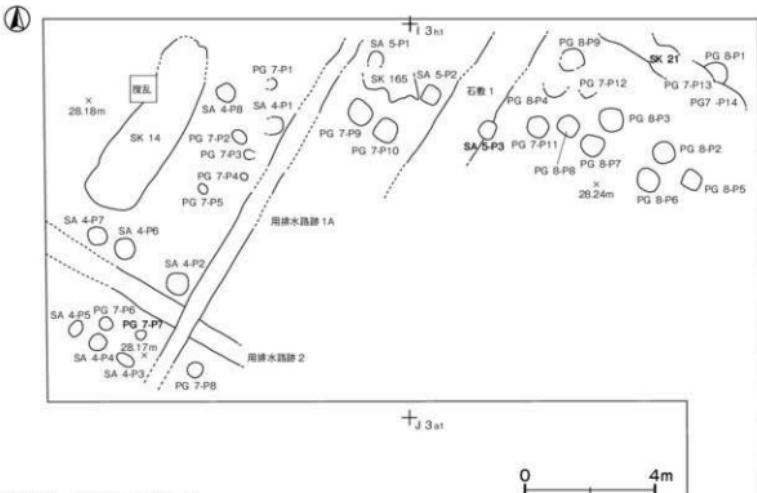
番号	種別	器種	胎 土		色 調		手 法 の 特 徴 は か						出土位置	備考
TP 3	瓦質土器	火鉢	長石・石英・鐵		黒褐		体部外面ハラ焼き 外面隆帯貼付 外面スタンプによる花文						I 2 b①	PL12
TP 4	瓦質土器	火鉢	長石・石英・雲母		にぶい橙		体部外面に2条の沈線 沈線上部にスタンプによる変形文						I 3 b③	PL12

番号	器種	長さ	厚さ	孔溝	重量	胎 土	特 徴						出土位置	備考
DP 2	五徳	(73)	—	—	(886)	長石・石英	ヘラ削りによる角張った形状						I 2 b⑨	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部			文理区			胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	板幅						
T 6	瓦	軒平瓦	(11.0)	(21)	—	—	—	—	(6.7)	(2.0)	—	10	(3.3)	暗灰	長石・石英 普通 唐草文	I 2 b⑧ PL14
T 7	瓦	軒平瓦	(9.1)	(1.5)	—	—	—	—	(4.0)	(1.7)	—	10	(2.9)	灰 長石・石英 普通 唐草文	I 2 b⑧	
T 8	瓦	軒丸瓦	(4.6)	(7.3)	(15.8)	(11.4)	0.8	(8)	—	—	—	—	—	灰 長石・石英 普通 巴文左	I 2 b⑩ PL14	
T 9	瓦	平瓦	(3.9)	(7.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	灰 長石・石英 普通 ○の刻印 黒色粒子	I 2 b⑨	

(3) 第3次面 (第 66 図)

当次面は、ロームを主体とした化粧土が施され、生活面として機能していたと考えられる。時期は、出土遺物から18世紀から19世紀代に比定でき、当次面以降は、近代から現代の整地面となる。当次面が近世の最終面となる。

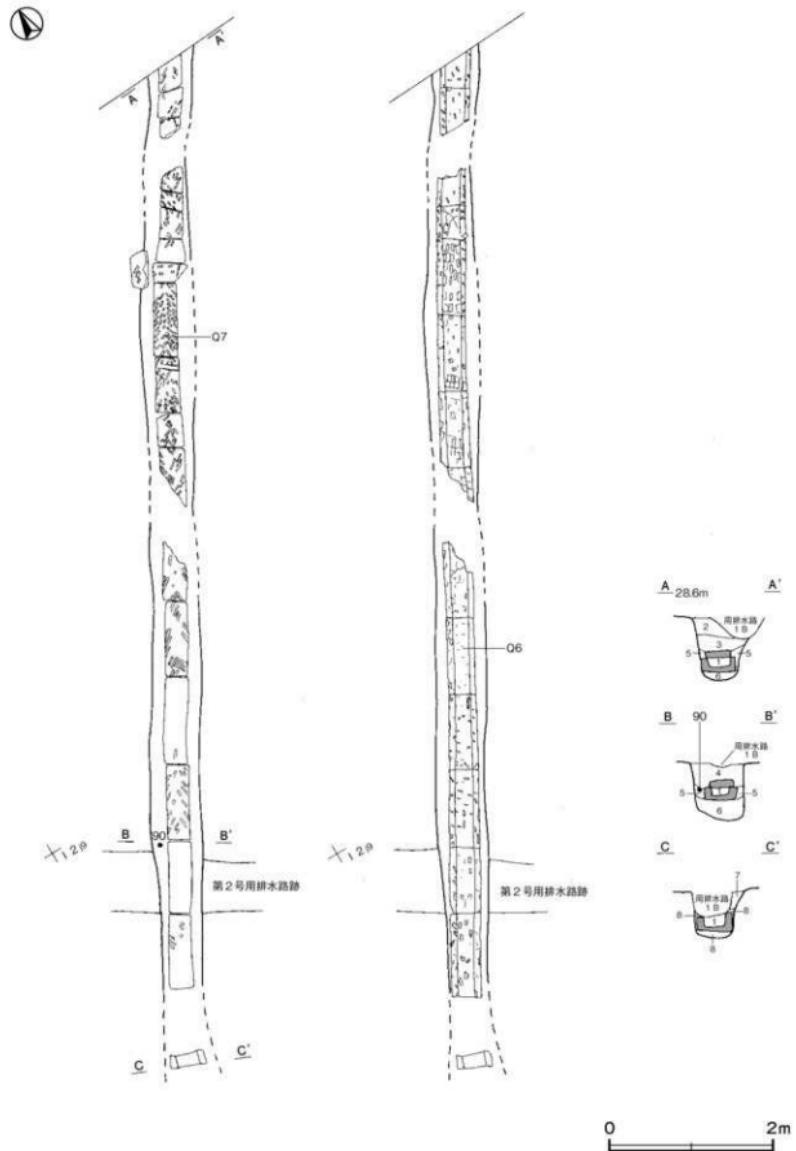


第 66 図 第3次面全体図

①用排水路跡

第 1 A 号用排水路跡 (SX 7 旧) (第 67 ~ 69 図)

位置 調査区北西部の I 2 b① ~ I 2 b⑨ 区、標高 282 m の台地上に位置している。



第67図 第1A号用排水路跡実測図

重複関係 第2号用排水路跡、第163・164号土坑を掘り込み、第1B号用排水路、第3・4号瓦溜まり、第5号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 I 29区から北東方向(N - 30° - E)に直線状に延びている。四字状に加工された凝灰岩製の石橋 16点と、その上部に、同じ石材の蓋 19点が埋設されている状況を確認した。完存の石橋は、長さ約0.90m、幅約0.30m、重量41.2~48.6kg。蓋は、長さ0.90~1.06m、幅約0.34m、重量29.2~36.6kgである。南西・北東端が調査区域外に延びているため、長さは122mしか確認できなかった。掘方の規模は、上幅0.48~0.62m、下幅約0.20m、深さ60cmほどで、U字状に掘り込まれている。

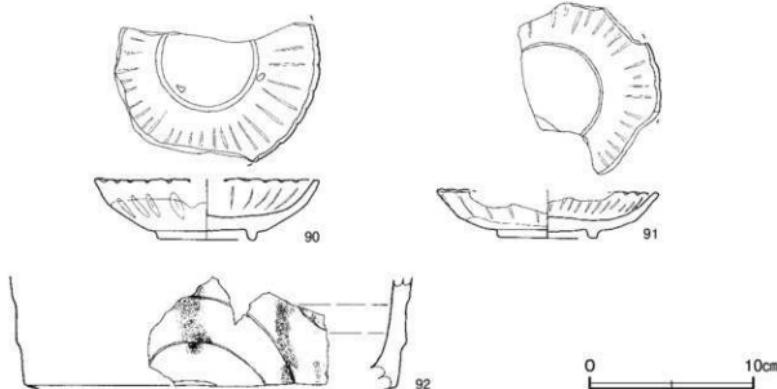
覆土 単一層である。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第2~8層は、掘方への埋土である。

土層解説

1 オリーブ黒色	炭化粒子少量	5 にぶい褐色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・細縫微量	6 灰褐色	細縫少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・細縫微量	7 黒褐色	炭化粒子微量
4 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	8 暗褐色	赤色粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器片17点(碗1、菊皿3、皿3、水鉢1、火鉢1、擂鉢1、植木鉢1、小鉢1、小形壺1、土瓶1、瓶1、壺2)、磁器片9点(碗)、土師質土器片5点(小皿2、鉢2、壺1)、瓦片376点(丸瓦38、平瓦17、棟瓦320、不明1)が出土している。また混入した土師器片4点(环)、須恵器片1点(壺)が出土している。90は掘方の埋土中層から出土している。91は掘方の埋土中と、第4次面の遺構外から出土した破片が接合したものである。92は埋土中から出土している。完存の石橋と蓋をサンプルとし、拓影図及び観察表で記載する。

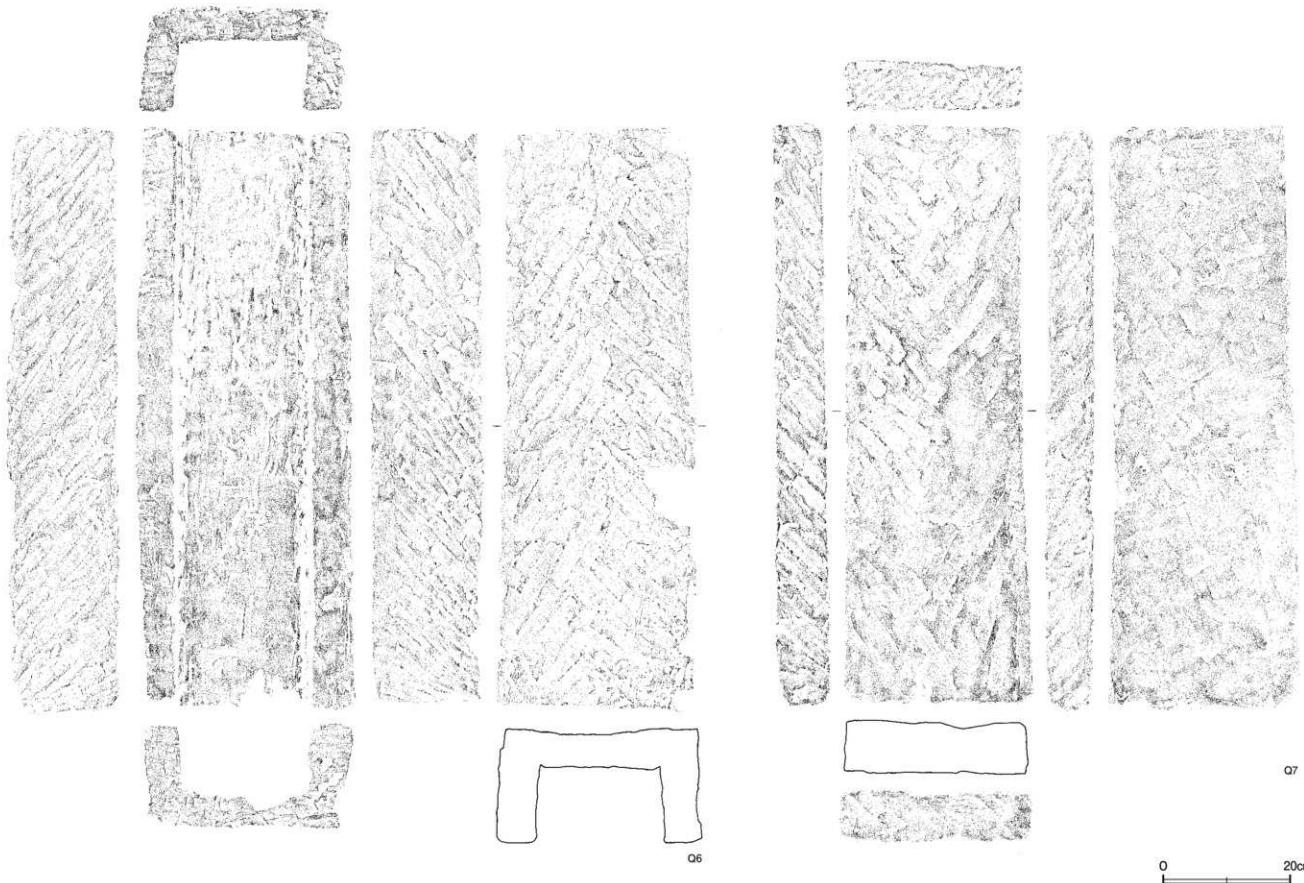
所見 時期は、出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから19世紀代に比定できる。



第68図 第1A号用排水路跡出土遺物実測図(1)

第1A号用排水路跡出土遺物観察表(第68・69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施釉	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
90	陶器	菊皿	[138]	38	[60]	精良	赤色粒子	にぶい黄褐 良好 灰釉	口羽部輪花 内面打出し菊文 トチノ脚赤変 高台部貼付	埋土中層	40% 濃褐色 PL18
91	陶器	菊皿	[132]	29	[60]	精良	灰釉	浅青 良好	口羽部輪花 内面打出し菊文 高台部貼付	埋土中	40% 濃褐色 PL18
92	陶器	水鉢	-	[69]	-	精良	石英	灰白 良好	外・内面施釉 体部外面流水紋	埋土中	5% 濃褐色 赤道



第69図 第1A号用排水路跡出土遺物実測図(2)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	側面形	重量(kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	石鋪	925	33.5	18.1	19.2	289	凝灰岩	幅26cmの工具痕、底部外縁は尖削状、側面は斜位の工具痕	-	PL12
Q 7	石鋪面	920	30.0	8.2	-	21.5	凝灰岩	片面は尖削状に幅26cm程、反対面は斜位に幅5cm程の工具痕、側面は斜位の工具痕	-	PL12

第2号用排水路跡 (SX13) (第70図)

位置 調査区北西部のI 2J8-I 2J9区、標高28.2mの台地上に位置している。

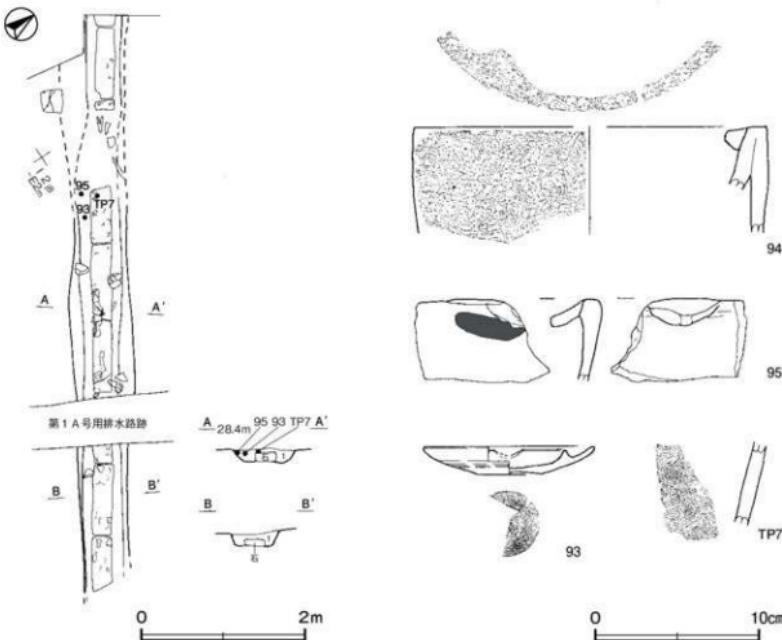
重複関係 第1A号用排水路に掘り込まれている。

規模と形状 I 2J9区から北西方向(N=58°-W)に直線状に延びている。凝灰岩の切り石10点が、天端を水平にし、小口を接して一列に設置されている状況を確認した。完存の石材は、長さ約0.90m、幅約0.24m、重量17.5~25.0kgである。北西端が調査区域外に延びており、南東端が搅乱を受けているため、長さは7.0mしか確認できなかった。掘方の規模は、上幅0.60~0.74m、下幅約0.44~0.50m、深さ14cmほどで、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 単一層である。焼土粒子を中量含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 烧土粒子中量、炭化粒子少量



第70図 第2号用排水路跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 陶器片 38 点（碗 11、灯明受皿 1、皿 1、鉢 13、土瓶 11、瓶 1）、磁器片 8 点（碗）、土師質土器片 15 点（皿 2、焙烙 1、七輪 1、火鉢 3、楕木鉢 1、鉢 6、壺 1）、瓦片 44 点（丸瓦 4、棟瓦 40）、鉄製品 1 点（釘）が出土している。また混入した土師器片 4 点（壺）、須恵器片 1 点（壺）が出土している。93・95 は覆土上層、94 は覆土中から出土している。TP 7 は石材の直上から出土している。石材はいずれも遺存状態が不良なため、サンプルとはしていない。

所見 時期は、出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから、18 世紀後半から 19 世紀代に比定できる。長さ 0.16 ~ 0.28m の石材が散見でき、本跡で確認された石材を底石とし、両側面に石材を立てていたと推測できる。形状から用排水路として機能していたと考えられる。

第 2 号用排水路跡出土遺物観察表（第 70 図）

番号	種別	器種	口径	節高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	陶器	灯明皿	[10.4]	1.7	4.0	精良 良好 透明釉	灰石・石英 にぶい滑	灰黄	内面施釉 外面露胎	覆土上層	50% 7面 PL17
94	土師質土器	七輪	[21.6]	[6.6]	-	長石・石英・輝	灰	普通	口縁部折り返し 拆け部貼付 口唇部に繩目	覆土中	10%
95	土師質土器	焙烙	-	(5.1)	-	長石・石英・赤色粒子	滑	普通	口縁部内面耳貼付 耳部無孔 外面墨痕有り	覆土上層	5% PL11

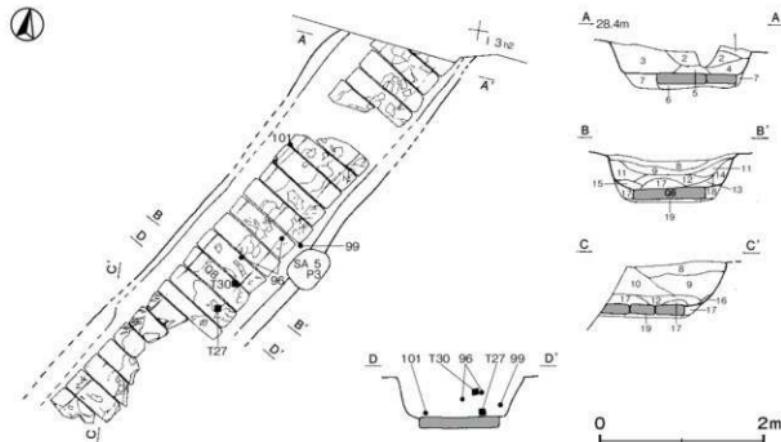
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 7	土師質土器	鉢	長石・石英	黒	体部外側擦状工具による波状文	石材直上	

②石敷き遺構

第 1 号石敷き遺構（SX10）（第 71 ~ 74 図）

位置 調査区西部の I 3 h1 ~ I 3 i1 区、標高 28.2 m の台地上に位置している。

重複関係 第 6 号ピット群 P 10・P 11 を掘り込み、第 4 号用排水路、第 6 号瓦溜まり、第 5 号柱穴列 P 3、第 9 号ピット群 P 5・P 7 に掘り込まれている。



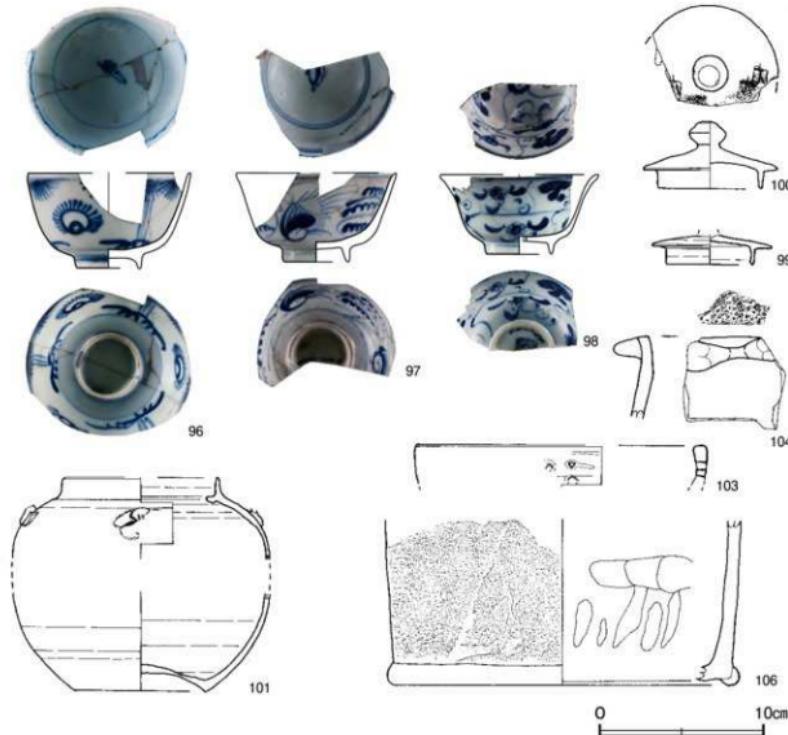
第 71 図 第 1 号石敷き遺構実測図

規模と形状 I 3 il 区から北東方向 (N - 33° - E) に延びている。23 点の凝灰岩の切り石が、天端を水平にし、長辺を接して一列に敷かれている状況を確認した。完存の石材は、長さ約 0.90m、幅約 0.20 ~ 0.30m、重量 304 ~ 41.2kg である。北東端が調査区外に延び、南西部が搅乱を受けているため、長さ 6.30m しか確認できなかった。掘方の規模は、上幅約 1.50 ~ 1.70m、下幅約 1.20 ~ 1.30m、深さは 48cm ほどで、壁は外傾して立ち上がっている。

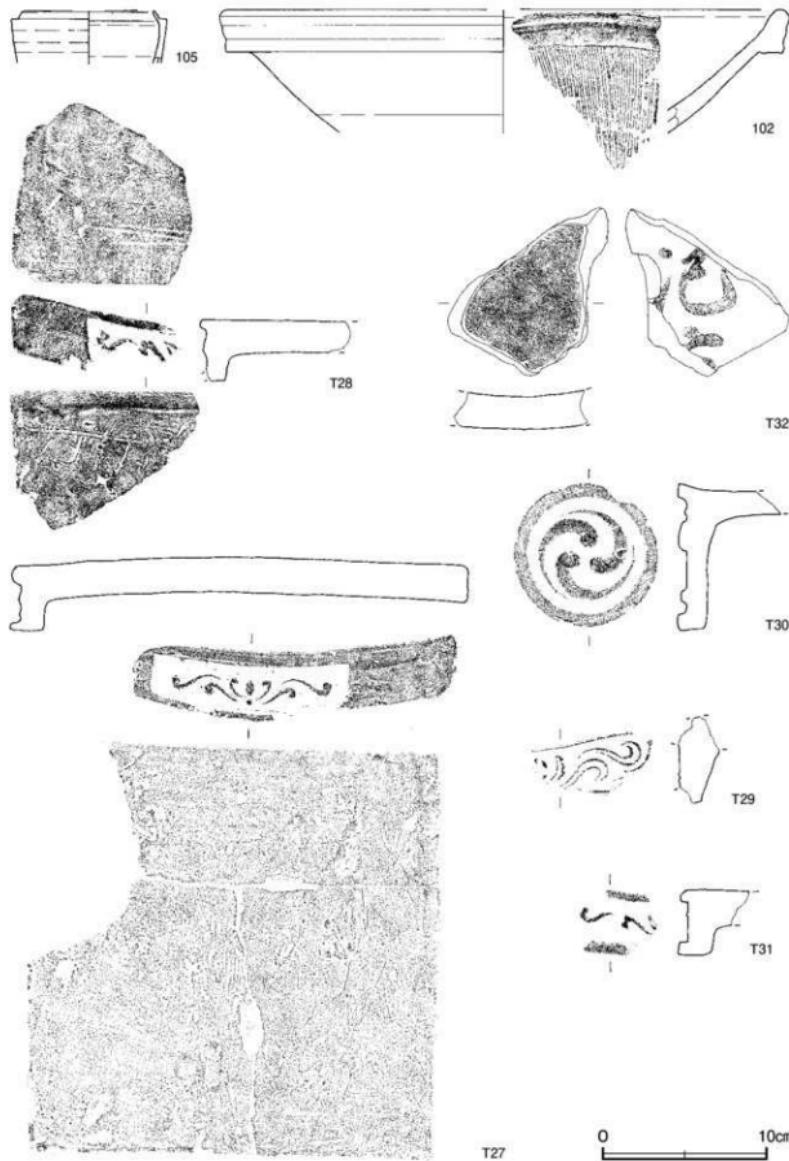
覆土 14 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第 6・7・17 ~ 19 層は掘方への埋土である。

土層解説

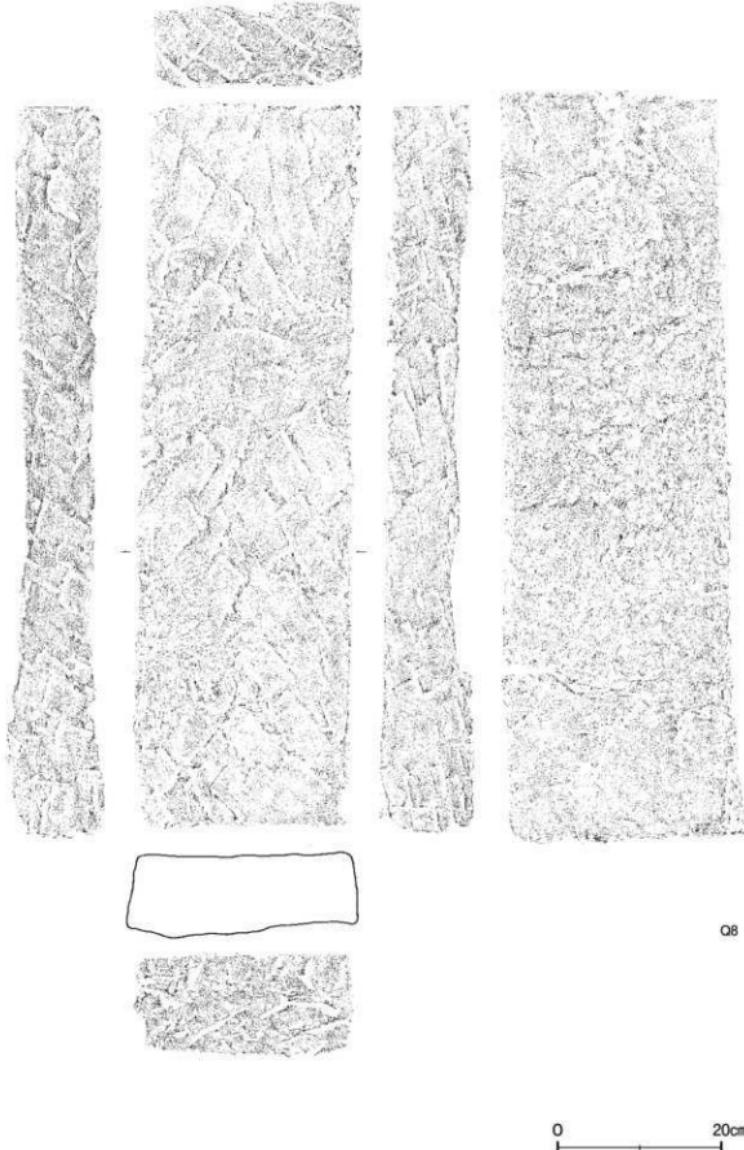
- | | | | |
|----------|--------------------|-----------|--------------------|
| 1 喰オリーブ色 | ローム粒子少量、焼土粒子・細礫微量 | 11 黄 褐 色 | 燒土粒子少量 |
| 2 にひい青褐色 | ローム粒子、焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 握 色 | 燒土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐 色 | 細礫少量、ローム粒子、焼土粒子微量 | 13 握 色 | 炭化物中量、燒土粒子少量 |
| 4 黒 褐 色 | 燒土ブロック・炭化物微量 | 14 オリーブ色 | ローム粒子多量 |
| 5 暗 褐 色 | 粘土粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量 | 15 暗 褐 色 | 燒土粒子少量 |
| 6 喰オリーブ色 | ローム粒子少量、細礫微量 | 16 握 色 | 粘土粒子多量 |
| 7 にひい青褐色 | 粘土ブロック・細礫少量 | 17 握 色 | 炭化粒子、粘土粒子少量、燒土粒子微量 |
| 8 暗 握 色 | 大円錐、焼土粒子、炭化粒子少量 | 18 オリーブ型色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 9 黒 握 色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 19 喰オリーブ色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 10 黑 褐 色 | 焼土粒子中量、炭化物微量 | | |



第 72 図 第 1 号石敷き遺構出土遺物実測図 (1)



第73図 第1号石敷き遺構出土遺物実測図(2)



第74図 第1号石敷き遺構出土遺物実測図(3)

遺物出土状況 陶器片 34 点（碗 7、皿 1、擂鉢 4、鉢 1、土瓶 17、急須 2、小形壺 1、甕 1）、磁器片 18 点（碗 17、皿 1）、土師質土器片 63 点（小皿 2、火鉢 7、鉢 23、鍋 12、壺 7、甕 12）、瓦質土器片 3 点（鉢、甕、不明）。瓦片 418 点（丸瓦 65、平瓦 3、棟瓦 347、板塀瓦 2、輪達瓦 1）、鐵製品 9 点（釘 8、不明 1）が出土している。また、混入した自然遺物 1 点（貝殻）が出土している。101 は石材の直上、99・T27 は覆土下層、96・T30 は覆土中層から出土している。97・98・100・102～106・T28・T29・T31・T32 は覆土中から出土している。遺存状態が良好で、明瞭な工具痕が認められる石材はサンプルとし、拓影図及び観察表に記載する。

所見 時期は、出土土器と次亜面が近代の直前まで使用されていることから、18世紀後半から19世紀代に比定できる。凝灰岩が用いられている他の遺構の様に、水に関わる遺構と想定もできるが、性格は不明である。

第 1 号石敷き遺構出土遺物観察表（第 72～74 図）

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	磁器	碗	[100]	59	38	緻密	明緑灰	良好	染付 体部外腹草花文	覆土中層	60% 板塀 PL17
97	磁器	碗	[98]	55	40	緻密	灰白	良好	染付 体部外腹鳥文 見込み亀文	覆土中	50% 脊崩石 PL17
98	磁器	端反碗	[96]	49	[40]	緻密	明緑灰	良好	染付 外腹草花文	覆土中	40% 板塀
99	陶器	土瓶蓋	52	(1.8)	-	精良 石美 面釉無	明緑灰	良好	外腹施釉 内腹露胎 外面貫入	覆土下層	60% 板塀 PL17
100	陶器	土瓶蓋	[62]	41	-	精良	灰白	普通	白泥の上に鉄筋による帆船文	覆土中	50% 益子 9
101	陶器	土瓶	[95]	-	[81]	精良 長石 透明釉	黄オーリーフ 灰黄	良好	外面上部に梅文と桜文 耳貼付	石材直上	20% 七面 PL17
102	陶器	擂鉢	[340]	(85)	-	長石・輝	灰赤	普通	塗り目 10 箸 一單位	覆土中	5% 常滑
103	瓦質土器	鉢	[176]	(25)	-	長石・石英	灰	普通	外腹 3 所に穿孔 孔周間をへら磨き	覆土中	5%
104	土師質土器	鍋	-	(51)	-	長石・石英 赤色粒子	橙	普通	掛け部貼付 掛け部上面純帆	覆土中	5%
105	陶器	小壺	[80]	(3.2)	-	石美 透明釉	浅黄	良好	体部外腹施釉	覆土中	20% 七面 9
106	土師質土器	火鉢	-	(10.1)	[208]	長石・石英 赤色粒子	にれい・済付	普通	底部外腹に捺垂貼付 体部外腹に綱目 体部内面に縦線のナデ	覆土中	20% PL11

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	材質	特徴			出土位置	備考
Q 8	石材	905	260	100	28.2	凝灰岩	片面は尖頭形状に幅 4 cm 程の工具痕 反対面は夷毫から 10 ~ 20 mm の位置に直角の削みが認められる 磨き石面にも同様の削み			-	

番号	種別	器種	全長	全幅	文理区				焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考							
					外腹	内径	珠径	珠数											
T27	瓦	軒平瓦	280	212	-	-	-	-	120	24	0.8	0.5	4.0	黄灰	長石・石英 赤色粒子	普通	唐草文	覆土下層	PL15
T28	瓦	軒平瓦	[112]	(120)	-	-	-	-	60	25	0.6	-	3.7	黄灰	長石・石英 赤色粒子	普通	唐草文	覆土中	PL15
T29	瓦	軒平瓦	(24)	(86)	-	-	-	-	(7.7)	(26)	-	-	5.2	にれい 青白い 赤色粒子	普通	内面清潔の唐草文	覆土中		
T30	瓦	檜込瓦	(62)	90	90	7.1	-	-	-	-	-	-	-	灰 長石・石英 赤色粒子	普通	外腹へラ磨り 巴文有	覆土中層	PL15	
T31	瓦	軒平瓦	(44)	(7.5)	-	-	-	-	50	24	0.7	0.8	4.0	黄灰 長石・石英 赤色粒子	普通	唐草文	覆土中		
T32	瓦	楓瓦	(304)	(10.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	20	灰 長石・石英 赤色粒子	良好 内面多傷き 沙粒(セロリ)有	覆土中	PL15		

③ 土坑

第 14 号土坑（第 75 図）

位置 調査区西部の I-2h9 区、標高 28.2 m の台地上平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.86m、短軸 1.75m で、長軸方向が N-30°-E の隅丸長方形である。深さは 24cm で、底面は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。

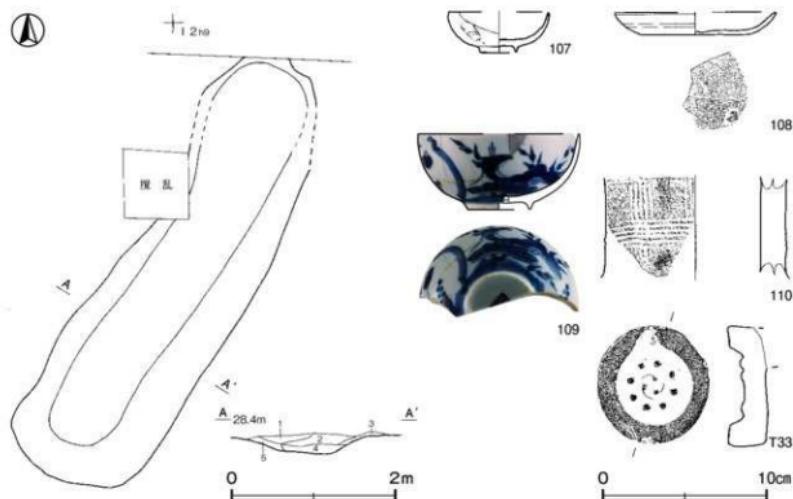
覆土 5 層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 級	色	燒土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	4 級	暗	褐	色	ローム粒子中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
2 級	色	燒土粒子・炭化粒子微量	5 級	褐	色	ローム粒子多量	
3 級	色	炭化粒子微量					

遺物出土状況 陶器片 6 点（碗、皿、擂鉢、瓶、花生、甕）、磁器片 3 点（碗 2、小杯 1）、土師質土器片 2 点（小皿）、瓦質土器片 4 点（火鉢 1、甕 3）、瓦片 42 点（丸瓦 6、棟瓦 36）が出土している。107～110・T33 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器と、当次面が近代の直前まで使用されていることから、19世紀代に比定できる。



第 75 図 第 14 号土坑・出土遺物実測図

第 14 号土坑出土遺物観察表（第 75 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴はか			出土位置	備考
									横	縦	側面		
107	磁器	小杯	[6.0]	2.5	2.2	鐵道	灰白	良好	全体外面留支			覆土中	20% 肥前系
108	土師質土器	小皿	[9.7]	1.4	[6.4]	長石・滑石・赤色粒子	にぶい暗	普通	底部剥離手切り、見込みが着干突出			覆土中	30%
109	磁器	碗	[9.8]	4.7	[3.8]	緻密	灰白	良好	染付 草花文			覆土中	40% 肥前系 PL17
110	陶器	花生	-	(6.3)	-	鐵道	褐	良好	外面施釉 外面柳状工具による格子状の沈線			覆土中	5%

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部			文理区			色調	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠徑	珠数	横幅	縱幅	厚さ						
T33	瓦	軒瓦	(3.7)	(8.1)	7.2	4.7	0.6	8	-	-	-	灰	長石・滑石・赤色粒子	普通	複合面に焼き目 三文瓦	覆土中	PL15

第 21 号土坑（第 76 図）

位置 調査区東部の I 3 h2 区、標高 28.1 m の台地上平坦部に位置している。

重複関係 第 4 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区外に延び、南東部が第 4 号溝に掘り込まれているため、短軸は 0.60m で、長軸は 1.32m しか確認できなかった。深さは 25cm で、底面は皿状であり、壁は外傾して立ち上がっている。

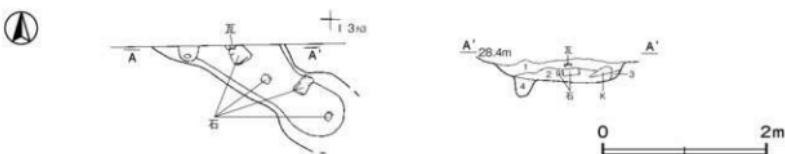
覆土 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・細礫少量	3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・細礫微量	4 暗褐色 焼土粒子少量

遺物出土状況 瓦片8点（丸瓦2、棟瓦6）、鉄製品4点（釘）が出土している。いずれも遺存状態が悪いため図示できない。

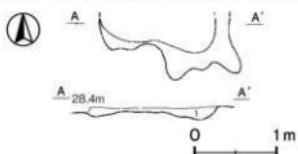
所見 時期は、同じ面で、18世紀後半から19世紀代に比定できる遺構が確認されていることから同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確ではない。



第76図 第21号土坑実測図

第165号土坑 (SX11) (第77図)

位置 調査区中央部のI 2h0区、標高28.3mの台地上平坦部に位置している。



第77図 第165号土坑実測図

規模と形状 北部が搅乱を受けているため、長軸は1.60mで、短軸は0.72mしか確認できなかったが、不定形と推定できる。本跡の範囲に、円窓を確認した。深さは10~14cmで、底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 単一層である。整地を行う際に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1 暗褐色 大円窓中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 陶器片3点（碗1、皿2）、磁器片1点（碗）、瓦片58点（丸瓦6、棟瓦52）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、同じ面から18世紀後半から19世紀代に比定できる遺構が確認されていることから、同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確ではない。

④柱穴列跡

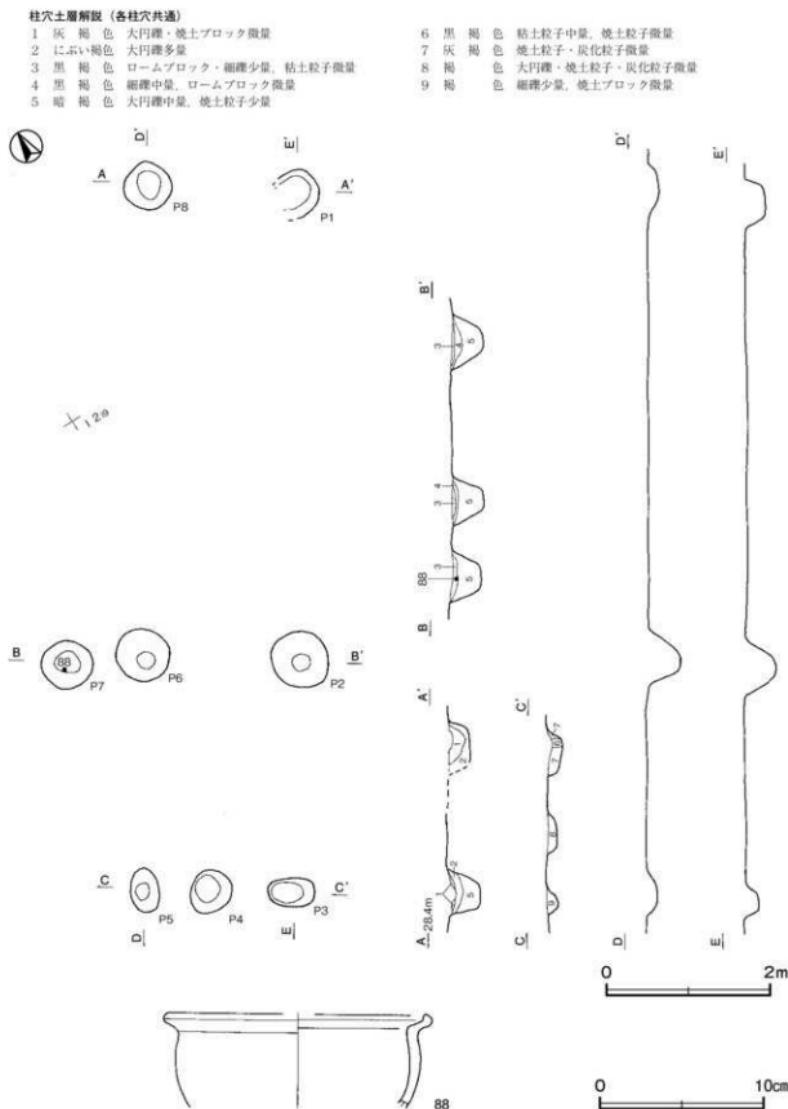
第4号柱穴列跡 (第78図)

位置 調査区西部のI 2h9~I 2j8区、標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第6号ピット群P 5~P 8を掘り込んでいる。

規模と構造 I 2j8区から北東方向(N-31°-E)に2条の柱穴列跡が並行して伸びている。確認できた長さは、北東・南西軸が8.60m、北西・南東軸が1.90mで、P 1とP 8、P 2とP 6、P 3とP 5が、それぞれ対応する。P 7は、P 1・P 2・P 6・P 8と同様に窓が確認でき、一連の柱穴の可能性があることから、本跡に含めて記載する。間尺は、1間を6尺3寸としている。柱間寸法は、P 1・P 2の間が5.7m(3間)、P 2・P 3の間が2.8m(1間半)である。P 8・P 6の間、P 6・P 5の間もほぼ同様である。平行して伸びる2条の柱穴列跡の柱間寸法は、1.9m(1間)である。P 7はP 6から北西方向に0.90m(3尺)の位置に配されている。

柱穴 平面形は円形または梢円形で、長径 34 ~ 68cm、短径 32 ~ 67cm である。深さは 6 ~ 39cm で、断面形は U 字状及び皿状である。P 1 ~ P 2・P 6 ~ P 8 では礫が確認でき、根石と考えられる。



第 78 図 第 4 号柱穴列跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 陶器片9点(碗4,鉢1,土瓶4),磁器片4点(碗),土師質土器片10点(小皿7,鍋1,鉢1,甕1),瓦質土器片1点(火鉢),瓦片52点(丸瓦12,棟瓦40),鐵製品1点(釘)が各柱穴から出土している。また混入した土師器片1点(环)が出土している。88はP7の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから、19世紀代に比定できる。性格は、P1・P2・P6～P8にそれぞれ疊が確認されることから、二の丸御殿の一部屋を構成していたものと推定される。P3・P5は疊が確認されないことから、上屋を有するものではなく、廊下など的一部と想定されるが、明確ではない。

第4号柱穴列跡出土遺物観察表(第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底形	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
88	陶器	鉢	(160)	(58)	-	精良 海鼠釉	青灰	良好	外・内面施釉	P7 (SA1P1)	20%検査 PL17

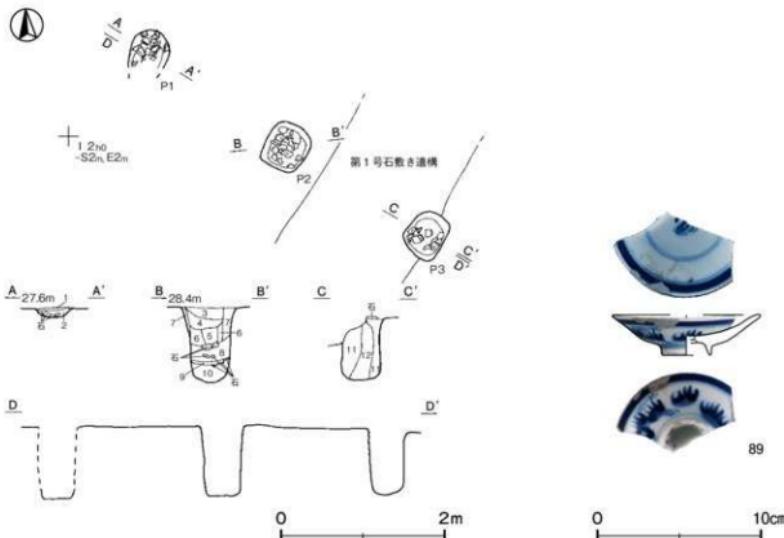
第5号柱穴列跡(第79図)

位置 調査区中央部のI2h0～I3h1区、標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号石敷き造構、第6号ピット群P11を掘り込み、第6号瓦溜まりに掘り込まれている。

規模と構造 I3h1区から北西方向(N-60°-W)に延びている。確認できた長さは、3.96mである。柱間寸法は、1.98m(6尺5寸)である。

柱穴 平面形は楕円形または隅丸方形で、長径55～59cm、短径43～47cmである。深さは14～91cmで、断面形は皿状である。各柱穴の底面で疊が確認でき、根石と考えられる。P1は第6次面、P2・3は第3次



第79図 第5号柱穴列跡・出土遺物実測図

面で確認されたが、間尺や礫が用いられていることが共通しており、同時期に構築されたと推定できる。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 黒 褐 色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	7 黒 褐 色	粘土ブロック少量
2 黒 褐 色	中角礫中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐 色	大円礫・ローム粒子少量
3 褐 褐 色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・細繊微量	9 にぶい褐色	粘土粒子中量
4 にぶい褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細繊微量	10 褐 色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
5 黒 褚 色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11 黒 褚 色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細繊微量
6 褐 褚 色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細繊微量	12 黒 褚 色	ローム粒子微量

遺物出土状況 陶器片 1 点（碗）、磁器片 3 点（碗 2、小皿 1）、瓦片 56 点（丸瓦 2、平瓦 15、棟瓦 39）が各柱穴から出土している。また混入した土師器片 3 点（坏）が各柱穴から出土している。89 は P 2 の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器と当次面が近代の直前まで使用されていることから 18 世紀後半から 19 世紀代に比定できる。性格は、根石と推定される礫が確認されることから、上屋構造を構成する柱穴の一部と推定できるが、部分的な確認のため、明確ではない。

第 5 号柱穴跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
89	磁器	小皿	[90]	25	[29]	緻密	灰白	良好	染付 外面草花文 施文	P 2 (SK12)	30%発見

⑤ピット群

第 7 号ピット群（第 80 図）

位置 I 2 j8 区から I 3 i3 区、標高 28.2 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 6 号ピット群 P 6、第 8 号ピット群 P 1 を掘り込み、第 4 号溝、第 4 号用排水路に掘り込まれている。

規模と形状 南北 9.5 m、東西 19.5 m の範囲に、14 か所のピットを確認した。

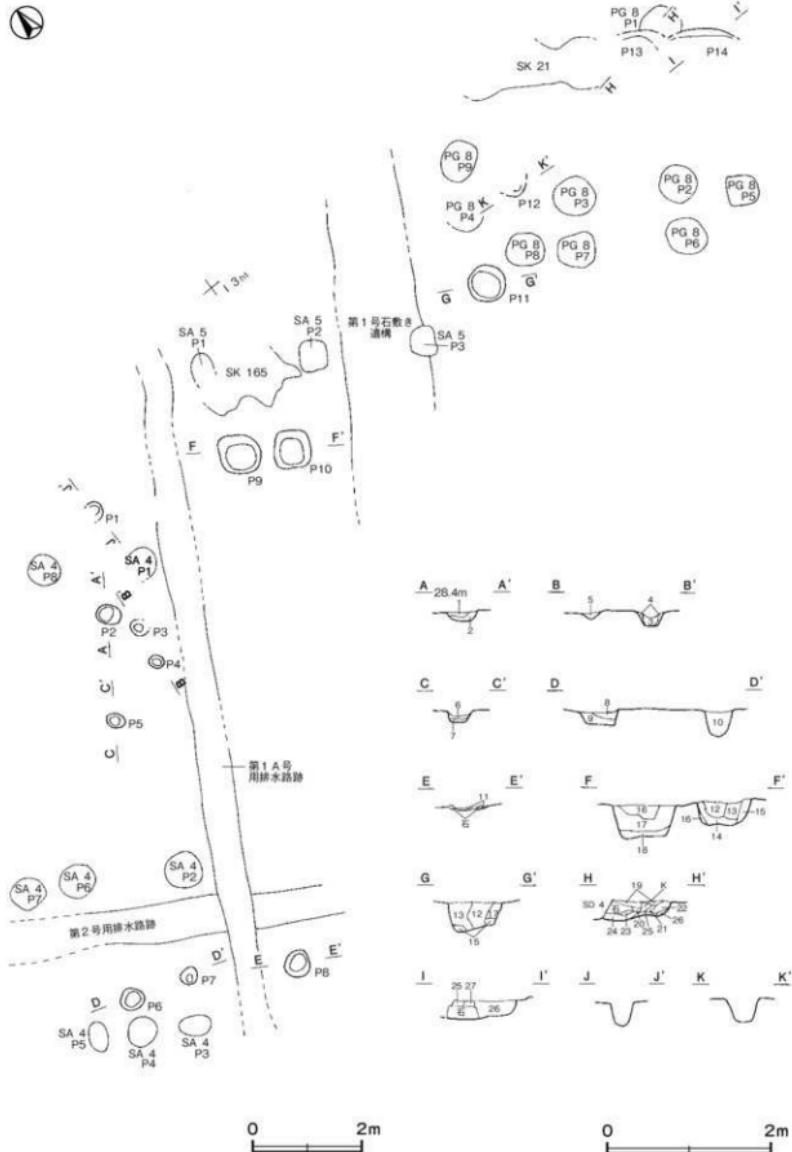
ピット 14 か所。長径 28 ~ 80 cm、短径 23 ~ 71 cm の円形・楕円形・隅丸方形で、深さは 4 ~ 42 cm である。

ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒 褐 色	焼土ブロック・大円礫・炭化粒子微量	15 黒 褐 色	炭化粒子中量、焼土粒子微量
2 褐 色	大円礫少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16 褐 色	焼土粒子・炭化粒子微量、大円礫・ローム粒子微量
3 黒 褐 色	ローム粒子少量	17 黒 褐 色	炭化粒子中量、大円礫少量、焼土粒子微量
4 褐 色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	18 褐 色	焼土粒子少量、炭化物微量
5 褐 褶 色	大円礫中量、ロームブロック少量	19 褐 色	焼土粒子・炭化粒子少量
6 褐 色	ローム粒子・炭化粒子微量	20 褐 褶 色	ローム粒子少量、大円礫微量
7 灰 褐 色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	21 灰 褶 色	焼土粒子微量
8 褐 色	大円礫少量、焼土粒子微量	22 灰 褶 色	焼土ブロック・大円礫・凝灰岩片微量
9 塗 褐 色	焼土粒子・炭化粒子微量	23 褶 色	ローム粒子多量
10 にぶい青褐色	焼土粒子微量	24 塗 褶 色	炭化粒子少量、大円礫・焼土粒子微量
11 褐 色	焼土粒子・炭化粒子中量、大円礫少量	25 褶 色	焼土ブロック少量、炭化物微量
12 塗 褐 色	焼土粒子・炭化粒子少量	26 黒 褶 色	焼土粒子・炭化粒子少量、大円礫微量
13 にぶい黄褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量	27 褶 色	ローム粒子多量、焼土粒子微量
14 塗 褐 色	焼土粒子少量、ローム粒子微量		

遺物出土状況 陶器片 6 点（碗 4、小皿 1、甕 1）、磁器片 8 点（碗 7、鉢 1）、瓦質土器片 2 点（火鉢）、瓦片 78 点（丸瓦 9、平瓦 5、棟瓦 64）、鉄製品 2 点（釘）が各ピットから出土している。いずれも薄片のため図示できない。

所見 時期は、同じ面で 18 世紀後半から 19 世紀代に比定できる構造が確認されていることから、同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確でない。



第80図 第7号ピット群実測図

第8号ピット群（第81図）

位置 調査区東部のI 3h1～I 3i2区、標高28.2mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第36号土坑を掘り込み、第4号用排水路、第7号ピット群P13・P14に掘り込まれている。

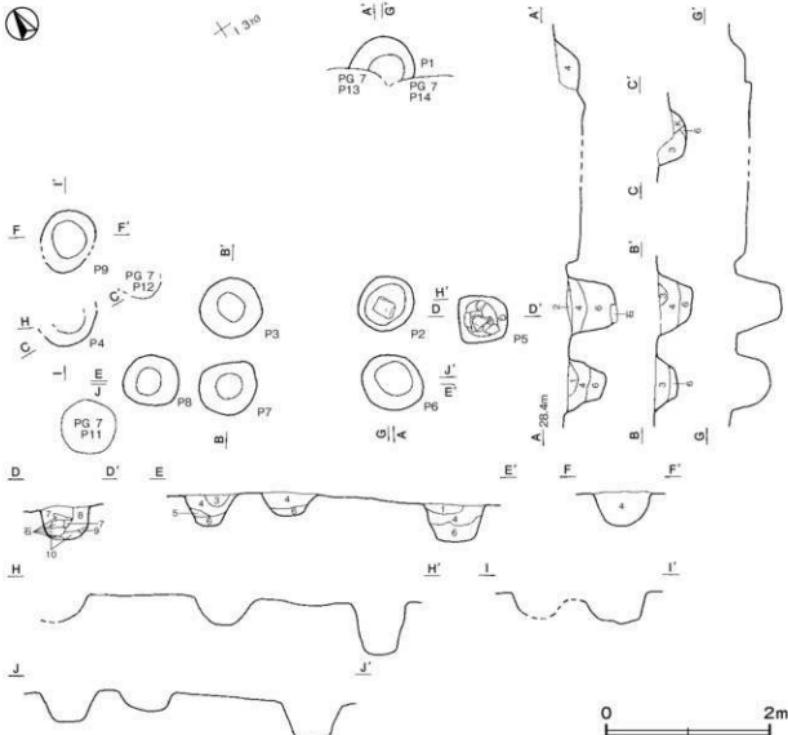
規模と形状 南北4.4m、東西5.8mの範囲に、9か所のピットを確認した。

ピット 9か所。各ピットで跡が確認されることから、第7号ピット群と区別できる。長径57～78cm、短径55～74cmの円形・楕円形・隅丸方形で、深さは26～60cmである。断面形はU字状及び皿状である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色 焼土粒子中量、大円窓少量、炭化粒子微量	7 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・細窓微量
2 明褐色 大円窓多量、ローム粒子中量	8 棕褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子・細窓微量
3 暗褐色 炭化粒子少量、大円窓微量	9 棕褐色 ローム粒子微量
4 棕褐色 大円窓少量、ローム粒子微量	10 暗褐色 ローム粒子少量、大円窓微量
5 暗褐色 中円窓多量、ローム粒子中量	
6 暗褐色 大円窓中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	

遺物出土状況 陶器片9点（碗4、鉢1、土瓶4）、磁器片4点（碗）、土師質土器片10点（小皿7、鍋1、鉢1、甕1）、瓦質土器片1点（火鉢）、瓦片34点（丸瓦7点、平瓦1、棟瓦26点）、鐵製品1点（釘）が各ピットから出土している。また混入した土師器片1点（坏）が出土している。

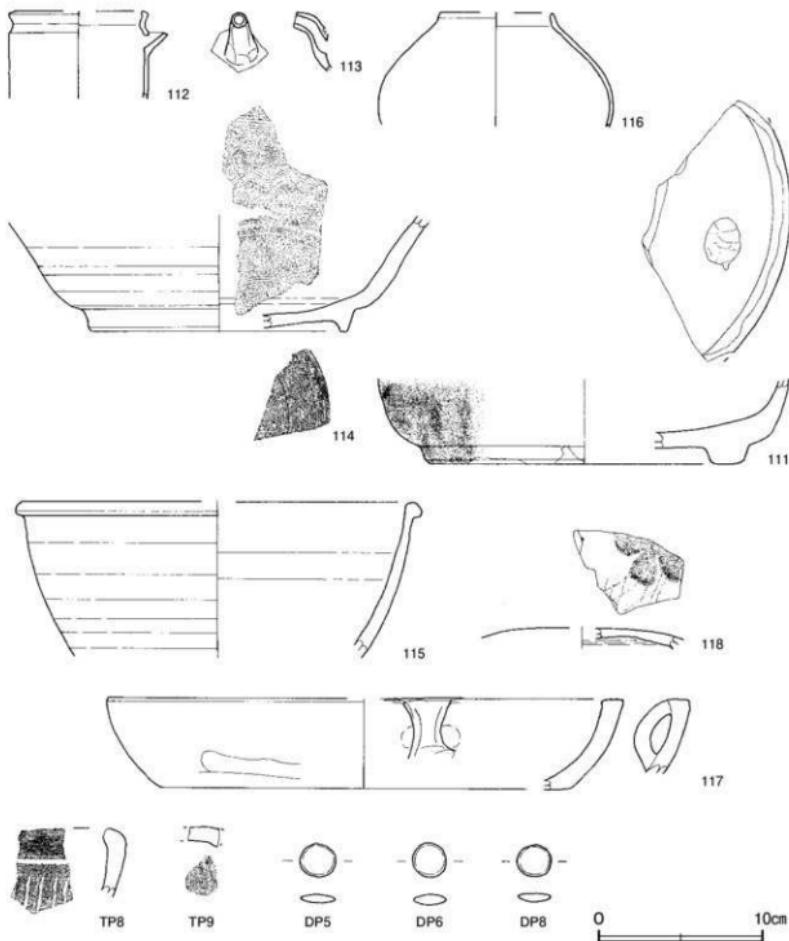


第81図 第8号ピット群実測図

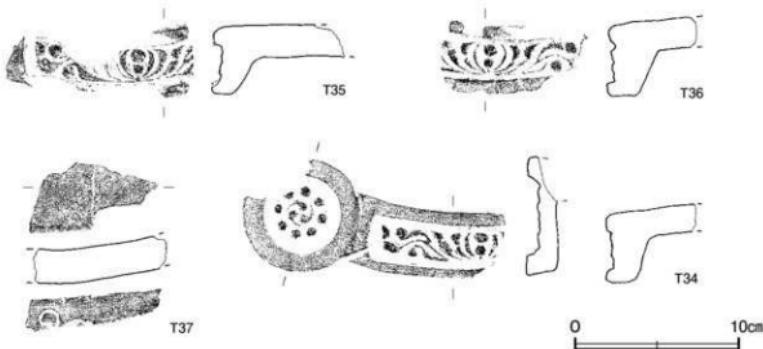
所見 時期は、同じ面で 18 世紀後半から 19 世紀代に比定できる遺構が確認されていることから、同時期と推定できるが、伴う遺物がないため明確ではない。性格は、各ピットで礫が確認されることから、柱穴と推定できるが、並びが明確ではないため、上屋構造は不明である。

⑥遺構外出土遺物（第3次面）（第 82・83 図）

当次面の遺物は、18 世紀中葉から 19 世紀代の遺物が主体となる。



第 82 図 遺構外出土遺物実測図（1）



第83図 遺構外出土遺物実測図(2)

第3次面遺構外出土遺物観察表(第82・83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施薬	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
111	陶器	甕	-	(5.2)	[19.0]	長石・石英 鋼絞繩、鉄軸	褐・灰白 済度	良好	外・内面鋼絞繩 底部外面鉄軸 内面トチン痕	1 2 b8	10% 笠岡
112	陶器	ちらり	[7.8]	(5.4)	-	長石 鉄軸	褐	良好	外・内面施釉	1 2 b9	10%
113	陶器	水注	-	(3.6)	-	精良 灰軸	灰オリーブ	良好	注口貼付 外・内面施釉	1 2 b9	5% 松岡 笠岡
114	陶器	鉢	-	(7.1)	[15.7]	長石・輝 灰軸	灰黃	普通	高石貼付 体部内面波状の柳目 見込みに柳目	1 2 b9	5% 松岡 笠岡
115	陶器	鉢	[24.0]	(9.5)	-	長石・石英 鋼絞繩	暗青灰	普通	外・内面施釉 体部外面クロコ目	1 2 b9	5% 松岡 PL18
116	陶器	鉢	(6.8)	(6.9)	-	精良 透明釉	にぶい黄褐色	良好	外面部施釉 口唇部露胎	1 2 b9	20% 松岡 PL17
117	瓦質土器	焰壺	[31.6]	5.5	[25.1]	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部下端へア剥り 貼付	1 2 b9	10% PL11
118	陶器	蓋	-	(1.3)	-	精良 長石 長石軸	灰白	良好	外・内面施釉 外面部による草花文	-	5% 唐津 PL18

番号	種別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP 8	瓦質土器	火鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	体部外面横模様に1条の沈線 縦模様に数条の沈線	1 2 b9	PL12
TP 9	土質土器	瓦張器	長石・雲母	にぶい橙	内面有目痕	1 2 b9	

番号	器種	径	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 5	御碁石	2.2	-	0.5	228	長石	表面ナデ	1 2 b8	PL13
DP 6	御碁石	2.0	-	0.6	224	長石	表面ナデ	1 2 b9	PL13
DP 8	御碁石	2.1	-	0.5	218	長石・角美石	表面ナデ	1 3 h1	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部						文様区	色調	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考		
					外径	内径	縫隙	底径	横幅	縱幅									
T34	瓦	軒伐瓦	(5.4)	(16.9)	7.0	4.8	0.6 0.7	8	(8.2)	24	67	0.5	4.8	灰	長石・石英	普通	巴文右 唐草文	1 2 b8	PL15
T35	瓦	軒伐瓦	(8.0)	(12.1)	-	-	-	-	(10.2)	(21)	-	-	4.1	暗灰	長石・石英	普通	唐草文	1 2 b8	
T36	瓦	軒伐瓦	(6.0)	(8.9)	-	-	-	-	(8.7)	(24)	0.7	0.7	4.3	にぶい 長石・石英 赤色粒子	普通	唐草文	1 2 b8		
T37	瓦	瓦	(4.3)	(8.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	2.1	にぶい 長石・石英 赤色粒子	普通	○の割印		1 3 h3	

(4) 近世遺構一覧表

表7 石組み遺構一覧表

番号	次面	位 置	主軸方向	平 面 形	規 模		底 面	概 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
					長さ × 幅 (m)	深さ (cm)					
2A	4	12b9	N - 29° - E	方形・台形	1.92 × 1.52	167	-	直立	人為	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、丸瓦、錐形瓦、その他小片	第2号右側みどり構築 - 本跡 → SK24
2B	4	12b9	N - 34° - E	長方形	1.37 × 0.97	104	-	直立	人為	陶器、磁器、土師質土器	PG3 → 多数 - 第2号右側みどり構築、SK23
1	5	12b0	N - 32° - E	長方形	2.02 × 1.17	80	平坦	直立	人為	-	-

表8 用排水路跡一覧表

番号	次面	位 置	方 向	形 状	規 模			底 面	概 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)	
					長さ (m)	上幅 (m)	F幅 (m)						
1A	3	12b0 ~ 12b9	N - 30° - E	直線状	(12.2)	0.48 ~ 0.62	0.20	⑥	U字状	外傾	人為	丸瓦、錐形瓦、土師質土器	第1号右側みどり構築 - 本跡 → 12b0 - 12b9
2	3	12b8 ~ 12b9	N - 58° - W	直線状	(7.0)	0.60 ~ 0.74	0.44 ~ 0.50	14	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器	第8号左側みどり構築

表9 土坑一覧表

番号	次面	位 置	長径 (輪) 方向	平 面 形	規 模			底 面	概 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
					長径 (輪) × 幅 (輪) (m)	幅 (輪) (m)	深さ (cm)					
22	4	12b9	-	-	1.48 × (0.50)	39	-	圓状	板斜	人為	-	-
24	4	12b9	N - 30° - E	方形	1.56 × 1.42	44	-	平坦	板斜	人為	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦、瓦質瓦	第2A・2B号右側みどり構築 - 本跡
36	4	13b2	-	(円形)	2.39 × (1.54)	182	-	凹凸	内傾・波状	人為	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦、瓦質瓦	SE2 → 本跡 → PG6 - 8
37	4	12b0	N - 55° - E	圓丸九方形	1.60 × (1.22)	24	-	平坦	外傾	人為	磁器、土師質土器	-
118	4	13h1	-	円形	0.50	45	-	平坦	外傾	人為	瓦、錢貨、砥石	-
163	4	12b8	-	(円形)	(2.06 × 1.00)	(140)	-	垂直	-	人為	-	IGML PG1-23-8-18(A) - 13-589 PG1-23-8-18(B) - PG1-23-8-18(C)
164	4	12b9	N - 34° - E	長方形	2.18 × 1.51	94	-	平坦	外傾	人為	陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦、瓦質瓦	SK566 PG1-23-8-18(A) - 13-589 PG1-23-8-18(B)
14	3	12b9	N - 30° - E	廣丸長方形	(5.86) × 1.75	24	-	圓状	板斜	人為	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦、瓦質瓦	-
21	3	13h2	-	-	(1.32) × 0.60	25	-	圓状	外傾	人為	瓦、釘	本跡 → SD4
165	3	12b0	-	不定形	1.60 × (0.72)	10 ~ 14	-	凹凸	外傾	人為	陶器、磁器、瓦	-

表10 柱穴列跡一覧表

番号	次面	位 置	方 向	長さ (m)	柱間寸法 (m)	柱 穴			主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)	
						柱穴数	平面形	長径 / 幅径 (m)			
4	3	12b0 ~ 12b8	N - 31° - E	8.60 / 1.90	5.7, 2.8 x 1.9	8	円形 横円形 不整格円形	0.34 ~ 0.68/ 0.32 ~ 0.67	6 ~ 39	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦	PG6 → 本跡
5	3	12b0 ~ 13h1	N - 60° - W	3.96	1.98	3	円形 横円形 横丸方型	0.55 ~ 0.59/ 0.43 ~ 0.47	(14) ~ 91	陶器、磁器、瓦	第1号右側みどり構築、PG6 → 本跡 / 第6号左側みどり構築

表11 ピット群一覧表

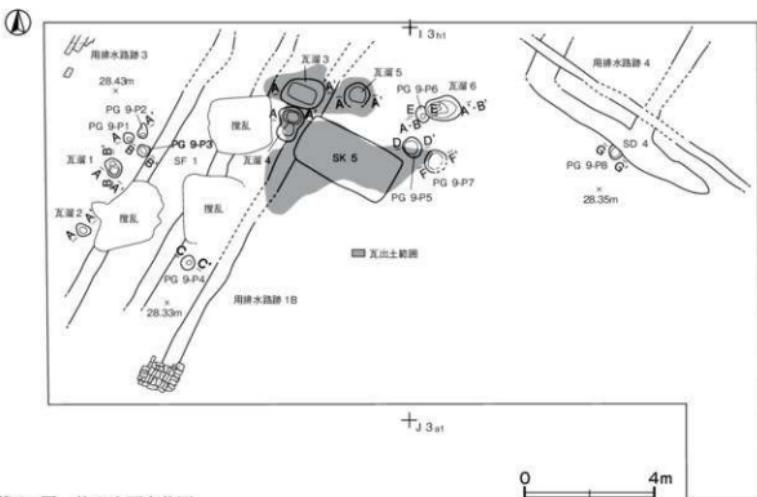
番号	次面	位 置	形 状	範 因 (m)	柱 穴			主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)	
					柱穴数	平面形	長径 / 幅径 (m)			
6	4	12b0 ~ 13h3	不定形	[10.5 × 25.5]	15	円形 横円形 不整格円形	0.39 ~ 1.22/ 0.33 ~ 0.80	4 ~ 84	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦	SK63 - BG → SD → 第1号右側みどり構築
5	5	12b0 ~ 13h2	不定形	[9.0 × 16.7]	31	円形 横円形 横丸方型	0.25 ~ 0.87/ 0.27 ~ 0.98	7 ~ 65	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦	PG6 → SK93 - 164
7	3	12b8 ~ 13h3	不定形	[9.5 × 19.5]	14	円形 横円形 横丸方型	0.28 ~ 0.80/ 0.23 ~ 0.71	4 ~ 42	陶器、磁器、瓦質土器、瓦質瓦、瓦質瓦	PG6 → SD4 第4号左側みどり構築
8	3	13h1 ~ 13h2	方形	[4.4 × 5.8]	9	円形 横円形 横丸方型	0.57 ~ 0.78/ 0.55 ~ 0.74	26 ~ 60	陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦質瓦、瓦質瓦、瓦質瓦	SK96 → 本跡 → 第4号右側みどり構築、PG7

4 近代の遺構と遺物（第2次面）

当時代の遺構は、用排水路跡3条、道路跡1条、溝跡1条、瓦溜まり6基、土坑1基、ピット群1か所を確認した。

(1) 第2次面（第84図）

当次面は、出土遺物などから、尋常師範学校の創立に伴い整地されたものと考えられる。19世紀末葉から20世紀中葉まで機能していたと推定される。



第84図 第2次面全体図

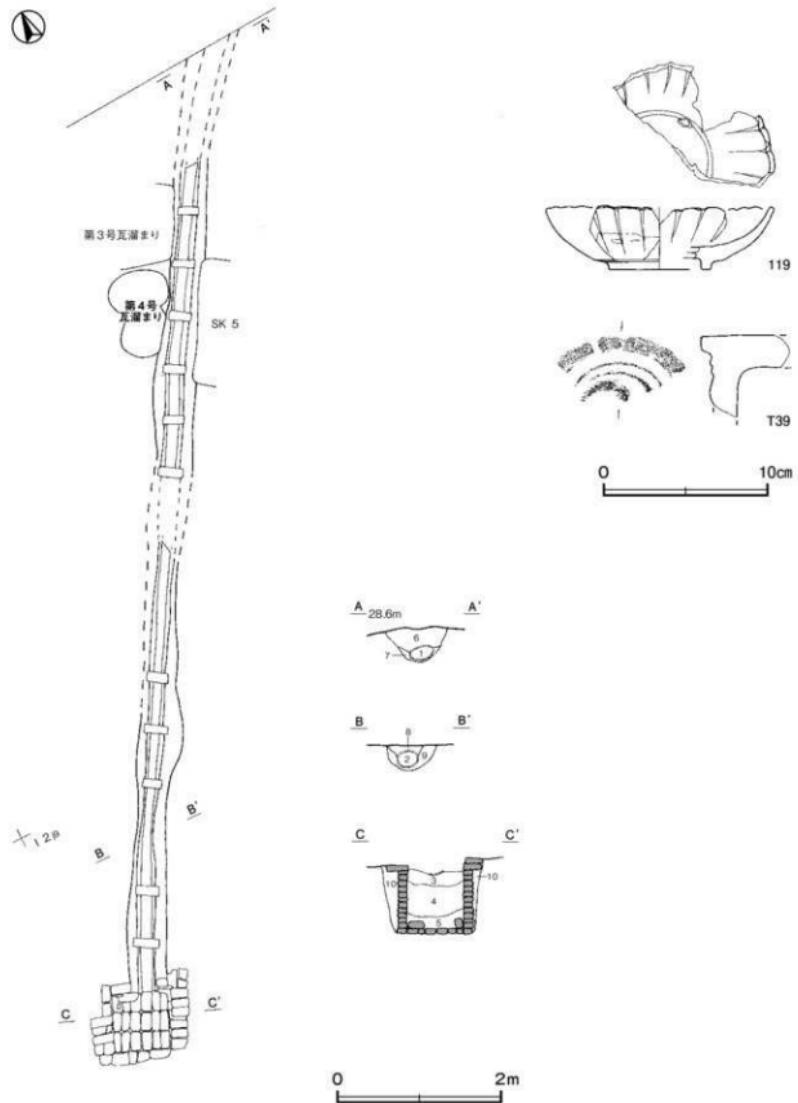
①用排水路跡

第1B号用排水路跡 (SX7新) (第85図)

位置 調査区北西部の12b0～12j8区、標高28.4mの台地上に位置している。

重複関係 第1A号用排水路跡、第163・164号土坑を掘り込み、第3・4号瓦溜まり、第5号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 12j8区から北東方向(N-30°-E)に直線状に延び、陶器製土管が埋設されている。北東端が調査区域外に伸びているため、長さは124mしか確認できなかった。掘方の規模は、上幅0.36～0.52m、下幅0.12～0.26m、深さ30cmほどで、U字状に掘り込まれている。埋設土管の大きさは、長さ約0.70m、幅約0.22m、連結部幅約0.30mである。南西端には、長軸1.16m、短軸0.98m、深さ84cmの煉瓦で方形に組まれた枠が土管と接続している。煉瓦の大きさは、長さ約20cm、幅約12cm、厚さ約6cmである。枠の内側の壁面は、厚さ約2cmにモルタル状のものが塗られていた。



第85図 第1B号用排水路跡・出土遺物実測図

覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。第6~10層は、掘方への埋土である。

土層解説

1 黒 褐 色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	7 褐 色	粘土ブロック・ローム粒子・細繊少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色	焼土粒子微量	8 褐 色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・細繊微量
3 黒 褐 色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・細繊微量	9 褐 褐 色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒 褐 色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量	10 褐 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
5 灰 褐 色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量		
6 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・細繊少量、炭化物・粘土粒子微量		

遺物出土状況 混入した陶器片6点(碗4、菊皿1、皿1)、磁器片10点(碗7、皿2、瓶1)、土師質土器片7点(小皿1、鉢4、甕2)、瓦質土器片2点(鉢、甕)、瓦片495点(丸瓦113、棟瓦375、有刻印〔幸〕棟瓦4、雁振瓦3)が出土している。119・T39は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物と当次面が近代の整地層であることから19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。第3次面で確認された、第1A号用排水路跡の直上に、同じ軸方向で構築されており、水戸城二の丸御殿の軸方向を踏襲していることが推定できる。樹に接続しており、排水路として機能していたことが想定される。

第1B号用排水路跡出土遺物観察表(第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施薬	色調	焼成	手 法 の 特 徴 は か			出土位置	備考
									内面打出し菊花文	トナン跡赤茶	甕白部分付		
119	陶器	菊皿	[136]	38	[63]	精良 長石 灰釉	淡黄褐 オリーブ	普通	口部輪花 内面打出し菊花文 トナン跡赤茶			覆土中	30% PL18 面白・茶壺

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部		文様区		色調	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考		
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	仰取(上)	俯取(下)	高さ			
T39	瓦	棟込瓦	(5.4)	(8.0)	[10.0]	[8.2]	-	-	-	-	-	-	-	灰 黒色粒子	普通 巴文右	覆土中

第3号用排水路跡(SX12)(第86図)

位置 調査区北西部のI 2h8区、標高282mの台地上に位置している。

規模と形状 北東部が調査区外に延び、南西部が擾乱を受けているため、北東方向(N-36°E)に長さ1.46mしか確認できなかった。幅は0.56mで、凝灰岩を底部に敷き、両側に花崗岩を立てている。

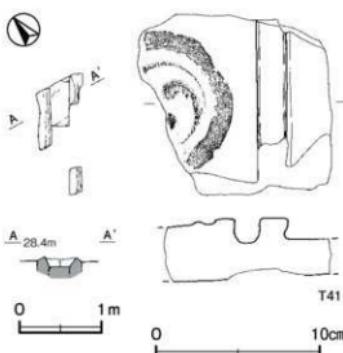
覆土 単一層である。炭化粒子を中量含むことから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色	炭化粒子中量、焼土粒子微量
---------	---------------

遺物出土状況 混入した瓦片64点(丸瓦14、棟瓦50)が出土している。T41は覆土中から出土している。

所見 時期は、当次面が近代の整地層であることから、19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。



第86図 第3号用排水路跡・出土遺物実測図

第3号用排水路跡出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部		文理区				色調	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅							
T41	瓦	不明	(11.0)	(11.9)	(9.0)	(6.4)	-	-	-	-	-	暗灰	黄石・石英	普通	巴文左	覆土中	

第4号用排水路跡（SX 9）（第87図）

位置 調査区東部のI 3 h1 ~ I 3 i3 区、標高 28.4 m の台地上に位置している。

重複関係 第4号溝跡、第7号ピット群P 12・第8号ピット群P 9を掘り込んでいる。

規模と形状 I 3 i3 区から北西方向（N - 57° - W）に直線状に延び、陶器製土管が埋設されている。両端が調査区域外に延びているため、長さは 8.30 m しか確認できなかった。掘方の規模は、上幅 0.22 ~ 0.32 m、下幅 0.06 ~ 0.12 m、深さ 48 cm ほどで、U字状に掘り込まれている。埋設土管の大きさは、長さ約 0.6 m、幅約 0.12 m、接合部幅約 0.18 m である。

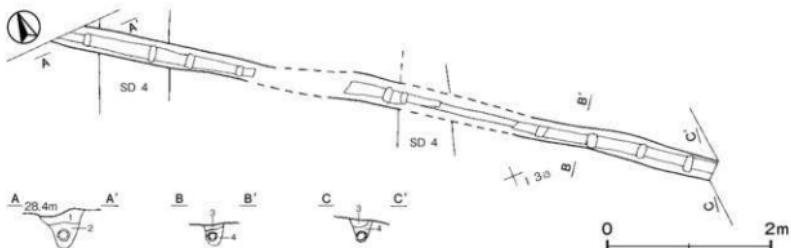
埋土 4層に分層できる。第1~4層は、掘方への埋土である。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------------|-------|----------------------|
| 1 オリーブ黒色 | 燒土粒子・炭化粒子少量、細繊微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・繊維少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗オリーブ色 | 炭化粒子・繊維少量、燒土粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・繊維微量 |

遺物出土状況 混入した瓦片 54 点（丸瓦 1、棟瓦 53）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、当次面が近代の整地層であることから、19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。第4号用排水路跡と同種の土管が確認でき、排水路と推定できるが、樹などは確認されず、明確ではない。



第87図 第4号用排水路跡実測図

②道路跡

第1号道路跡（第88図）

位置 調査区西部のI 2 h0 ~ I 2 j8 区、標高 28.5 m の平坦な台地上に位置している。

規模と形状 I 2 j8 区から北東方向（N - 30° - E）に直線状に延び、北東・南西端が調査区外へ延びているため、長さ 12.0 m しか確認できなかった。路面の規模は、幅約 1.30 m、厚さ 10 ~ 16 cm で、路面の断面形は台形である。路面の両脇に、花崗岩が敷かれた 2 条の溝が平行しており、位置や形状から側溝と考えられる。側溝の規模は、上幅 0.40 ~ 0.52 m、下幅 0.24 ~ 0.36 m、深さ 14 ~ 26 cm で、断面形は U 字状及び箱状である。

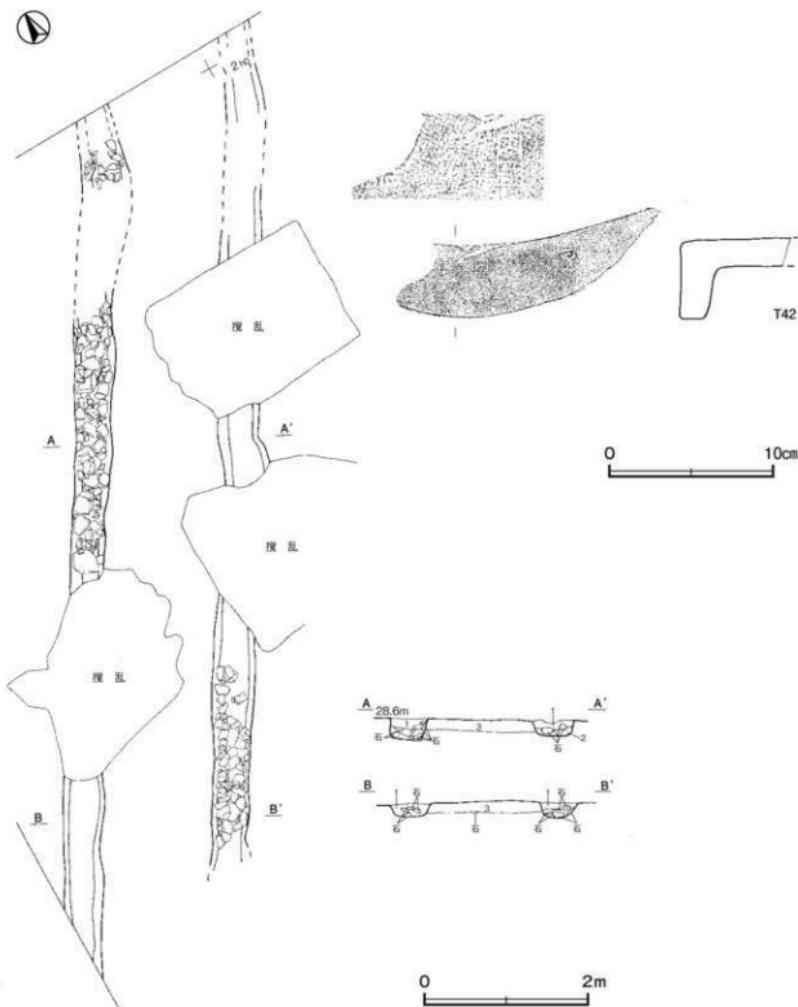
覆土 2層に分層できる。円碟を少量含むことから、埋め戻されている。第3層は路面の構築土である。

土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子中量、大円碟少量
2 暗褐色 大円碟・ローム粒子少量

- 3 にぶい褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量

遺物出土状況 混入した陶器片3点（碗2、土瓶蓋1）、磁器片8点（碗4、鉢3、小鉢1）、瓦片128点（丸瓦2、棟瓦126）が出土している。T42は路面の構築土中から出土している。



第88図 第1号道路跡・出土遺物実測図

所見 構築時期は、出土遺物から20世紀前葉に比定できる。側溝に花崗岩を敷き、粘土を用いて路面を構築していることから、尋常師範学校内の主要な道路の一つであったことが想定できる。

第1号道路跡出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部			文様区			色調	粘土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縱幅						
T42	瓦	軒瓦H.C.	(6.8)	(17.6)	-	-	-	-	-	-	4.6	灰 長石・石英・ 黒色粒子	普通 費合焼	手打	横塗土中	PL15

③溝跡

第4号溝跡 (SX8) (第89図)

位置 調査区東部のI 3h2～I 3i3区、標高28.6mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第21号土坑、第7号ピット群P13・第9号ピット群P8を掘り込み、第4号用排水路に掘り込まれている。

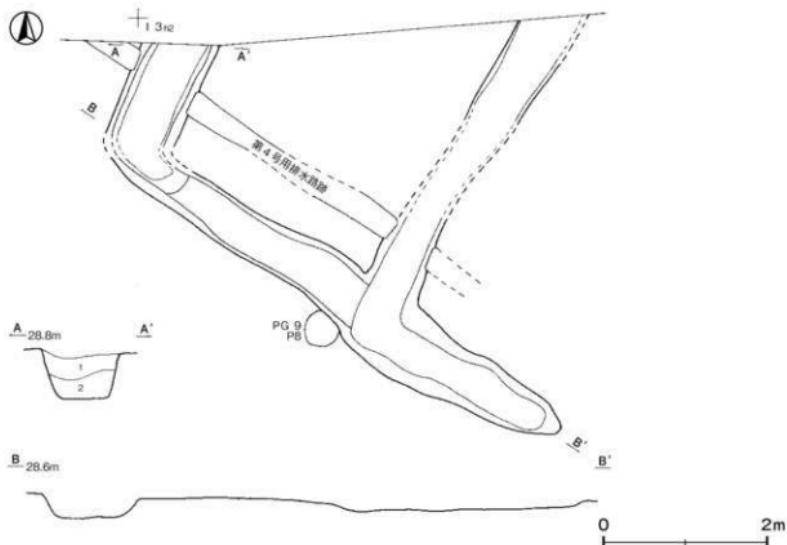
規模と形状 I 3h2区から北東方向(N - 31° - E)に平行して延びる2条の溝が、同区内で南東方向に直角に曲がり、連結している。北東部が調査区外に延びており、北西・南東軸は6.68mで、北東・南西軸は4.80mしか確認できなかった。規模は、上幅0.64～0.92m、下幅0.36～0.54m、深さは52cmほどで、断面形は逆台形状である。平行している。北西側の溝の内部は10cmほど高まっており、北東側の溝は、北西側の溝より約10cm低い位置に構築されている。連結した溝は、南東方向に延び、途中で消滅している。

覆土 2層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示すことから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・円礫少量

2 暗褐色 花崗岩片中量



第89図 第4号溝跡実測図

遺物出土状況 瓦片 19 点（棟瓦）が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、当次面が近代の整地層であることから、19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。北東から南西にかけて、徐々に勾配が下がっていることから、排水施設が想定されるが、詳細は不明である。

④瓦溜まり（第 90・91 図）

当次面で、瓦溜まり 6 基を確認した。いずれも断面図と土層解説及び一覧表で、平面図と瓦の分布する範囲は、当次面の遺構全体図で掲載する。第 2・6 号瓦溜まりは遺物出土状況図を、特徴的な遺物については、遺物実測図と観察表を掲載する。

第 1 号瓦溜まり 土層解説

- 1 白 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 2 号瓦溜まり 土層解説

- 1 黒 暗褐色 炭化粒子微量

第 3 号瓦溜まり 土層解説

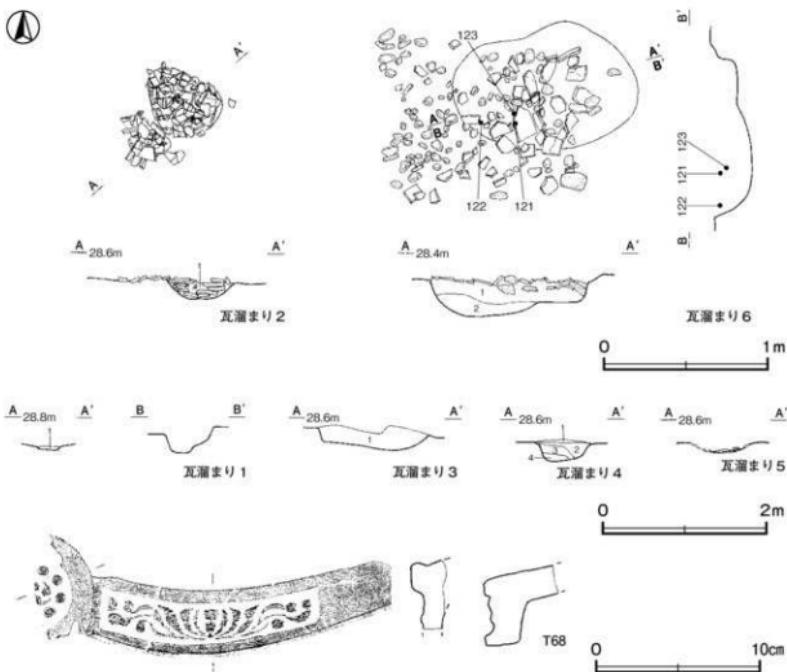
- 1 白 色 焼土粒子・炭化粒子・漆喰少量

第 4 号瓦溜まり 土層解説

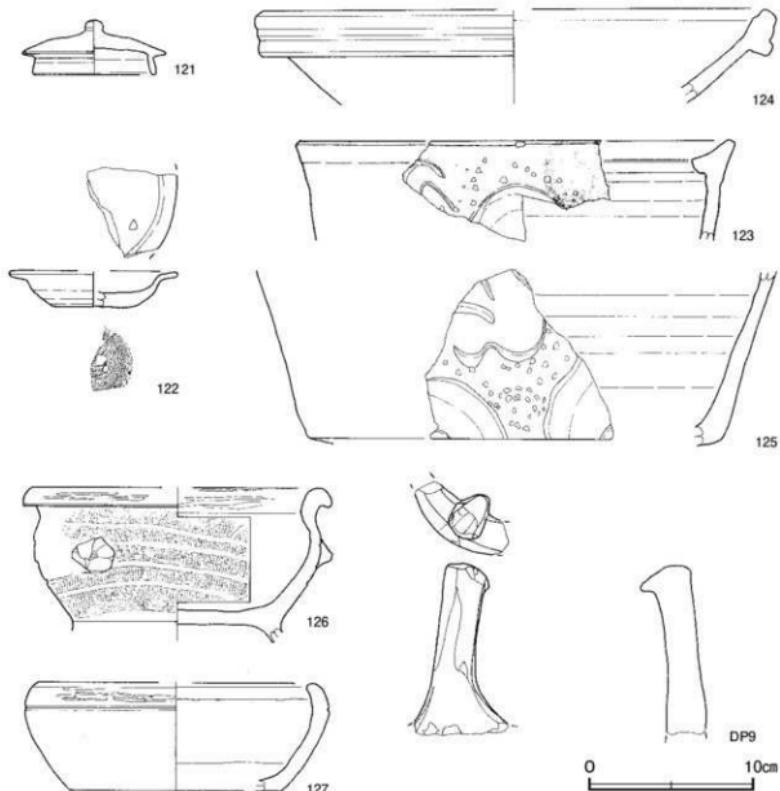
- 1 白 色 焼土ブロック少量。ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量。粘土ブロック・ローム粒子微量
3 黒 暗褐色 炭化粒子少量。粘土ブロック・焼土粒子・細繊維量
4 にぶい褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 5 号瓦溜まり 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量
2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量



第 90 図 第 1 ~ 6 号瓦溜まり・第 5 号瓦溜まり出土遺物実測図



第91図 第6号瓦溜まり出土遺物実測図

第5号瓦溜まり出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縱幅	高輪山	知輪下							
T68	瓦	軒札瓦	(7.5)	(23.0)	(7.4)	(4.6)	0.7	(4)	13.4	24	0.8	0.7	4.1	灰	長石・石英 黒色粒子	普通	巴文右 唐草文	覆土上層	

第6号瓦溜まり出土遺物観察表（第90・91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
121	陶器	土瓶蓋	73	33	-	長石・石英・黒色粒子 子母裏 逆張脚	青灰 褐	普通	外面施釉 伴 L1cmのつまみ	覆土上層	60% 七面瓦 PL11
122	陶器	急須蓋	[10.4]	22	[4.6]	石英	灰釉	普通	外面施釉 底部回転糸切り	覆土上層	30 % 亂瓦 5 % 亂瓦
123	陶器	水鉢	[26.0]	[6.2]	-	赤色粒子 灰釉	灰白 緑	良好	内・表面灰釉、外面部分的に施絞釉 外面文様 ハラ描き、流水文 外側文支	覆土上層	5 % 亂瓦 5 % 亂瓦
124	陶器	抹鉢	[31.2]	[5.7]	-	長石・石英・輝	にじ 青釉	普通	抹り目9条一単位カ	覆土中	10 % 亂瓦
125	陶器	水鉢	-	(10.7)	-	黒色粒子 灰釉	浅黄	良好	外面文様ハラ描き、流水文 外側斜文	覆土中	乱 瓦

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・埴輪	色調	焼成	手法	特徴	出土位置	備考
126	土師質土器	火鉢	[177]	94	—	長石・石英・黄母 赤色粒子・到状泥物	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ハラ削き 体部外側面位の櫛目光燒 模様に幅4mmの沈窓を4条、外縁つまみ貼付	雅土中	30%	
127	土師質土器	火鉢	[168]	66	[128]	長石・石英・黄母 赤色粒子・到状泥物	明赤褐	普通	口縁部の間を5cmへラ削き 口縁部と沈窓の間をへラ削き	雅土中	30%	
番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴				出土位置	備考
DP 9	五輪	(105)	19 ~ 31	—	(109.5)	長石・石英・鐵 黒變	外縁へラ削り 脚部を芯にして粘土貼付で土台形成 上部2/3				雅土中	PL13

表12 瓦溜まり一覧表

番号	次面	位置	長軸(軸)方向	平面形	規格		底面	側面	覆土	主な出土遺物	備考
					長径(軸) 幅(軸)(m)	深さ(cm)					
1	2	12a8	N - 26° - W	橢円形	0.60 × 0.47	34	皿状	外傾	人為	陶器、磁器、瓦	—
2	2	12a8	N - 38° - W	不定形	0.48 × 0.38	11	皿状	傾斜	人為	磁器、ネジ、瓦	—
3	2	12b0	N - 69° - W	不定形	1.21 × 0.96	20	平坦	外傾	人為	陶器、瓦	第1A・1B号用 排水路跡→本跡
4	2	12b0	N - 24° - E	瓢箪形	1.06 × 0.80	20	平坦	外傾	人為	瓦	第1A・1B号用 排水路跡→本跡
5	2	12b0	—	[円形]	0.28 × (0.66)	15	皿状	傾斜	人為	陶器、磁器、ガラス製品	第1A・1B号用 排水路跡→本跡
6	2	13h1	N - 85° - W	橢円形	1.12 × 0.70	19	皿状	傾斜	人為	陶器、磁器、土師質土器、瓦	第1号石板、SA5、 PG9→本跡

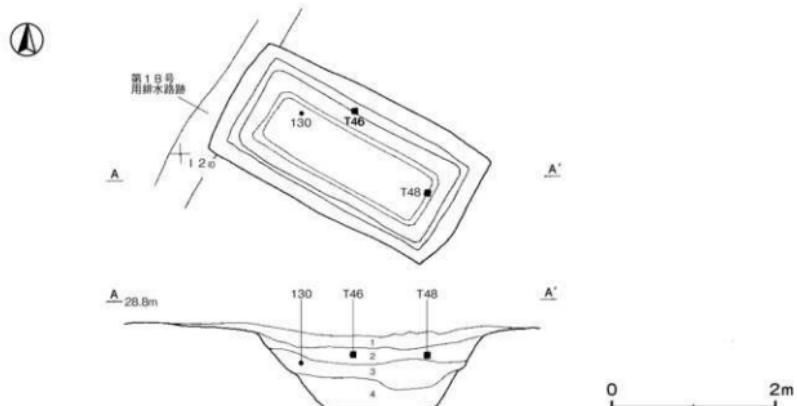
⑤土坑

第5号土坑（第92～94図）

位置 調査区中央部の12b0区。標高28.4mの台地上平坦部に位置している。

重複関係 第1A・1B号用排水路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 コンクリートで壁と底面が構築されている。長軸3.20m、短軸1.62mで、長軸方向がN - 61° - Wの長方形である。深さは88cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がる。



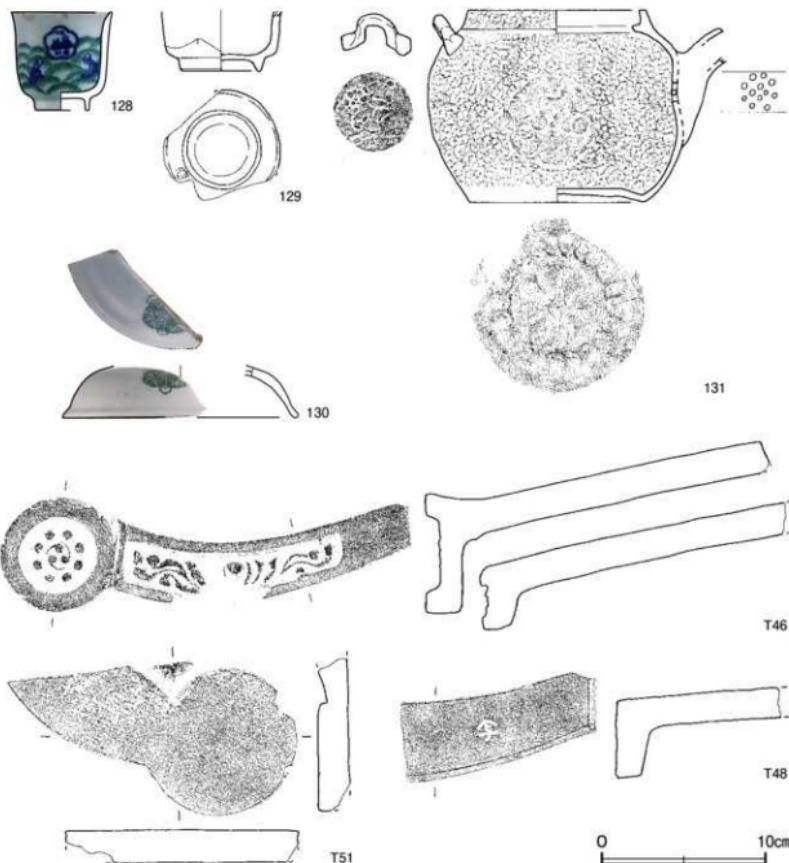
第92図 第5号土坑実測図

覆土 4層に分層できる。多様な含有物を含み、ブロック状の堆積状況を示すことから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 にぬき褐色 焼土粒子・瓦片多量、炭化物中量 | 3 灰褐色 炭化物少量、ローム粒子・コンクリート片微量 |
| 2 黒褐色 瓦片多量、焼土粒子少量、炭化物・石灰岩微量 | 4 にぬき褐色 砂粒・細礫多量 |

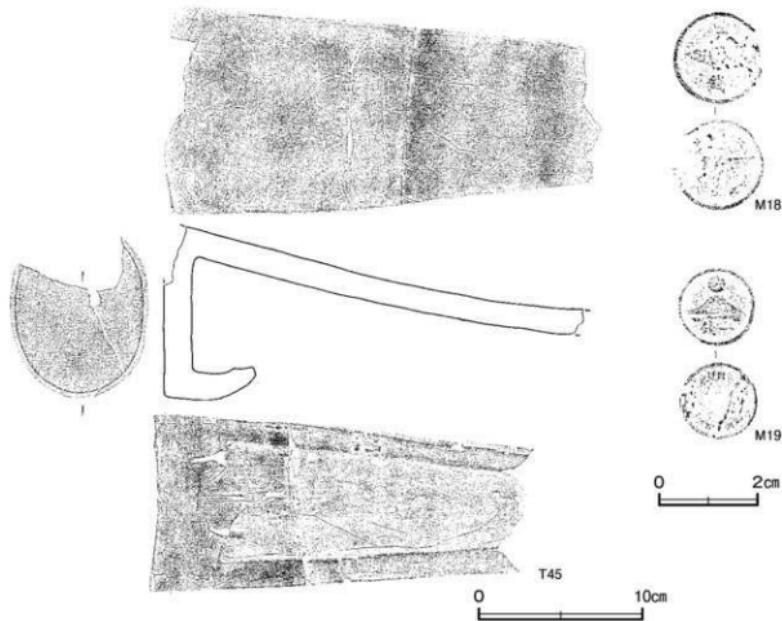
遺物出土状況 陶器片 25点（碗6、土瓶1、急須3、箱形容器2、鉢形容器1、インク瓶1、壺3、土管1、不明7）、磁器片 62点（小杯1、碗45、井蓋1、蓋2、急須3、土瓶2、箸置き1、箱形容器1、鉢4、不明2）、土師質土器片 13点（鉢9、壺4）、瓦質土器片 1点（鉢形容器）、錢貨 2点（一錢、五錢）、鐵製品 9点（薬莢1、釘2、鎧1、不明5）、石器・石製品 4点（削器1、硯3）、瓦片 5609点（丸瓦60、平瓦81、残瓦5336、有刻印瓦89〔又川9、全80〕、道具瓦2、その他41）、ガラス製品 31点（蓋3、小瓶3、インク瓶1、スポット3、不明21）、プラスチック製品 4点（三角定規1、薬箱1、鉢2）が出土している。130・



第93図 第5号土坑出土遺物実測図(1)

T46・T48は覆土中層から出土している。128・129・131・M18・M19・T45・T51は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から、20世紀初頭～中葉に比定できる。形状から、本来は貯水槽として機能していたと考えられる。本来の機能が停止した後、廃棄土坑として用いられたと推定できる。



第94図 第5号土坑出土遺物実測図（2）

第5号土坑出土遺物観察表（第93・94図）

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	船土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
128	磁器	小杯	6.2	6.0	3.2	緻密	灰白	良好	墨丸形 体部外側茶碗模様 「列公道圓」 「よい茶は井幸 宝話六六方盡」 路	覆土中	100% PL18
129	陶器	瓶	—	(3.7)	4.8	緻密 透明釉	灰オリーブ	良好	外・内面施釉 体部下端「唐」印、墨葉ヶ	覆土中	30% 墨葉ヶ PL11
130	磁器	井蓋	[14.3]	[3.2]	—	緻密	灰白	良好	外面唇に「井」路	覆土中層	20% PL18
131	陶器	土瓶	10.8	11.7	10.8	緻密 鉄輪	灰赤	良好	側面松文、側面鶴文、底部同心円に指彫痕 外面略き状を呈する 鉄輪根部	覆土中	90% PL11

番号	銘種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初期年	特徴	出土位置	備考
M 18	五銭	185	—	0.12	(0.87)	アルミニウム	1940	大日本 昭和二〇」「五銭」銘 片面に菊花文、背面に鳥文	覆土中	PL13
M 19	一銭	160	—	0.11	0.65	アルミニウム	1941	大日本 昭和十六」「一銭」銘 片面に富士と菊花文	覆土中	PL13

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区			色調	船土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
					外径	内径	珠径	径幅	横幅	縦幅	高さ							
T45	瓦	鳥食	(25.7)	8.3	—	—	—	—	—	—	(10.6)	黒 鐵石・石英・ 鈍鉛石等	普通	瓦当面取り	覆土中			
T46	瓦	軒瓦瓦	21.1	25.9	7.0	4.7	0.7	8	13.5	2.4	0.5	0.7	10.5	黒 鐵石・石英・ 鈍鉛石等	普通	巴文右 唐草文	覆土中層	PL15

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文理区				色調	胎土	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
					外径	内径	珠径	珠数	横幅	縦幅	仰面(上)	俯面(下)						
T48	瓦	軒桃瓦	(10.1)	(11.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	4.7	にじみ 青銅	長石・石英 普通	瓦当面「△」 刷印	覆土中層	PL15
TS1	瓦	鬼瓦	(10.0)	(18.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	暗灰	長石・石英 白色粒子	普通	-	覆土中	PL15

⑥ピット群

当次面で、ピット群1か所を確認した。各ピットの断面図を掲載し、詳細については文章で解説する。平面図は当次面の遺構全体図で掲載する。

第9号ピット群（第95図）

位置 I 2 h8 区から I 3 h2 区。標高 28.4 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号石敷き遺構を掘り込み、第4号溝、第6号瓦溜まりに掘り込まれている。

規模と形状 南北 3.4 m、東西 10.3 m の範囲に、8か所のピットを確認した。

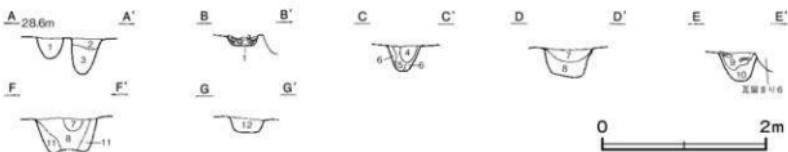
ピット 8か所。長径 32 ~ 71 cm、短径 30 ~ 54 cm の円形・梢円形・不定形で、深さは 7 ~ 43 cm である。

ピット土層解説（各ピット共通）

1	暗	褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	7	暗	褐色	中円錐・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	黒	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・津浦・細纖維量	8	褐	褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3	黒	褐色	炭化物・ローム粒子・細纖維量	9	暗	褐色	ローム粒子微量
4	暗	褐色	ロームブロック少量	10	暗	褐色	ローム粒子少量
5	黒	褐色	ローム粒子少量	11	暗	褐色	炭化粒子中量、大円錐少量、焼土粒子微量
6	闇	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	12	暗	褐色	焼土粒子・細纖維量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 混入した陶器片6点（碗4、土瓶1、壺1）、磁器片2点（碗）、瓦質土器片1点（壺）、鉄製品2点（釘）、瓦片118点（丸瓦1、棟瓦117）が各ピットから出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物と当次面が近代の整地層であることから19世紀末葉から20世紀中葉に比定できる。



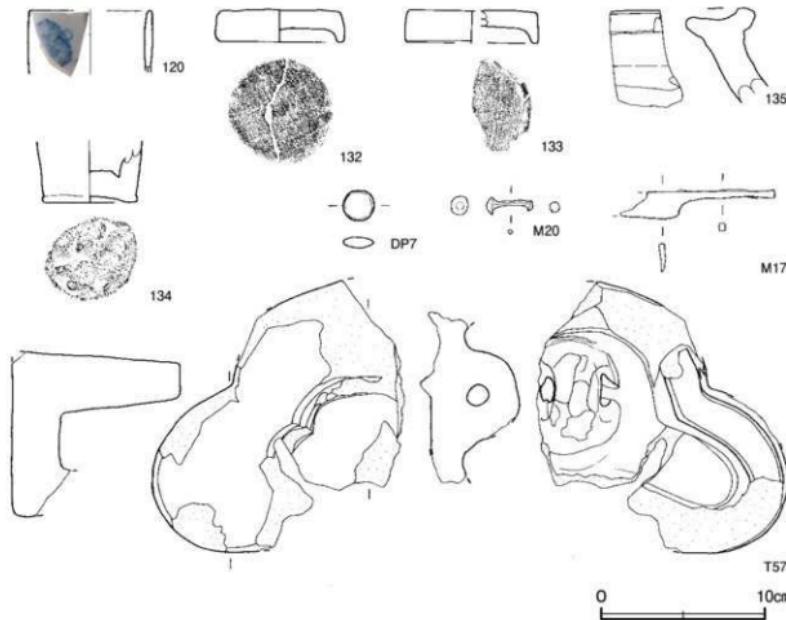
第95図 第9号ピット群実測図

⑦遺構外出土遺物（第2次面）（第96図）

ここで取り上げている遺物は、19世紀代の遺物が主体となる。近世の遺物が多く出土していることからも、当次面が近世と近代の過渡期であることが窺える。

第2次面遺構外出土遺物観察表（第96図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
120	磁器	碗	(7.4)	(3.9)	-	釉薬	灰白	良好	外面葵に「仰」鉢	I 2.8	10% PL18
132	土質土器	塊塗器	73	20	-	長石・石英・苦桙・赤色粒子・黑色粒子	褐	普通	内面布目模	I 2.8	90%
133	土質土器	塊塗器	(8.0)	20	-	長石・石英・苦桙・赤色粒子・黑色粒子	褐	普通	内面布目模	I 2.8	40%
134	土質土器	塊塗器	-	(3.8)	5.8	長石・石英・苦桙・赤色粒子	にじみ 青銅	普通	板作り成形	I 2.8	40%
135	陶器	便	-	(5.8)	-	長石・石英・鐵精	明赤褐色	良好	外・内面施釉	I 2.8	5% 普通



第96図 遺構外出土遺物実測図

番号	器種	径	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考							
DP 7	彈薬石	19	-	0.6	186	長石	表面ナフ	I 2 番	PL13							
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考							
M 17	剃刀	(9.5)	1.8	0.4	(13.3)	鉄	柄断面方形 刃断面逆三角形	-	PL13							
M 20	鉢	28	12	0.3	26	銅	断面方形	I 2 番	PL13							
番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部	文様区	色調	胎土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考				
T57	瓦	鬼瓦	10.4	(15.3)	-	-	-	-	-	(16.6)	浅黄	長石・石英	普通	画面有孔判定部 貼付、軽くめらか	I 2 番	PL15

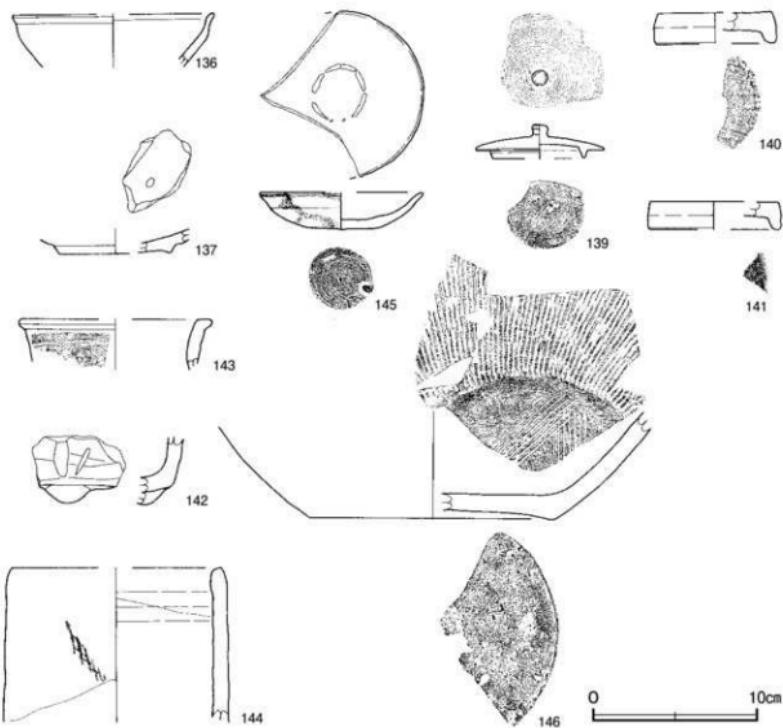
(2) 近代遺構一覧表

表13 用排水路跡一覧表

番号	表面	旋 軸	方 向	形 状	規 模				新 面	壁 面	胎 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
					長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
IB 2	I 2 b0 ~ I 2 b8	N - 30° - E	直線状	(12.4)	0.36 ~ 0.32	0.12 ~ 0.26	30	U字状、外幅	人為	-	-	-	II 1号竪井 900-944 壁-412-15481.5.2
(例)	I 2 b9	N - 30° - E	方形	1.16 × 0.98 (長軸 × 短軸)	-	-	84	箱状	直立	人為	-	-	-
3	I 2 b8	N - 36° - E	直線状	(1.46)	0.56	-	-	箱状	直立	人為	-	-	底部は漆喰岩、表面 は花崗岩を使用
4	I 3 b1 ~ I 3 b3	N - 57° - W	直線状	(8.30)	0.22 ~ 0.32	0.06 ~ 0.12	48	U字状、外幅	人為	-	-	-	S04. PG 7 - 8 → 本跡

5 遺構外出土遺物（第1次面）（第97・98図）

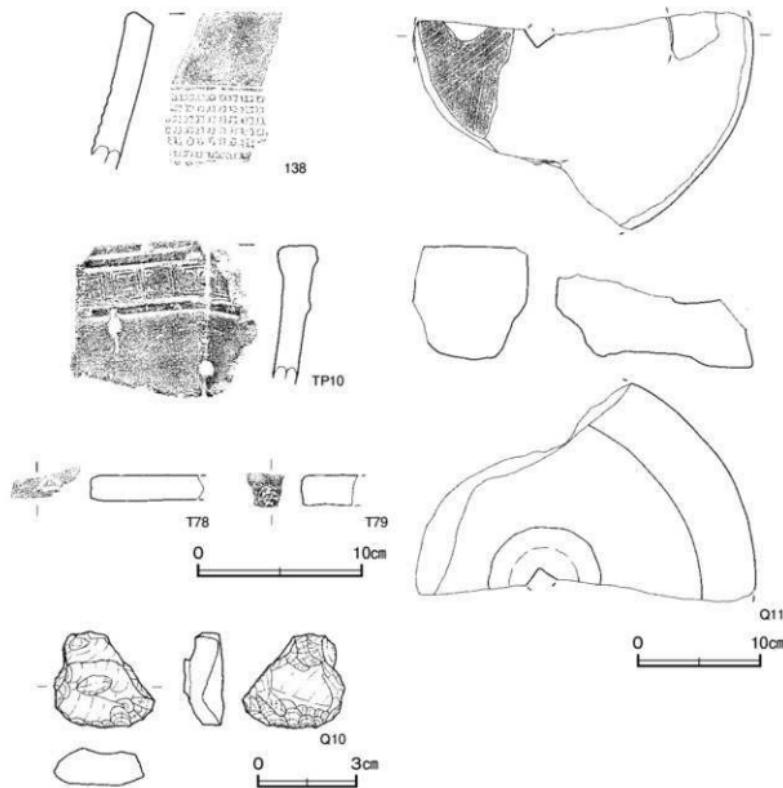
第1次面で確認された遺物を、図版と観察表で記載する。



第97図 遺構外出土遺物実測図(1)

第1次面出土遺物観察表（第97・98図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施釉	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
136	陶器	天目茶碗	[12.3]	(33)	-	精良 鉄軸	暗赤褐色	良好 外・内面施釉		表土	10% 美濃 PL18
137	陶器	皿	-	(1.5)	[6.8]	精良 長石軸	灰白	良好 外・内面施釉	貴人 志野	表土	10% 美濃
138	陶器	鉢皿	-	(9.6)	-	長石・細繩 鉄軸	明赤褐色	普通	外・内面施釉 脊部の沈線を入れた後、横位の外縁を重ねて鉢口を削成	表土	5%
139	陶器	土瓶蓋	[5.6]	21	-	長石 鉄軸	にぶい赤褐色	良好	外・内面施釉 外面同心円の沈線 内面「全胚知」	表土	20% 在地力
140	土瓶蓋土器	地壇蓋	[7.2]	1.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面布目肌	表土	40%
141	土瓶蓋土器	地壇蓋	[7.8]	1.7	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面布目肌	表土	10%
142	土瓶蓋土器	蓋	-	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外周角へラ削り 脊部貼付後、接合部削突	表土	5%
143	瓦質土器	香炉	[11.6]	(3.1)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面スタンプによる雷文	表土	10%
144	陶器	花盆	[12.8]	(9.4)	-	精良 長石軸	灰白	良好	外・内面施釉 鉄軸による格子目	表土	20% 美濃 PL18
145	陶器	皿	[9.8]	2.3	4.0	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	良好	外周輪廻式取り 内面重ね焼きによる同心円状の剥離	表土	60% 七面 PL18
146	陶器	器身	-	(6.6)	[15.0]	長石・裡	明赤褐色	普通	見込み8条・単位の割り目	12b8	20% 帯々



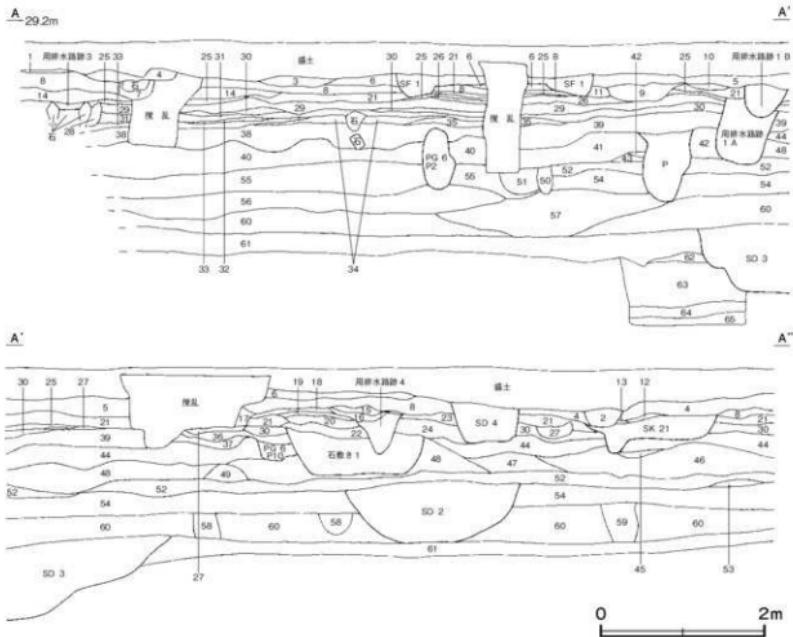
第98図 遺構外出土遺物実測図（2）

番号	種別	器種	貼土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
TP10	瓦質土器	大鉢	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	黒褐	外面2条の隆帯貼付 隆帯間スタンプによる雷文	表土	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	削器	29	31	1.2	121	瑪瑙	両面調整 細かい連続する凹凸調整を施す	表土	PL12

番号	器種	上径	下径	芯棒孔径	高さ	重量 (kg)	材質	特徴	出土位置	備考
Q11	鉢(下田)	19.4	[332]	1.9	9.8	(3.81)	安山岩	主溝2条・副溝17条	表土	PL12

番号	種別	器種	全長	全幅	瓦当部				文様区				色調	貼土	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
					外洋	内洋	珠洋	珠数	横幅	縱幅	複数山	細軸印						
T78	瓦	桃瓦	(6.9)	(4.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	16	灰	長石・石英	普通	▲ 刻印	表土
T79	瓦	桃瓦	(4.3)	(3.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	19	灰	長石・石英・黒色粒子	普通	◎ 刻印	表土



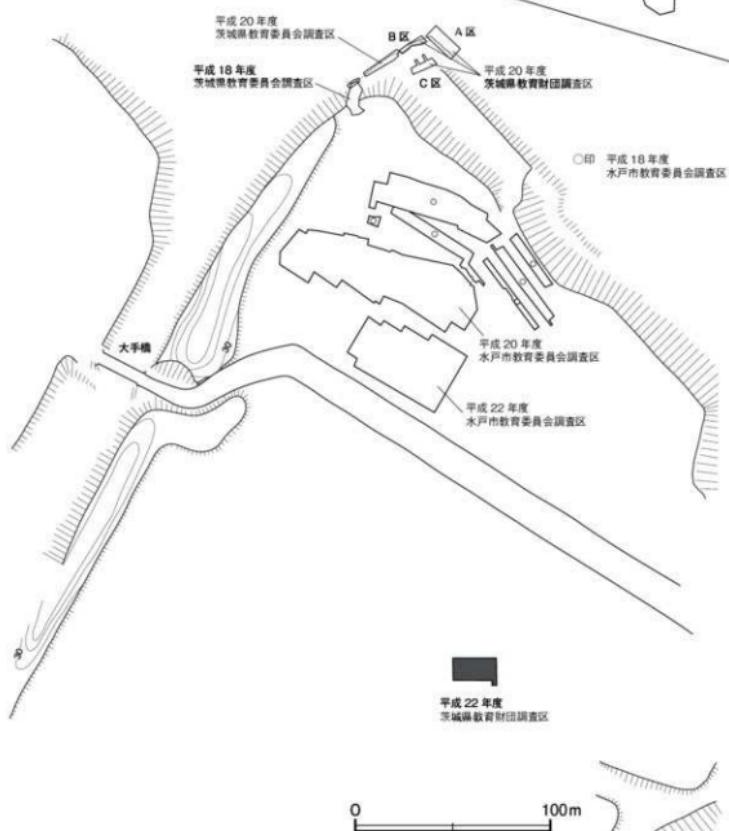
第99図 調査区北壁土層断面図

土層解説

1	褐	色	細繊多量、津波少量	34	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
2	オリーブ	黒色	瓦片・焼土片微量	35	褐色	色	ロームブロック、炭化粒子少量
3	暗	褐色	炭化粒子中量、燒土粒子・細繊少量	36	赤	褐色	燒土粒子・細繊少量
4	暗	褐色	瓦片中量	37	暗	褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、大円錐微量
5	暗	褐色	細繊少量、炭化粒子微量	38	暗	褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量、中円錐微量
6	橙	褐色	粘土ブロック中量	39	褐	色	細繊少量、ロームブロック・燒土ブロック、炭化粒子微量
7	褐	色	砂粒・細繊少量	40	にふ	褐色	ローム粒子多量、中円錐中量、燒土粒子少量
8	褐	褐色	ローム粒子・細繊少量、燒土粒子・炭化粒子微量	41	褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量、細繊微量
9	褐	褐色	燒土粒子・炭化粒子中量	42	褐	色	燒土粒子・炭化粒子中量
10	灰	褐色	小碎石多量	43	褐	褐色	燒土粒子中量、粘土粒子少量、炭化物微量
11	暗	褐色	大円錐少量	44	明	褐色	ロームブロック・粘土ブロック・細繊少量
12	オリーブ	黑色	燒土粒子微量	45	黑	褐色	炭化粒子少量
13	暗	褐色	燒土粒子多量	46	にふ	褐色	粘土粒子多量、細繊中量
14	暗	褐色	燒土粒子・炭化粒子・細繊少量	47	暗	褐色	細繊中量、粘土ブロック微量
15	黒	褐色	瓦片中量、炭化粒子少量	48	褐	色	ロームブロック・大円錐少量、粘土ブロック微量
16	褐	褐色	粘土ブロック・中円錐・燒土粒子・炭化粒子微量	49	褐	色	細繊中量、粘土粒子少量
17	暗	褐色	中円錐・燒土粒子少量	50	暗	褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細繊微量
18	褐	褐色	燒土粒子・炭化粒子・白色粒子微量	51	オリーブ	褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子・細繊微量
19	にふ	青褐色	コンクリート片少量、中円錐微量	52	暗	褐色	中円錐・炭化粒子少量
20	褐	褐色	燒土粒子・砂粒・細繊少量、炭化粒子微量	53	黒	褐色	中円錐少量
21	暗	褐色	燒土粒子・炭化粒子・細繊少量	54	黒	褐色	赤色粒子微量
22	灰	黄褐色	炭化粒子中量、燒土粒子・細繊少量	55	褐	褐色	ローム粒子・長化粒子・細繊少量、燒土粒子微量
23	にふ	青褐色	燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量	56	暗	褐色	ローム粒子少量
24	オリーブ	褐色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化物・細繊微量	57	暗	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
25	黒	褐色	炭化粒子中量、燒土粒子・細繊少量	58	褐	褐色	細繊少量、ローム粒子微量(59層より繋まりが強い)
26	褐	褐色	燒土粒子・炭化粒子中量、細繊少量	59	暗	褐色	細繊少量、ローム粒子微量
27	褐	褐色	細繊中量	60	黒	褐色	ローム粒子微量
28	灰	褐色	炭化粒子少量、細繊微量	61	黒	褐色	ローム粒子微量
29	灰	褐色	ローム粒子多量	62	黒	褐色	黒色バニミス少量
30	褐	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量	63	黒	褐色	赤色粒子微量
31	褐	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量	64	褐	褐色	ローム粒子微量(60層より粘性が強い)
32	明	褐色	粘土粒子多量	65	暗	褐色	ローム粒子中量
33	褐	褐色	ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量				

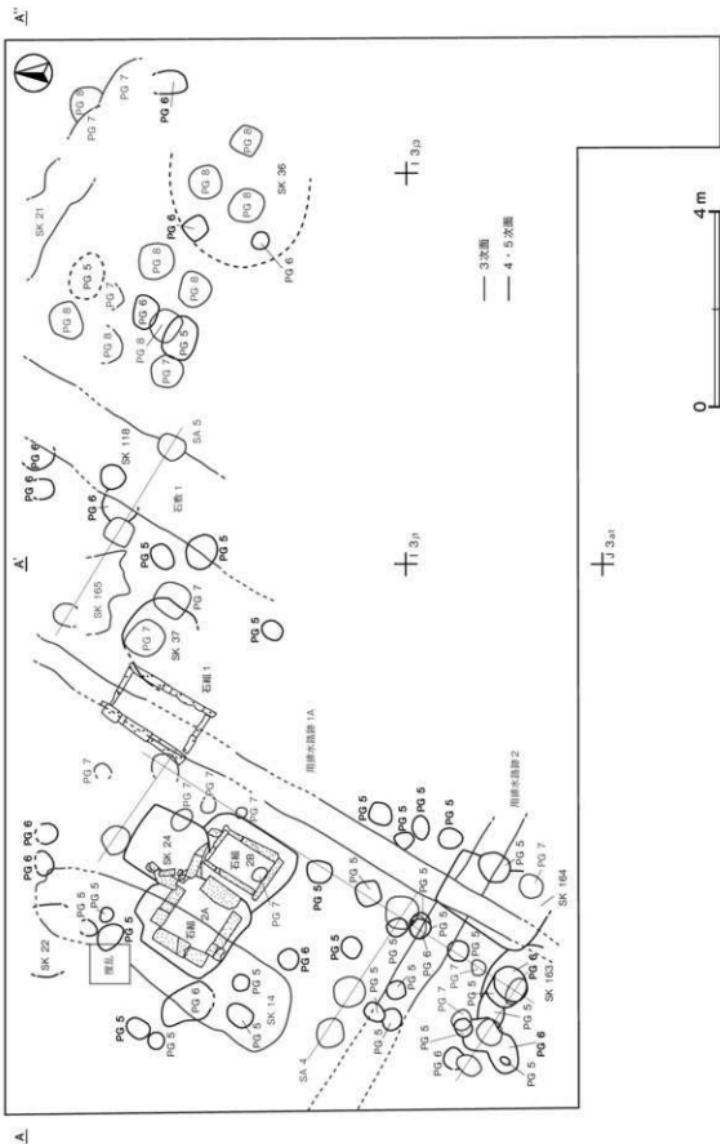


- 平成 18・20 年度 茨城県教育委員会調査地点
- 平成 20 年度 茨城県教育財団調査地点
- 平成 18・20・22 年度 水戸市教育委員会調査地点
- ▲ 平成 22 年度 茨城県教育財団調査地点



第 100 図 水戸城跡調査区位置図

(水戸城全体図は「常陸國水戸城絵図」(国立公文書館蔵)を参考に作成。平成 22 年度水戸市教育委員会調査区位置図は水戸市教育委員会提供)



第101図 水戸城跡近世（第3～5次面）遺構全体図

第4節 まとめ

1 はじめに

当調査区一帯は、鎌倉時代から明治時代にかけて、居館・城郭、そして教育施設へと、改修を繰り返しながら、連続と土地利用されてきた。今回の調査で、基礎地業面・整地面を含めて大きく9次面を確認した。自然堆積層の上面である第9次面以降、現在の地表面に至るまで、すべてが改修による人為的な盛土であり、大規模な改修の様子が窺える。特に今回の調査は、徳川氏入城以後の、水戸城二の丸御殿跡を調査した初めての事例であり、これまで詳細が明らかではなかった御殿の一端を確認することができた。以下、各次面ごとに確認された遺構と遺物を概観し、改修の記録との照合から各次面の時期を捉え、その中で近世の特徴的な遺構について考察し、まとめとする。

2 各次面の様相

表14に各次面の出土土器及び瓦の数量を記載する。数は破片数であるが、出土遺物の変化と数量の推移を捉える資料としたい。また、第102図は各次面の出土土器を掲載したものであり、編年を示すものではない。

(1) 第9次面

9世紀中葉に比定できる第1号住居跡、第3号溝跡と、中世に比定できる第1号火葬土坑が確認できた。平安時代と中世の遺構が同じ面で確認できたことから、当次面は自然堆積層の上面である。第1号火葬土坑の時期は、形状から15世紀後半以降と推定できる³¹が、出土している遺物が少量なため、詳細な時期は明確ではない。当次面の遺構及び遺構外で確認できた遺物は、土師器と須恵器が大半を占め、中世に比定できる陶器などの出土がわずかである（表14参照）。

(2) 第8次面

当次面は、第9次面上に構築されており、改修の最初期と考えられる。確認できた遺構は、第2号柱穴列跡（N-38°-E）や第2号ピット群などで、当次面が生活面として機能していたか否かを判断することは困難である。出土遺物は、土師器と須恵器が主体であるが、常滑産陶器片や土師質の小皿がわずかながら確認できた。時期を比定できる遺物が少量であり、時期を明確にすることは難しいが、第1号火葬土坑が埋め戻されて当次面が構築されていること、土師質小皿の時期が15世紀後葉から16世紀前葉のものと形状が近似していることから、当次面は15世紀後葉から16世紀前葉に構築されたと推定できる³²。

(3) 第7次面

第1号井戸跡や第2号溝跡などが確認できたことから、当次面は生活面として機能していたと推定できる。第1号井戸跡からは、土師質の内耳鍋や陶器片などが出土している。内耳鍋は深さのある形状で、11は底部が丸底と推定でき、15世紀後葉から16世紀代のものと考えられる³³。共伴する瀬戸・美濃系陶器は、藤澤良祐編年の大窯3期（1560～1590）の前半に比定できる反り皿に形状が近似している³⁴。しかし残存しているのが、口縁の一部分だけなので明確ではない。また、瓦の出土は当次面からである。いずれも細片のため、棟瓦か平瓦かの選別は困難であるが、平瓦として記載する。これらの遺物から、当次面の時期は、概ね15世紀後葉から16世紀代と推定される。

(4) 第6次面

第2号井戸跡、第3号柱穴列跡などが確認でき、当次面が生活面として機能していたことが窺える。第3

号柱穴列跡は、南西・北東軸（N - 33° - E）に並んでいる。第2号井戸跡からは、水堀通宝、土師質の小皿などが出土している。各1点ずつのため、時期を特定することは困難であるが、第4号ピット群及び遺構外から、16世紀前葉から17世紀代に比定できる土師質小皿などが出土しており、同時期と考えられる。第7次面が15世紀後葉から16世紀代であることを考慮すると、当次面は、16世紀代以降に比定することができる。

(5) 第5次面

当次面は纏襷・中円襷を主体として構築されている。土層からは、均一に整地された様子が確認できないことから、第4次面に伴う基礎地盤面と推定される。確認できた遺構は、第1号石組み遺構、第5号ピット群である。第1号石組み遺構は、長軸方向がN - 32° - Eで、第4次面で確認できた第2A・2B号石組み遺構と近似している。出土遺物は少量であり、遺物から時期を判断することはできない。第5号ピット群及び遺構外から出土した遺物の中で、37は

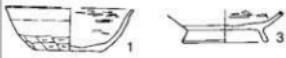
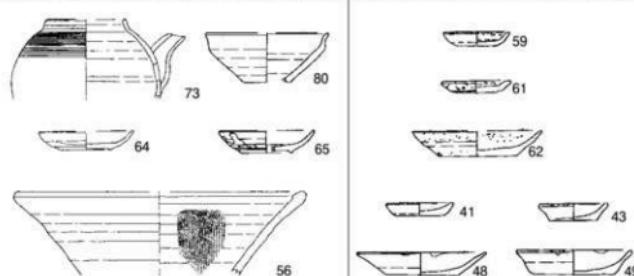
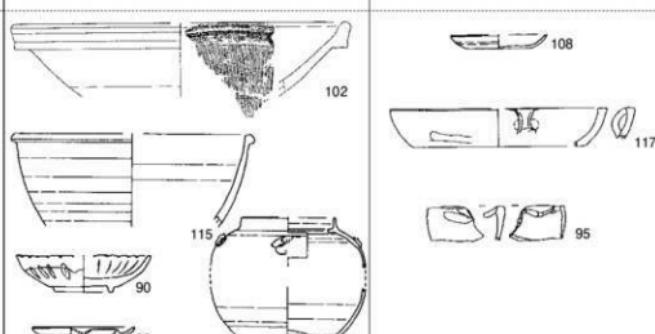
16世紀後葉から17世紀前葉⁵⁾、27⁶⁾・32・36⁷⁾は17世紀前葉のものと形状が類似している。また棟瓦が確認され始め、出土量も徐々に増加している。出土遺物は、17世紀前葉と推定できるものが主体的であり、当次面の構築時期を示すものと捉えられる。

(6) 第4次面

当次面では、石組み遺構2基、土坑7基、ピット群1か所を確認した。石組み遺構からは、残存率の良い土師質小皿及び皿が出土している。形状から17世紀中葉から18世紀代に位置づけられる土師質皿に類例が求められる⁸⁾が、時期決定には慎重な検討をする。軸方向は第2A号石組み遺構がN - 29° - E、第2B号石組み遺構がN - 34° - Eであり、第1号石組み遺構とはほぼ同じ軸方向である。出土遺物は土師質器、とりわけ皿類の出土が各次面の中で最も多く、当期に多用されていたことが窺える。また棟瓦の出土量も増加しているが、平瓦・丸瓦も多く確認でき、本瓦葺きから棟瓦葺きへ移行しつつあったことが想定できる。

表14 遺物集計表（表中の数字は各器種の破片数の合計を示す）

種別	器種	第9次面	第8次面	第7次面	第6次面	第5次面	第4次面	第3次面	第2次面
土師器 (瓶・壺)	瓶	73 (118)	36 (43)	16 (44)	13 (8)	4 (7)	11 (18)	8	(4)
	高台付壺	(3)	(6)		(1)		(1)		
	高台付桶	2							
	両台付壺		(2)	(1)					
	壺	(9)	(3)	(1)	(1)	(2)	(2)		
	短脚壺	(1)							
	瓶	2							
	壺	147 (62)	49 (16)	33 (18)	20 (7)	5 (3)	15 (7)	(1)	1
	長軸瓶	2	2				2		
	瓶	1	(3)	(1)	4 (7)	4 (26)	12 (26)	53 (92)	27 (10)
陶器 (瓶)	小壺		1	1	1	4 (2)	6 (3)	6 (4)	4 (7)
	筒型					1		2	1
	菊皿					1		1	
	有目皿						1		
	香炉						1		
	鉢		2 (1)			(1)	4 (3)	30 (2)	5 (16)
	罐	1	1		3	4	7	2	
	水鉢							1	
	蓋						1	1	
	青磁						1		
土器 (瓶・壺)	壺	1	12	6	5	12	9	16	14
	土瓶					2	1	36 (1)	10 (3)
	土瓶蓋						2		
	急須					1	2		4 (3)
	金輪蓋							2	
	水注							1	1
	うちわ							1	
	箱形容器							2 (1)	
	花生							1	
	著者							1	
土器 (盆・皿)	インク瓶							1	
	ソケット							2	
	土管								14
	皿・小皿	3	8	7	32	88	13	1	
	香炉						1		
	火鉢	(1)				(4)	4 (5)	9 (7)	3 (2)
	瓶頸	(2)	2	1 (2)	9 (6)	52 (8)	45 (8)	24 (3)	
	瓶		21	7	14 (1)	7	14		
	焼造・蓋					1		3	
	皿	1				1	7		
瓦 (剥離)	裏				3 (4)	4 (1)	13 (4)	6	
	七垣						1		
	丸瓦				9	32	274	257	317
	平瓦	37	39	94 (1)	554 (1)	479	221		
	棟瓦					192	611	2286	1750 (101)
	輪瓦及					1	44 (4)	1	
	楕円瓦				1	2	26	1	1
	板瓦瓦						28	2	
	丸瓦						2		12
	櫛形瓦						3		1
	鳥糞						22	1	
	不明						3		

次面	陶 器	土師器・土師質土器
9 中 世紀 (葉)	9	
15 世紀後葉～ 16 世紀代	8	
16 前 世紀 (葉) 17 世紀 代	7	
16 前 世紀 (葉) 17 世紀 代	6	
17 世紀前葉 18 世紀代	5	
17 世紀前葉 18 世紀代	4	
18 世紀後葉 19 世紀代	3	

第102図 各次面出土遺物の変遷（第2次面を除く）

当次面は、第5次面の上に構築されていることを考慮すれば、17世紀前葉以降から18世紀代に比定できる。

(7) 第3次面

当次面はロームを主体とする化粧土が施されており、凝灰岩の切石で構築された用排水路跡や柱穴列跡など、生活面として機能していたことが窺える遺構が確認できた。第4次面で確認された石組み遺構を明確にバックして構築していることを考慮すると、近世に二つの生活面があつたことが分かる。柱穴列跡には異なる間尺が確認でき、第4号柱穴列跡は、1間を6尺3寸（約19m）とし、第5号柱穴列跡は1間を6尺5寸（約1.98m）としている。この間尺は、前者が中京間であり、後者が京間である。統一がなされていないのは、焼失などで建て替えを行った際に、異なる間尺が採用されたことが想定できるが、今回の調査は限られた範囲であるため、明確な上屋構造の復元に至る遺構が確認できず、詳細は不明である。出土遺物は、土師質の皿類の出土量が減少し、陶器類へと使用の中心が移行している様子が確認できる。陶器は、七面焼や松岡焼など19世紀以降の遺物が確認でき、当次面が19世紀以降に機能していたことが窺える。瓦は棟瓦の出土量が飛躍的に伸び、この時期の水戸城は、棟瓦葺きの景観を城下に示していたことが想定できる。

(8) 第2次面

当次面からは、陶製土管が埋設された用排水路跡や、コンクリートを用いた土坑などが確認できた。また「師」の銘が入った師範学校に関連すると推定できる磁器が出土しており、近代以降に機能していたことが確認できた。第1B号用排水路跡は、第1A号用排水路跡の直上に構築されている。当次面で確認できた遺構は、水戸城の二の丸御殿と軸方向が近似しており、水戸城の二の丸御殿と同じ軸方向で建物が造られていたことが分かる。

2 水戸城改修史

ここでは、当地に初めて居館を築いたとされる馬場氏から、江戸氏、佐竹氏、徳川氏と、各時代の改修の歴史を中心に概観し、今回の調査で確認された、各次面について考察するための背景とする。

表15 水戸城改修年表（財團報告第329集を基に作成）

前 和	明 治		江 戸				桃 山・安 土		室 町		鎌 倉	時 代					
	1 9 4 5	1 8 8 8	1 8 7 2	1 8 7 1	1 7 9 6	1 6 6 2	1 6 3 8	1 6 2 9	1 6 2 7	1 6 2 5	1 6 0 2	1 5 9 0	1 4 2 6	1 4 0 0	1 1 9 3	西 暦	
明 治 二 十	明 治 五 十一	明 治 四	明 治 六 六	明 治 五 五	明 治 五 四	明 治 五 三	明 治 五 二	明 治 五 一	明 治 五 〇	明 治 四 九	明 治 四 八	明 治 四 七	天 正 二 九	天 正 二 八	天 正 二 七	天 正 二 六	天 正 二 五
水戸 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	水戸 城 空襲	
る。	放 火	よ は は と ん ど の 建 物 が 水 戸 城 跡 に 移 す る。	水 戸 城 廢 城														

馬場氏の居館建設から尋常師範学校の移転までの概略は表に記載する。大規模な改修としては次のようなものが挙げられる。詳細な時期は不明であるが、江戸氏は自身の居館を置いた「内城」（徳川期の本丸付近）、有力家臣や職人・商人が居住する「宿城」（徳川期の二の丸付近）を築いた。佐竹義宣は文禄2年（1593）から、まず堀や土塁の外郭整備を進め、江戸氏の頃に本丸であった場所を継続して本丸とし、宿城を置いていた場所に自身の居館を新築した。徳川期には、寛永2年～寛永15年（1625～1638）の徳川頼房による改修、明和6年（1796）の徳川治保による焼失した三階櫓や二の丸御殿の再建などが行われている。江戸氏の改修に関して、平成18・20年度に、水戸市立水戸第二中学校の校舎改築に伴い行われた発掘調査で、様々な遺構と、4mの盛土を伴う普請が行われたことが確認されており、当期の改修が大規模であったことが窺える⁹⁾。

3 各次面と改修記録の対応

明確に時期を異にするのが、近世～近代へと移行する、第2・3次面間である。これらの次面を軸に、改修の歴史を照らし合わせながら、各次面の時期を検討してゆく。

(1) 第2次面

当次面は、出土遺物や遺構から、近代の整地面であることが分かる。水戸城の廃城後、茨城県尋常師範学校が設けられており、出土遺物に同校で支給されたと考えられる遺物が出土していることから、当次面は尋常師範学校期に比定できる。明治21年（1888）に当地に移転してから、現在の茨城県立水戸第三高等学校校舎が建てられるまで、機能していたと考えられる。

(2) 第3次面

近世に整地された最後の面と考えられる。改修の記録によると、寛永15年（1638）に大規模な改修が完成し、明和6年（1796）に二の丸の火災後の改修が行われたとされており、当次面の構築時期は後者に比定できるであろう。七面焼や松岡焼など、19世紀代に位置づけられる陶器が出土していることも、時期を決定する一つの根拠となる。当次面は改修の行われた明和6年（1796）から水戸城が廃城となった明治4年（1871）まで機能していたと推定できる。

(3) 第4・5次面

第3次面の時期を、明和6年以降と考えると、当次面は、寛永15年（1638）に完成した。徳川期で最初に行われた改修の整地面であると推定できる。当次面で出土している土師質皿は、17世紀中葉から18世紀後葉に位置づけられるものと推定でき、改修の時期とも矛盾はない。改修の完成から第3次面の構築までは158年間あり、近世で最も長期間に渡り利用されていたことになる。当次面の機能していた時期は、寛永15年（1638）から明和6年（1796）と推定できる。第5次面は、第4次面に伴う基礎地業面であると考えられ、当期の改修が開始された頃の面である。

(4) 第6次面

当次面の時期は、前後の次面との関係や出土遺物から、16世紀から17世紀前半に位置づけられ、時期は佐竹氏の居城であった頃と重なる。確認できた第3号柱穴列跡の軸方向が、徳川氏入城後の二の丸御殿とは同じであり、同じ軸方向で建物が築かれていたことが窺える。徳川期の城郭構造の基礎が、佐竹期に築かれたという想定との共通性が感じられる。

(5) 第7～9次面

第7次面は、15世紀後葉から16世紀代に位置づけられる。16世紀後葉の佐竹期に位置づけられる瀬戸・美濃産陶器が出土しており、佐竹氏の頃か、それ以前の江戸氏の頃かの判断は難しいが、佐竹氏の入城直後

は改修が行われていなかったことを考慮すると、第7次面が構築されたのは江戸氏の時であり、佐竹氏が入城し、文禄2年から改修を行ったため、第6・7次面の時期が一部重なると推定される。第8次面は、時期が明確ではないが15世紀後葉から16世紀前葉と推定でき、江戸氏の頃に位置づけられるが、時期決定の根拠となる遺物が少量であるため、明確ではない。また生活面であったことを裏付ける根拠は無く、第7次面と同じ時期の地業面の可能性も考えられる。第9次面は改修が行われる以前の段階である。火葬土坑が確認できたことから、改修が行われる以前、おそらく15世紀末葉以前は、墓域であったことが想定される。第8次面から9次面にかけて、馬場氏の居館が存在していた12世紀末葉から15世紀中葉の遺物が出土しておらず、馬場氏による盛土を施すような大規模な改修の痕跡は確認できなかった。

4 二の丸御殿部屋割り図と当調査区の対応

当調査区は中世から近代までの整地の様子を確認することができた。その中でも、遺構・遺物共に多様なのが、徳川期の二の丸御殿が存在していた時に比定できる、第3～5次面である。絵図面との対応から、当調査区が二の丸御殿のどこに位置するのかについて検討してゆく。

(1) 二の丸御殿における当調査区の位置

当地が二の丸御殿跡に位置することは、現存する絵図面などから判断できる。しかし御殿のどこに当たるのかを知る手がかりは少ない。現在の地図との対応が可能な資料として、「茨城県師範学校創立五十周年記念誌」に掲載されている絵図が挙げられる¹⁰。これは師範学校と二の丸御殿を対照させたもので、烈公（徳川齊昭）時代と記載されており、幕末期のものと考えられる。御殿の詳細な部屋割りや名称は記されていないが、この絵図には縮尺と大手橋、虎口などが描かれており、現在の地図との照合が可能である。ここから推測すると、当調査区は御殿のほぼ中央部に位置すると考えられる。しかしこの絵図が実際の縮尺で描かれたものなのか、概略的に描かれたものなのかを検討することはできず、あくまでも想定の域を脱し得ない。

(2) 詳細な部屋割り図との対応

二の丸御殿の詳細を知る資料として個人蔵の水戸城部屋割図（第103図）がある。この絵図には、各部屋の名称や柱などが詳細に描かれている。当調査区は、この図の二ノ間・御書番所周辺に位置すると考えられる。部屋割図の時期は不明であるが、取り上げた二つの絵図は、部屋割りや記されている名称が共通しており、幕末期の御殿を描いたものと推定される。今回の調査では、第3次面が江戸時代後半に位置づけられ、絵図の推定時期と重なる。確認できた柱穴列跡と絵図面に描かれている柱の並びを検討したが、確認できた遺構が限られており、絵図との一致をみるには至らなかった。また石組み遺構や、火に関わる施設と想定される第24号土坑の位置や名称は確認できず、その詳細を絵図から確認することはできなかった。

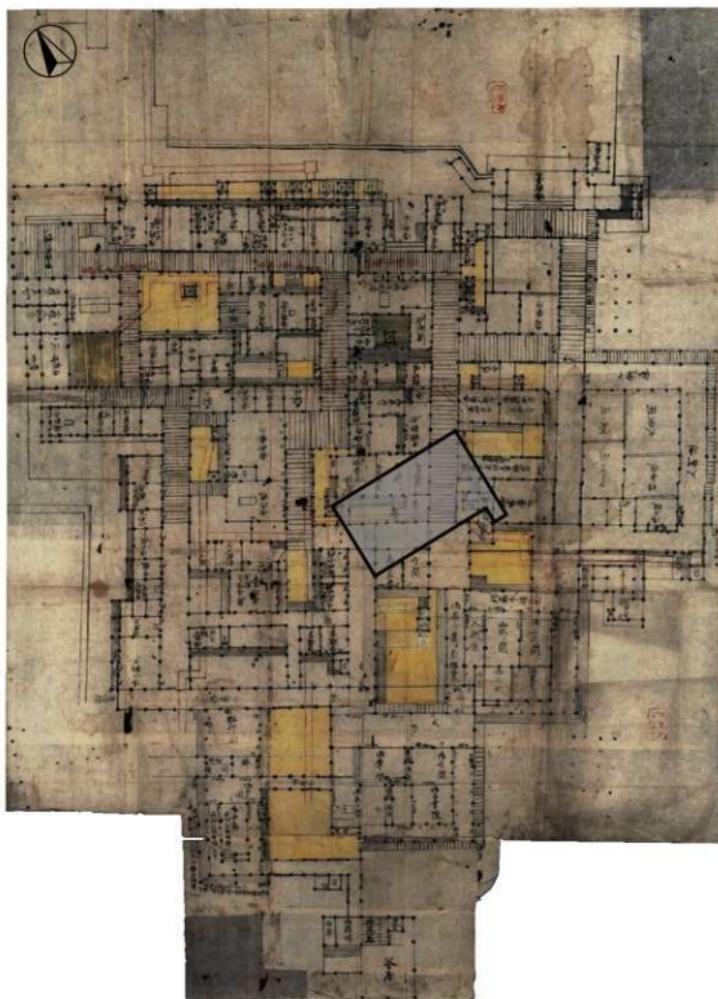
5 凝灰岩の切石を用いた遺構について

今回の調査で確認できた当遺跡の特徴的な遺構として、凝灰岩の切石を用いた遺構がある。第1・2A・2B号石組み遺構、第1A・2号用排水路跡、第1号石敷き遺構がそれである。これらの遺構は、第3～5次面で確認でき、いずれも近世に位置づけられる。詳細は本文に記載しているので、ここではその類例や性格について検討してゆく。

(1) 石組み遺構

当初、石材が組まれている状況から井戸跡を想定した。しかし最も深さのある第2A号石組み遺構で深さ約1.7mで底面に達し、湧水もなく、井戸跡とは考えにくい。次に同遺構で、石組みの北東部に張り出し状

の石組みが構築されており、張り出しが金隠しとしての機能を有していると考え、トイレ遺構を想定した。石組み内の土壌サンプルを採取し、寄生虫卵が検出できるか分析を行ったが、付章に記載したように、寄生虫卵は検出されず、土壌からトイレ遺構と性格づけることはできなかった。トイレ遺構には、汲み取りが可能なようにならや桶が設置されている例が多く、本跡も同様であるならば、土壌から寄生虫卵が検出されなかつ



第103図 水戸城部屋割と調査区の対応図（約1／800）（網伏せ部が調査区）

たことも不思議ではない¹¹⁾。しかし深さ1.7mとトイレとしては深く、トイレ跡とするにも疑問点が多い。石組み造構が確認されている遺跡として、東京都の汐留遺跡や尾張藩上屋敷跡遺跡がある。汐留遺跡で確認された石組み造構の性格は明らかではないが、尾張藩上屋敷跡遺跡で確認された石組み糸は、石組み構と連結して、雨水の一時的な貯水や排水、またトイレの便槽として用いられていたとされており¹²⁾、当遺跡の石組み造構も広い意味で糸として捉えるが適当であろう。

(2) 用排水路跡

今回の調査で、2条の凝灰岩の切石を用いた用排水路が確認できた。水戸藩に関わる凝灰岩を用いた水路跡ということで、笠原水道との関連が想起される¹³⁾。笠原水道の石樋が底石の両側面に側石を立てて設置されているのに対して、今回の調査で確認できた第1A号用排水路跡の石樋は、四字状に切り出された石材が用いられている。また工具痕も笠原水道の石材が5cm程度であるのに対して、本跡で確認できた工具痕は幅2.6cmと狭く、差異が認められる。斜位に工具痕が確認できることやその幅などは、当遺跡の石組み造構や石敷き造構に近い。用水路・排水路のどちらで用いられていたのかは判然とはしないが、四字状に切り出された形状が、排水が漏れ出さないための処置と捉えるならば、排水路と考えられる。笠原水道との形状の違いは、用途が異なるために生じたものと推測される。第2号用排水路跡は、笠原水道同様、底石と側石が分かれていたと考えられるが、遺存状況が悪く、詳細及び性格は明確でない。

5 おわりに

今回の調査で、中世から近代にかけて繰り返されてきた水戸城跡の改修の様子を、確認することができた。特に近世に関しては、徳川氏入城以後の改修の記録との一致がみられ、また二の丸御殿の様子を垣間見ることができる石組み造構や用排水路を確認できたことは、近世城郭を知る上で貴重な資料となる。改修の記録と整地面の整合性は、調査範囲が限られており、また中世に関しては出土遺物が少量であることから、強引に結びつけた感は否めない。今後の調査で詳細が確認され、今回の調査結果が修正されながらも、水戸城の全容解明の一端を担うことができれば幸いである。

註

- 1) 狩川真一編『日本の中世幕』高志書院、2009年3月
- 2) 芳賀友博他「小幡城跡・前新堀B遺跡」調査訪山群塚・藤山塚・東開東自動車道水戸線〔茨城南IC～茨城JC〕建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」茨城県教育財团文化財調査報告書第34集、2009年3月
小幡城跡の第1号掘跡、第144号土坑から出土している土師質小皿の形状に類似している。
- 3) 標柱宮行「(仮称)水戸静水場予定地内埋蔵文化財調査報告書白石道跡」茨城県教育財團文化財調査報告書第82集
1993年3月 第4号溝跡、第8号井戸跡から出土している内耳銅の形状に類似している。
- 4) 離澤良祐「施釉陶器生産技術の発展」全日本シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 2005年9月 藤澤氏の瀬戸・美濃大窯製品編年に準拠する。
- 5) 註4に同じ
- 6) 水越信吾「中世末から近世初頭のかわらけと内耳銅」江戸道跡研究会第21回大会 発表要旨 近世江戸のはじまり
江戸道跡研究会 2008年2月 東京駅八重洲北口道跡の1264号道跡、丸の内三丁目道跡-52号土坑出土の土師質皿の形状に類似している。
- 7) 稲田義弘、「新善光寺跡・宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財團文化財調査報告書第25集、2006年3月 第2号溝跡出土の土師質小皿の形状に類似している。
- 8) 註6掲載の日本橋一丁目道跡-10・-11面・-12面出土の土師質皿の形状に類似している。
- 9) 水戸市教育委員会「水戸城跡(第5地点・第6地点)現地説明会資料」2008年11月
- 10) 田口美雄「茨城県師範学校創立五十周年記念誌」茨城県師範学校内外城校友會 1928年10月
- 11) 大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」東京美術 1997年5月
- 12) 江戸研究会編「江戸の大名屋敷」吉川弘文館 2011年2月
- 13) 水戸市教育委員会「笠原水道-第6次、10次、11次発掘調査報告書」水戸市埋蔵文化財調査報告書 第30集 2010年3月

参考文献

- ・茨城県考古学会中世シンポジウム実行委員会「茨城県考古学協会中世シンポジウム 茨城中世考古学最前線～編年と基本資料 第1分冊 発表資料編 基本資料編〔県北・県央・龍行・県西地区〕」2011年1月
- ・江戸出土陶磁器研究グループ「シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 1 発表要旨」1992年12月
- ・(財) 東京都生涯学習文化財「尾張藩上屋敷跡調査」東京都埋蔵文化財センター調査報告書 第97集 東京都埋蔵文化財センター 2001年3月
- ・汐留地区遺跡調査会「汐留遺跡・汐留跡埋蔵文化財発掘調査報告書」1996年3月

付 章

水戸城跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

水戸徳川家の居城として知られる水戸城跡は、那珂川が形成した沖積低地（那珂川低地）および那珂川の支流である河川が形成した沖積低地によって造られた台地上に立地する（早川、2004）。

本報告では、水戸城内の発掘調査で検出された近世の石組み遺構の性格（トイレ遺構の可能性）、石組み遺構および桶理設土坑から出土した施設材に由来するとみられる木材の樹種の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

1. 寄生虫卵分析

1. 試料

試料は、石組み遺構（第2A号石組み遺構）内より採取された暗褐色を呈する粘土質シルトである。なお、今回の分析調査では、寄生虫卵分析の工程で確認できる花粉・胞子類の産状も含め検討を行った。以下に、分析方法を示す。

2. 分析方法

寄生虫卵分析は、金原・金原（1992）等を参考に処理を行った。堆積物 1ccあたり 10,000 個体以上検出されるような場合（金原・金原、1994）は簡便な方法で観察可能である。ただし、分析に供された土壤試料の状態から、寄生虫卵の数が少ない可能性が想定されたため、花粉分析に準じた方法で寄生虫卵の濃集を行った。

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容し、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵ならびに随伴する花粉・胞子化石を同定・計数する。結果は検出個数の一覧で示す。さらに、花粉化石は定法に基づいて出現率を計算し、図示する。

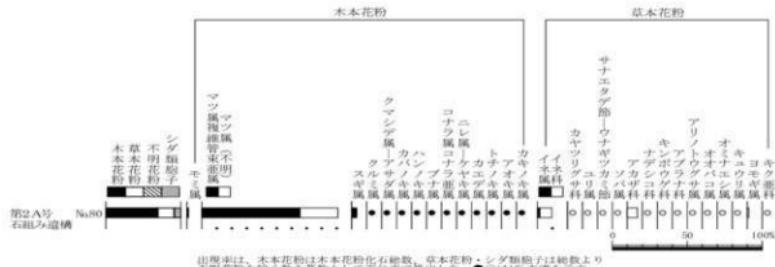


図1. 花粉化石群集

表1. 花粉分析結果

第2 A号石組み遺構 No.80	
分類群	
木本花粉	
モミ属	3
マツ属複数管束東亜属	171
マツ属(不明)	66
スギ属	9
クルミ属	1
クマシデ属-アサガ属	1
カバノキ属	2
ハンノキ属	1
ブナ属	1
コナラ属コナラ亜属	1
ニレ属-ケヤキ属	1
カエデ属	1
トチノキ属	1
アオキ属	1
草本花粉	
カキノキ属	1
イネ属	6
イネ科	30
カヤツリグサ科	1
ユリ属	1
サンエタデ節-ウナギツカミ節	2
ソバ属	1
アカザ科	25
ナデシコ科	2
キンポウゲ科	1
アブラナ科	3
アリノトウグサ属	2
オオバコ属	1
オミナエシ属	1
キュウリ属	1
ヨモギ属	4
キク亜科	1
不明花粉	1
シダ類胞子	
ゼンマイ属	1
他のシダ類胞子	31
合計	
木本花粉	261
草本花粉	82
不明花粉	1
シダ類胞子	32
統計(不明を除く)	375
堆積物 1ccあたりの個数	
花粉・シダ類胞子	1400
寄生虫卵	-

3. 結果

結果を表1、図1に示す。土壤試料（第2 A号石組み遺構No.80）からは寄生虫卵は検出されなかった。花粉化石は、保存状態が良い個体と悪い個体が混在し、堆積物 1ccあたりの花粉量は 1400 個/cc 程度である。これは、花粉化石の保存が良い沼澤域の泥質堆積物に比べると 1/10 以下である。また、花粉化石の保存状況から堆積後の経年変化や風化等の影響を受けていると考えられる。

確認された花粉化石は、木本花粉が多く、その大部分はマツ属（特に複数管束東亜属）である。この他にスギ属、コナラ属コナラ亜属、カエデ属、トチノキ属、カキノキ属等も検出される。草本類は全体的に少ないが、その中でもアカザ科とイネ科が比較的多い。なお、イネ科花粉中には栽培種のイネ属が僅かに認められたほか、栽培植物のソバ属やキュウリ属等も検出される。

4. 考察

今回の分析調査では、石組み遺構（第2 A号石組み遺構）埋積物からは寄生虫卵は検出されなかった。そのため、寄生虫卵の産状からトイレ遺構の可能性を言及することは困難である。

なお、同試料における花粉化石群集は、木本花粉を主体とし、マツ属が多く、栽培種の種類を含むという特徴を示した。このような花粉化石群集は、関東地方の近世の堆積物では普遍的におこる組成であり、マツ属の多産は近世以降の植生破壊等により、マツの植林や二次林が関東地方で増大したことに由来する（辻ほか、1986など）と考えられる。また、マツは瘦せ地でも育ち成長が早く、木材は有用で樹形も美しいことから、庭木や護岸用として、植栽される場合も多い。中世末から近世の

城郭や庭園ではマツがよく植えられていたことから（飛田、2002）、近傍の植栽に由来する可能性もある。カキノキ属も自生する種類が含まれるが、植栽されることが多い種類であることから、マツ属と同様に植栽の可能性がある。この他に確認された木本類は、現在でも周辺の山野に生育する分類群であることから、周辺の森林植生に由来すると考えられる。一方、イネ科、アカザ科、ヨモギ属等の草本類は、人里等の開けた場所に草地をつくる雑草等であることから、城内や周辺に生育していたと考えられる。また、イネ属、ソバ属、キュウリ属等の栽培植物の花粉化石が検出されたことから、周辺域における栽培も示唆される。

II. 樹種同定

1. 試料

試料は、石組み遺構（第2A号石組み遺構）から出土した（柾目）板状の木片と、桶埋設土坑（SK24）から出土した（板目）板状の木片の2点である。石組み遺構の木片は、遺構内より折重なるように出土しているが、状態が悪く、細片化しているため、本来の大きさや形状は不明である。また、桶埋設土坑から出土した木片は、出土状況から桶側板と推定される。

2. 分析方法

剥刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter他（2006）を参考にする。

3. 結果

石組み遺構（第2A号石組み遺構）および桶埋設土坑（SK24）から出土した板状の木片は、いずれも針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直樹脂道は晚材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

4. 考察

石組み遺構（第2A号石組み遺構）および桶埋設遺構（SK24）から出土した板状を呈する木片は、いずれも針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属の木材は、軽軟で加工は容易である一方、強度・保存性が比較的高いことから、加工や保存性を考慮した木材利用の可能性が考えられる。

茨城県内では、稻岡遺跡（つくば市）や宍戸城跡（笠間市）等で16～17世紀頃の桶を対象とした分析調査が実施されており、針葉樹のヒノキが確認されている（財団法人茨城県教育財團、2002；能城、2006）。また、近世のマツ属複維管束亜属の利用についてみると、鉢形地区条里遺跡（旧鹿島町）では板状製品、棒状製品、杭、鋸柄、下駄、叶南前B遺跡（北茨城市）では井戸枠、宍戸城跡では敷居、柱、下駄、不明品等に確認されている（鈴木・能城、1990；大成エンジニアリング株式会社、2005；能城、2006；パリノ・サーヴェイ株式会社、2006）。これらの事例から、当該期には建築材をはじめとして土木材や施設材等のほか、身近な木製品にもマツ属が利用されていたことが示唆される。

引用文献

- 早川唯弘、2004、I 地形分類図、土地分類基本調査 水戸、茨城県農地局農村環境課、5-25。
金原正明・金原正子、1992、花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構－右京七条一坊西北坪－、奈良国

立文化財研究所, 12-15.

金原正明・金原正子, 1994, 堆積物中の情報の可視化, 可視化情報, 14, 9-14.

能城修一, 2006, 宍戸城跡出土木製品の樹種, 新善光寺跡・宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書, 茨城県教育財团文化財調査報告第 256 集, 茨城県水戸土木事務所・財團法人茨城県教育財团, 159-160.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006, 出土した木製品の樹種, 宍戸城跡 - 店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-, 株式会社コメリ・山武考古学研究所, 13-14.

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

鈴木三男・能城修一, 1990, 材同定, 鉢形地区条里遺跡発掘調査報告書, 鹿島町の文化財第 66 集, 鹿島町教育委員会, 78-83.

大成エンジニアリング株式会社, 2005, 叶南前 B 遺跡井戸跡 SE01 出土井戸枠の樹種同定, 県営は場整備事業神岡上地区埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集 富士ノ腰遺跡・神岡遺跡・叶南前 A 遺跡・叶南前 B 遺跡・古屋敷遺跡・仁井谷遺跡, 北茨城市教育委員会, 34-38.

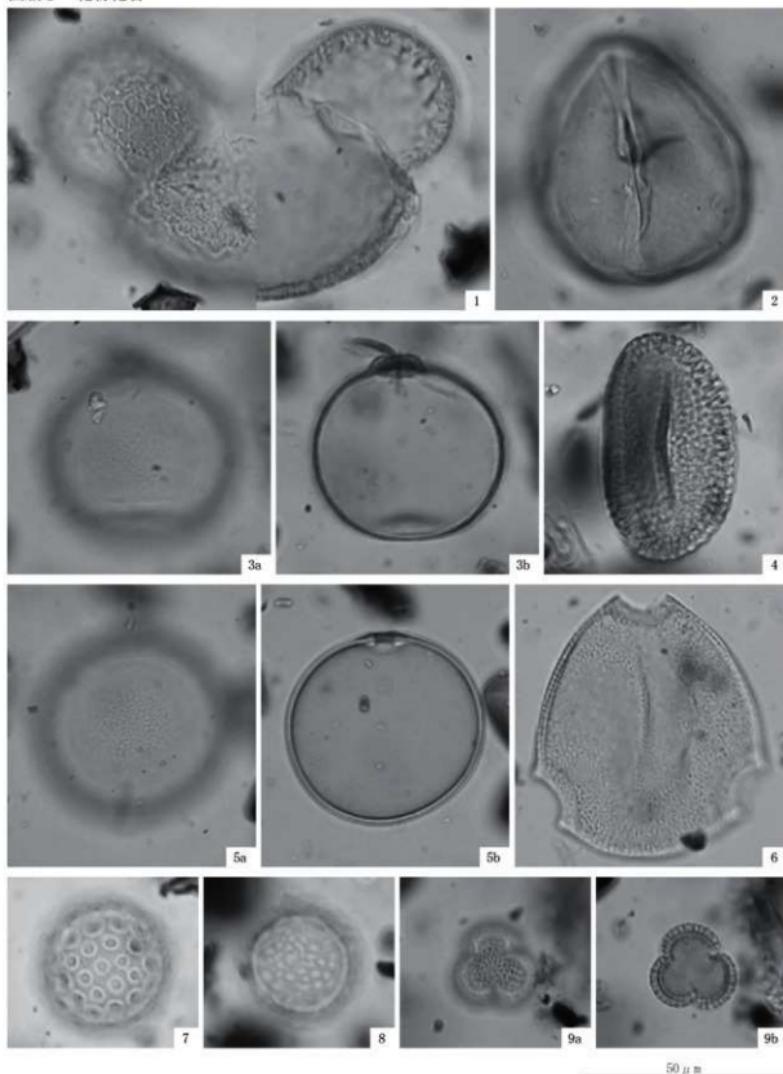
飛田範夫, 2002, 日本庭園の植栽史, 京都大学学術出版会, 435p.

辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人, 1986, 文化財総合調査 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第 2 集 館林の池沼群と環境の変遷, 館林市教育委員会, 110p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

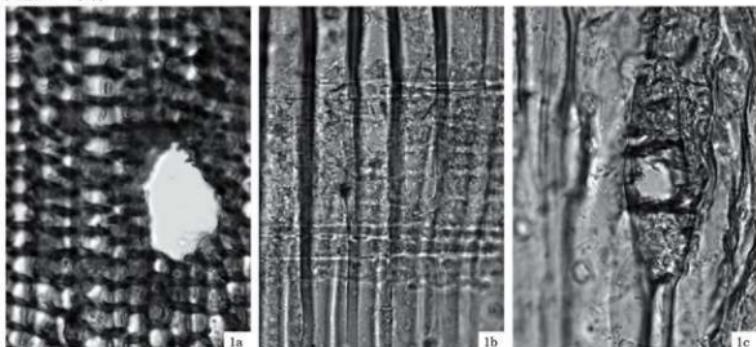
財團法人茨城県教育財团, 2002, 稲岡遺跡, 茨城県教育財团文化財調査報告第 187 集, 茨城県教育財团, 28p.

図版 1 花粉化石



1. マツ属複維管束亞属(第2A号石組み造構:No.80)
2. カキノキ属(第2A号石組み造構:No.80)
3. イネ属(第2A号石組み造構:No.80)
4. ソバ属(第2A号石組み造構:No.80)
5. イネ科(第2A号石組み造構:No.80)
6. キュウリ属(第2A号石組み造構:No.80)
7. アカザ科(第2A号石組み造構:No.80)
8. オオバコ属(第2A号石組み造構:No.80)
9. アブラナ科(第2A号石組み造構:No.80)

図版2 木材



1. マツ属複維管束垂属性(SK24:No.41)

a:木口, b:柾目, c:板目

100 μ m:a

50 μ m:b, c

写 真 図 版



調査区北壁土層断面



第9次面完掘状况



第1号住居跡完掘状况



第1号住居跡竈遺物出土状况



第3号溝跡遺物出土状况



第1号火葬土坑完掘状况

PL2



第 8 次 面
完 岩 状 況



第 7 次 面
完 岩 状 況



第 1 号 井 戸 跡
完 岩 状 況

第 6 次 面
完 堀 状 況



第 2 号 井 戸 跡
完 堀 状 況



第 1 号 石組み遺構
完 堀 状 況





第4次面
完掘状況



第2A・2B号石組み
遺構、第24号土坑
完掘状況



第2A号石組み
遺構完掘状況



第2A号石組み遺構板材出土状況



第2B号石組み遺構遺物出土状況



第24号土坑遺物出土状況



第24号土坑桶出土状況



第36号土坑遺物出土状況



第36号土坑完掘状況

PL6



第3次面
完掘状況



第1A号用排水路跡
凝灰岩出土狀況



第1A号用排水路跡
遺物出土狀況

第1号石敷き遺構
完 堀 状 況



第1号石敷き遺構
遺 物 出 土 状 況



第2号用排水路跡
完 堀 状 況





第2次面完掘状況



第1B号用排水路跡完掘状況



第1B号用排水路跡レンガ製樹出土状況



第1号道路跡花崗岩出土状況



第5号土坑遺物出土状況



第1号住居跡、第1号井戸跡、第3号溝跡、第36・164号土坑、第4・5号ピット群、造構外出土土器
[第4～9次面]

PL10



第2A号石組み遺構-41



第2A号石組み遺構-42



第2A号石組み遺構-43



第2A号石組み遺構-45



第2A号石組み遺構-46



第2A号石組み遺構-47



第2A号石組み遺構-50



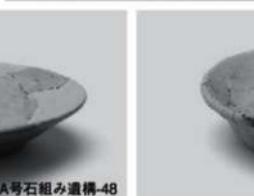
第2A号石組み遺構-51



第2A号石組み遺構-56



第2A号石組み遺構-48



第2A号石組み遺構-49



第2B号石組み遺構-59



第2B号石組み遺構-60



第2B号石組み遺構-61



第2B号石組み遺構-62



PG6 P6-39

第2A・2B号石組み遺構、第6号ピット群出土土器 [第4次面]



PG 5 P25-29



SK37-74



SK36-71



SK36-72



SK24-63



第2号用排水路跡-95



第1号石敷き遺構-106



I2J9-117



SK5-129

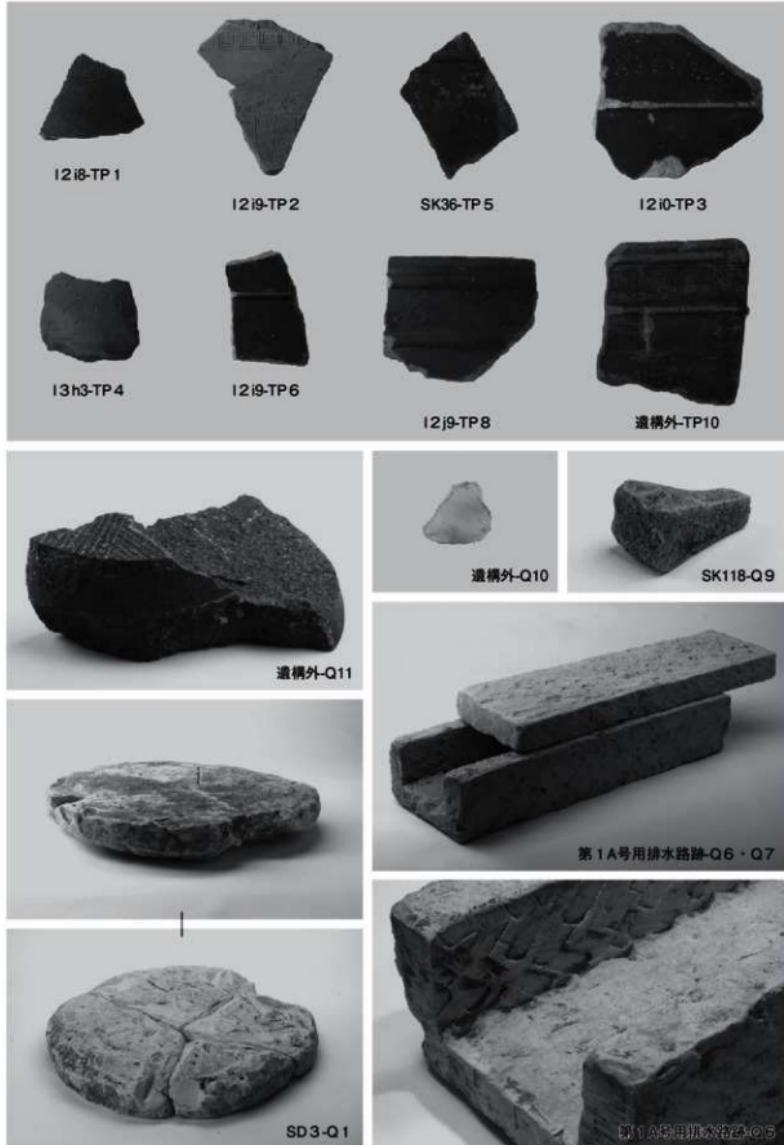


第6号瓦溜まり-121

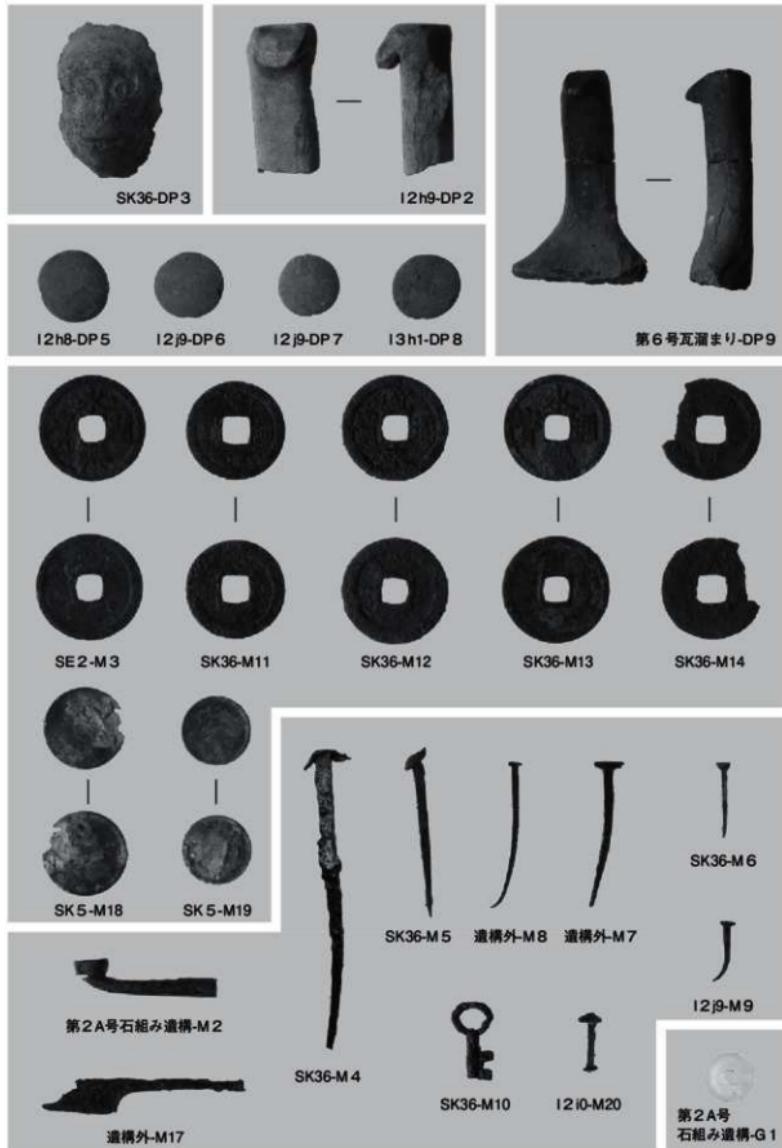


SK5-131

第2号用排水路跡, 第1号石敷き遺構, 第6号瓦溜まり, 第5・24・36・37号土坑, 第5号ピット群, 遺構外出土土器 [第2~5次面]



第36号土坑、遺構外出土土器、第3号溝跡、第1A号用排水路跡、第118号土坑、遺構外出土石器・石製品（削器・茶臼・砥石・石樋・蓋）【第1・3～5・7・9次面】



第6号瓦溜まり, 第36号土坑, 遺構外出土土製品（五徳・泥面子・弾基石）, 第2号井戸跡, 第2A号石組み遺構, 第5・36号土坑, 遺構外出土金属製品（釘・鍵・鉢・剃刀・煙管・銭貨）, 第2A号石組み遺構出土ガラス製品（小玉）[2~6次面]



第2A号石組み造構、第36・164号土坑、第3号柱穴列跡、第4号ピット群、造構外出土瓦（軒丸瓦・軒平瓦・輪違瓦・棟込瓦）【4～6次面】



第1号道路跡、第1号石敷き造構、第5・14・24号土坑、造構外出土瓦（鬼瓦・軒平瓦・軒棧瓦・板堀瓦・平瓦・軒込瓦・不明瓦）[2～4次面]



第2A号石組み遺構、第36号土坑、第4・5号ピット群、遺構外出土土器〔第4～7次面〕



SK36-73



I2i9-80



I2j9-85



SK14-109



第1号石敷き遺構-97



第1号石敷き遺構-96



|



第1号石敷き遺構-101



第2号用排水路跡-93



第1号石敷き遺構-99



第1号石敷き遺構-105



SA 4 P7-88



I2j9-116

第2号用排水路跡、第1号石敷き遺構、第14・36号土坑、第4号柱穴列跡、遺構外出土土器〔第3・4次面〕

PL18



第1A号用排水路跡-90



第1A号用排水路跡-91



遺構外-118



I218-115



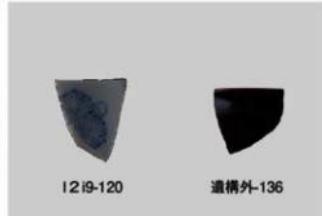
第1B号用排水路跡-119



SK 5-128



SK 5-130



I219-120

遺構外-136



遺構外-144



遺構外-145

第1A・1B号用排水路跡、第5号土坑、遺構外出土土器【第1～3次面】

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows XP
Home Premium.ServicePack1
編集 Adobe InDesign CS4
図版作成 Adobe Illustrator CS4
写真調整 Adobe Photoshop CS4
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
画面類 EPSON ES-1000G
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第362集

水 戸 城 跡

茨城県立水戸第三高等学校図書館
改築工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成24(2012)年 3月14日 印刷

平成24(2012)年 3月16日 発行

発行 財团法人茨城県教育財团

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒311-4152 茨城県水戸市河和田1丁目1704番12号

TEL 0120-23-1473